

結果とを立つるのは、假りに終りと始めを立つるとか、或は有形無形を立つるとかいふ、只賓主所を換へるだけです。恚ういふことを哲學者に言はせると、一つの辯證法とでも言ふであります。即ち此れあれば彼れあり、此れなければ彼れなし。彼れあれば此れあり、彼れなければ此れなしといふ場合に、其總ての論理法で、一體の者に及ぼして見ると、成程哲學に當て欲めても、臨濟の立て方と變つて居りませぬから、哲學者は哲學の一種であるといふ工合に説くこともあります。けれども吾々はそれだけでは満足することはできません。それは大體臨濟に於て、恚く「四料簡」を立てたといふのは、これは正しく一つの法を示しただけであらうあります。法を使ふ所に於ては、絶對的に人と言はうが自己と言はうが差支ない。臨濟の宗意は此處であります。元より對待を絶した所の、一つの活きたる所の眞理を、暫く「四料簡」に依つて、自由自在に使用ひ廻はすのであります。だから一つの眞理を、四通りの方面から見たと言ふても可い。即ち前より、後より、左より、右より見たのであります。例せば一つの富士山ではあるが、其絶頂に登れば、對待を絶してゐるが、併し其眺める方面々に依りて、即ち駿河と、甲斐とは、眺める趣きが異つてゐます。假りに之れを、昔から今迄の西洋の哲學に當て欲めて見ると、「奪人不奪境」といふのは、唯物論に似たことに爲ります。それから「奪境不奪人」といふと、唯心論の趣きに似てゐます。それから「人境俱不奪」といふと、唯理論といふても可からう。又絶對論にも當るであります。それから「人境俱不奪」といふは、一元論又は相對論とい

ふやうなもので、一方で一元といへば、一方では二元論といふやうに、凡そ西洋東洋の哲學者の説が今に至るまで、歸着するところがない。一元論者は、何處迄も總ての宇宙を、一元で觀察しやうと思ひ、又二元論者は、二元で總ての宇宙を觀察しやうとする。唯心論者も、唯物論者も亦然りで、これは水火相容れざるものゝ如くに、固執して居り、甚だ窮屈千萬であります。臨濟の眼から見れば、最も窮屈であります。此處に至ると、臨濟は自由なもので、或る時は「奪人不奪境」といひ、或る時は「奪境不奪人」といひます。即ち唯心論を以て、唯物論を否定することもあれば、唯物論を以て、唯心論を否定することもあります。又一元論者を以て、二元論者を否定することもあれば、二元論を以て、一元論を否定することもあります。これを佛法の言葉でいふと、即ち掃蕩門、又は遮情門といひ其方から言へば、互ひと互ひに否定するといふ場合があります。若し又表徳門即ち建立門から言へばこれは互に許すといふことがあつて、即ち唯物論を叩いて見れば、唯心論は離れて居らず伴ふて又唯心論を叩いて見れば、唯物論も伴ふてゐて、切れなく爲つて居りませぬ。又二元論と一元論とは、互に付いて廻はつてゐるといふ理屈で、即ち互に助け、互に爲すといふことに爲ります。即ち奪ふ時には一切奪ひ、與へる時には、總て與へるといふ遣り方があります。

我れ一人の境涯

此『臨濟錄』一部は勿論のこと、臨濟禪師が一生涯、人の爲めに法を扱ふことは、これを自由自在に振り廻はしたので、これといふ者に依つて居らない。或る場合は「如何なるか是れ佛」と言へば、直ちに一棒を施し、又一喝を下すといふやうに、併し此一喝や、一棒を振り廻はすところの形や、言語の上で、其的意を見やうとしたならば、決して禪の禪たる本領を見ることは能きませぬ。それでは等のことを合點しないところの者は、臨濟は何もかも奪ふて、否定するから、西洋にある懷疑論者のやうだと言ふものがあるかも知れぬが、決して然うではない。何故なれば、肯ふ時は肯ひ、許す時は許す底の、一定の法がある。それでは獨斷論者かといふに、然うではない。一定の者を固執し、固定しては居らない。其邊を見て貫はなければならぬ。然ういふことは、文字の上に表はれて居らぬが、兎に角活きたる禪意を會して置いた。これを見るに、或る時は春の景色で、百花爛熳と咲き亂れ鳥も歌ふといひ、或る時は夏の景色で、或る時は秋の景色で、天地蕭殺として、木の葉も、舞ひ散るといふ。然うした天地自然の現象も、宗旨の扱ひから見れば、禪意を會得したも同じです。此『四料簡』を、外交上に使つたならば、可からうといふ者もあるが、此『四料簡』を、一つの曲尺や、ぶ

んまはしと見ても不可ない。此『四料簡』は、元來一心を以て萬事に向ひ、臨機應變自由に取扱ふのであるから、これを樽俎折衝の上にも、又商賣の掛引上にも、又互ひの交際上に就いても、吾々の一擧手、一投足の上にも自由に使ひ、必ずしも一喝を吐き、一棒を下さなければならぬといふ譯ではありませぬ。即ち佛と問へば『乾屎橛』とか、『麻三斤』とか答へなければならぬといふ鑄形的では、此眞意を會することは能きませぬ。

『有時奪人、不奪境』即ち或る場合は、心とか、我とかいふものを、全然奪ふて了ふと、萬境がズラリと現はれてゐる。これが所謂甲あれば乙あり、乙なければ甲なしといふことに、當て彼めて見ても可い。又原因結果に見ても可い。即ち萬境が立るといふと、人は兎の毛の先きほど立たぬ併しこればかりでは眞理ではない。即ち眞理を甲乙いろくの方面より見たから、有時にはと斷つてゐる。これは一寸一つ咲いてゐるところの草花でも然うであります。別段百合には限らぬが、露を帯びてゐる朝顔の花を見ても、萬境を代表してゐます。其處に至りてはソロモンの榮華も、奈良朝の榮華も、此一つの朝露に咲いた花にも及ばぬ程であります。即ち萬境に現はれてゐます。彼の山の巍々と聳えてゐる有様、又河の滔々と流れてゐる有様、鳶の天に戻り、魚の淵に躍る有様、皆然うであります。これを『奪人不奪境』といふのであります。又或る場合は、全然地位を變へて、乙あれば甲あり、乙なければ甲なしといふことを、『奪境不奪人』に當て彼めて見ると、一切の境を奪ふて、一切

の人を奪はぬことに爲る。禪者が平素言ふことであります。又吾々も言ふことであります。此世界に土一と甜めもない、此本堂には誰れも居らぬといふと、一寸悟りくさいやうに思はれるかも知れぬが、悟りでも何んでもない。他の教理の天台の空假中にも、華嚴の四法界にも、此場合はあるのです。兎に角境を奪ふて、人を奪はぬことに爲ると、所謂『宇宙無二雙日、乾坤只一人。』といふ句があるが、其趣であります。一切萬境を奪つて、我一人といふ境涯、即ち唯我獨尊の境涯といふのは此處であります。事を成す上にも然うであります。或る一つの仕事を成し遂げやうとするには、『奪境不奪人』の境界で往かねばなりません。即ちナポレオンの『豈に我れを遮るのアルプス山あらんや』の意氣であります。

次ぎの『人境俱奪』、これも同じことであります。甲なければ乙なし。乙なければ甲なしといふ有様で、諸法といふものは、總て相對であります。善があつて悪が立ち、人といふものがあつて境が立ちます。總て能認する意識があるから能認せらるゝものがあります。能認せらるゝものがあるから、能認する意識が立つやうな理由で、これは互に倚りかゝつて、持ちの持たれつゝしてゐます。それを解き離すと『人境俱奪』で、人も境も立たぬことに爲ります。所謂諸法無自性であります。次ぎは第四番に現はれて來ます。以上説くところと正反對で、『人境俱不奪』で、即ち甲あれば乙あり、乙あれば甲ありといふ。これが人は境に依つて立ち、境は人に依つて立つ鹽梅であります。此『四料簡』は、

一種の學理を成り立たせたものではありませぬ。自然現象をいひ表したもので、吾々の心理作用は總て此處にあるのです。これで先づ句面は解つたであらうが、實は吾々の本領ではない。ほんの蛇足に過ぎない。

禪宗の一つの特色

次ぎに問答に就いて説くが、これは人が出て來て、問ふたのであると見ても可いが、自問自答と思ふても可い。兎に角問答體に出來てゐます。即ち第一が、

『如何是奪人不奪境、師云煦日發生、舖地錦纓、孩垂髮白、如絲』

で、納が前に説いたやうな迂遠な辯は、臨濟禪師は弄されませぬ。此文字言句程便利なものはありませんが、大いに又語弊があるのです。總て學理といふことは、遺憾なるは多く文字言句に、ひツ付いて了ふて、『四料簡』と言ふも、直ぐ其規則に絡まれて了ふ。大體吾宗に言句なく、更に一法の他に興ふるなしといふ、其處から來てゐるのであるから、饒舌する時には、悉く世界を一枚の舌として饒舌するのです。だから總て詩的に舒布する有様、如何なる理屈も、届かぬところから來てゐます。それから自然を歌ひ出し、自然の儘を感じて、接したところを諷ひ出すので、所謂言句を絶し、見聞思慮を

離れたところから出て来てゐる。それ故詩的の考へがないと、禪宗語録は薩張り趣味が解りませぬ。詩の境界、詩の意味が解らなければならぬ。其處が禪宗の一つの特色であつて、今同じ佛敎の中でも教相的になると、道筋を立て、論じてあります。それに反して、此方は不規則のところ、即ち無造作の所に、天真爛漫の妙を示すといふ。だから詩の語句に就いては、自分と自分で、能く練つて考へて見なければなりません。それで此答への句面を簡單に言ふと、煦日とは暖日といふも同じことで、春に爲ると地に舖く錦で、古歌にもある通り『見渡せば柳櫻をこきまぜて、都ぞ春の錦なりけり』此境涯には、己といふ人といふものは少しも立つて居らぬ。それで萬境は直ちに原因といふ有様を述べて、『櫻孩垂髮白如絲』人を言ふやうであるが、櫻孩は即ち生れたばかりの赤兒、然るに白髮といふは、赤兒にない筈である。此處が即ち人を奪ふてゐる。恚ういふところに、言句の妙を現はしてゐるのであります。老子は白髮で生れたといふが、それに拘らない。即ち『櫻孩垂髮白如絲』直ちに人を奪ふて、境を奪はぬ有様が現はれてゐます。それから次に、『如何是奪境不奪人、師云王令已行天下徧將軍塞外絕煙塵』

洵に今日の狀態が、現實に現はれてゐるやうです。王令が一たび行はるれば、誰れ一人背く者はない天子の掌中に、一切の主權を握つてゐる。それと同時に、帝王の信任を得て、將軍たる職權を行ふ時には、此句面の通り、塞外には將軍が令を専らにして、誰れ一人反抗するものがない。煙塵を絶すと

いふことは、煙塵は物騒といふ程で、昔は戦争があると狼火を揚げるから此熟字が出来た。即ち將軍の命令には、誰れ一人立て衝く者もなく、天子の領内には、誰れ一人王令を遵奉せぬ者はない。言はば日本五千萬人、上御一人で、しろし召して居らるゝといふ、全く御一人である。それから次に

『如何是人境兩俱奪、師云并汾絶信獨處一方』

此并汾は、當時の支那で、北方にあつた國で、一向政令の行き届かぬ所であつて、此并州汾州は、全然中國と懸絶してゐて、音信も絶えてゐるといふ有様、して見ると、人といふものも、境といふものもある如く見ゆるが、其用を爲して居らない。其働も爲して居らない。だから之れを俱奪といふことを言ひ現はしました。それから次に、

『如何是人境俱不奪、師云王登寶殿野老謳歌』

是は人も境も、各々自由を恣にしてゐる有様であります。恰も仁徳天皇が『高き屋に登りて見れば煙立つ、民の籠は賑はひにけり。』と御詠あつた御和歌と、此語句とが殆んど相應して居ります。仁徳ある國王が、寶殿に登りて眺むれば野老謳歌すと、野老といふても、農業者ばかりではない。一般の人民が、其業に勵み、其業を樂んで、國王も一般人民も眞理の徳を分けて、互に奪つて居らぬ。互に相許してゐる有様は、此簡單なる詞で、言ひ現はしてあります。偶々佛法の大意を尋ねると、一棒一喝の上に、此四つを示してゐることがあります。『臨濟錄』を精讀して見ると、其場所々に依つて

此『四料簡』を自由に使ひ廻はしたことは、掌を指す如く、能く分つて居ります。どうか見て貰ひたいものです。

寺々を通りぬけたり花盛
山寺や五色にあまる花御堂
尼寺の鉦からつゞくきぬた哉
此寺は庭一ぱいの芭蕉かな

白 也 蓼 白
蕉 有 太 雄

禪は實參實究

白樂天と如滿禪師

禪は哲學でもなければ、心理學でもない。哲學も、心理學も共に、禪といふものの中に藏められるか知らぬが、禪は哲學で解釋されるものでなく、又心理學で解釋されべきものでもありません。禪は實際であります。活きたる事實の問題であります。だから、古からの禪者は、悉く會文解義を捨て、實參實究して居ます。昔支那唐の世に、白樂天といふ人があつた。有名な詩人です。此人の書かれた『白氏文集』といふ書籍は、支那は元より、吾が日本でも広く愛讀されてゐます。當時二十四生の文學とまで、歌はれた詩仙でありましたが、又深く佛教の道理を信じ、佛光如滿禪師の俗弟子と爲り、大いに禪の妙理にも通達した居士でありました。其白樂天が、杭州といふ所の刺史、日本ならば、縣知事といったやうな役に爲つて、赴任した時に、鳥窠の道林禪師の高徳を慕ふて參禪した。此道林禪師は又却々有名な禪僧で、常に門前の大樹に昇つて座禪された。何故こんなことをした

かと言ふに、これは睡眠を防ぐ爲めでありました。木の上に昇つてゐれば、一寸でも眠ると、忽ち地上に落ちて了ふ。だから木の上だと決して油断しないで、修行も充分にできます。其有様を下から見ると、恰も鳥が巢を作つたやうだといふので、時の人は、本當の名を呼ばずに、鳥窠禪師と言ひました。白樂天が、此鳥窠禪師に向ひ、

『如何なるか佛法の大意』

と尋ねた。三千年の昔、釋尊が一切衆生の生死苦海に沈淪してゐるのを憐まれて、之れを救はんが爲めに、佛法といふ廣大の教を垂れられました。此佛法の大意といふのは、即ち禪の大意を指したもので、所謂禪とは如何なるものであるかといふ意味であります。ところで鳥窠禪師は、何んと答へられたかといふに、

『諸悪莫作、衆善奉行』

と、即ち諸の悪を作すこと莫れ、衆の善は奉行せよと言ふのであります。禪のギリ／＼結着のところは、何うであるかといふ質問に

『總て悪い事はするな。何んでも善い事はしろよ。』

と頗る簡單明瞭な返答であつたのです。どちらかといへば平凡な答へであります。白樂天は、鳥窠禪師とも言はれる程の人だから、どんな理屈を言ひ出すかと思つてゐたところ、餘りに分り切つた答へ

だつたから、

『そんなことなら三歳の童子でも知つてゐる。』

と冷かに言ふた。すると鳥窠禪師は威儀端然として、

『三歳孩兒、縱道得、八十老翁、行不得』

と言はれた。三歳の童子でも言へるかは知らぬが、八十の老翁でも、それを實行することは能きぬであらうと。禪は理屈で解釋して往かうとする人は、これを聞いたら、定めて白樂天のやうに、驚くことであらう。併し其平凡なる言辭の中に、眞理のあることを知らねばならぬ。

鐵文和尚の刻苦

古人曰く

『青天は一を得て清く、白日は一を得て明かに、年は一を得て以て稔り、日は一を得て以て盈ち、人は一を得て以て康樂、國は一を得て以て太平、何を以てか驗とせん、雨一味を含んで潤ひ、上萬物を吐いて榮ゆ。』
實に千里の道も、一步より始まるといふやうに、何事を爲すにも、最初が肝要であります。それに就

いて石霜と瀉山の商量を思ひ出した。石霜が瀉山の會下にありて、米頭の役を勤めてゐた時、丁度米を斗つてゐると、其處へ瀉山が来て、

『此大切な施主物を、猥りに抛撒してはならぬぞ。』

と言つた。口へ米が入る迄には、一と方ならぬ人の勞役を要するのである。して見れば、縦令一粒の米であらうとも、粗末にされる譯のものではない。其處で石霜和尚は

『いや米を粗末にはしなす』

と答へた。ところが生憎な事には、そこに一粒の米がこぼれて居た。炯眼な瀉山和尚は、忽ち之れを發見し、身を俯して拾ひ取り、

『お前は然う云ふが、現に米が一粒此處にこぼれて居るぢやないか、それでも抛撒しないといふのか』

と反問しました。これには石霜和尚は、何とも返事ができないで黙然として居ると、瀉山和尚曰く、

『此一粒を輕んずること勿れ、百千萬粒も此の一粒より生ず』

そこで石霜和尚が、

『即ち斯くの如くならば、此の一粒も何れの所よりか生ずる』と云つた。すると瀉山和尚は呵々大笑し、翌日高坐に登つて、

『大衆米裏に虫あり』

と賞揚したといふことである。此處の道理は説明すべきものではない。或は此道理を以て、萬法一に歸す、何れの處にか歸すると云つてもよい。一は萬法に歸し、萬法は一に歸する。一を離れて萬無く萬を離れて一は存しないのであります。故に此の一粒米は、何より生ずると云ふことは、大に注意しなければならぬ。千萬粒も此の一粒米より生ずるのであります。

斯くの如く禪の修行には、僅かなものでも輕んずるやうなことをしてはならぬ。向ふばかりに氣を取られて、足許を不在にするやうでは、萬事に對して成功することができぬ。人に依つては、小なることに目を着けぬものもあるけれども、これは不用意なことであると思ふ。小なるところに大なる道理があります。高きに登らんとするには、先づ低きよりせなければならぬ。利根川のやうな大河の水も、次第に其の源を探つて行けば、葎の雫の一滴となつて了ふ。此一滴の雫が澤山集つて、遂に利根川のやうな大河ともなるのであります。富士山のやうな大きな山でも、僅かの土が集まつて出來たものに過ぎない。恙うなつて來れば、小さいものであるからと云つて、却々等閑にする譯には行かぬ。それ故ナボレオンは蠟燭の切れ端までも、粗末にはしなかつたと。また蓮如上人は反古のやうなものまでも、南無阿彌陀佛と云つて拾はれたと云ふことである。

三河の鐵文道樹和尚は、行脚の時に、肥前の伊万里に行つて、休々庵の黙子禪師に參じた。或る夜

大衆と共に夕飯を喫する時、長大息して云ふには、
『斯く檀越の信施を受くるも、之れを用ゐるだけの徳道がないのは、眞に嘆息に堪へぬ。』
と。時に隣席に風外和尚が居て、

『汝若し飯を食ふ底のものは何者ぞと識得したならば、信施などは、決して愁ふるに足らぬ。』
と言つた。鐵文は是を肯はずして云ふ。

『縦令識得するも信施を消すことは難からう。』

時に風外和尚は、眞向から一掌を興へた。其時鐵文は覺えず憤然として、湯盞を壁に抛げつけて、僧堂に歸つた。其後も残念でならぬので、風外と言葉を交へざること、六ヶ月の久しきに及んだ。時に黙子禪師が叱して言はるゝには、

『風外は汝の爲めに警策したのである。何故に彼を恨むのだ』

それでも鐵文は尙ほ服せずして風外を惡み、吾れ若し此這の大事を了畢せば、必ず風外を打殺してやると敦圍いてゐた。

それからと云ふものは、奮勵一番只管に坐禪し、一日櫻樹下の石上に坐して、半夜に疲勞し、困睡して打ち倒れたる刹那、豁然として大悟した。そして直ちに方丈に上りて所解を呈すると、黙子禪師も初めて證明せられた。其時風外の警策の眞味を會得し、坐具を展べて謝し

『老兄の激發にあらずんば、争でか今日あるを得んや』
と云ひ、泣いて過日の罪を謝したといふことであります。

豊浦の寺は露ふりて、月常住の御燈をかゝげ、
霧不斷の香を焚き、寒庭の松の風、讀誦の經に
音信れて、猶も殊勝ぞまさりける。

(淨瑠璃 大職冠)

詩禪一味

妙所を現はすは詩

詩と禪とは、關係の深いもので、詩即禪、禪即詩ともいひ、詩禪一味といふ言葉さえあります。だから言語の及ばざる所、是れ詩なりで、言ひ盡せぬ妙所に至りては、唯詩に依りて、それを味はふて往かねばなりません。兎に角詩は吟ずべくして語るべからず、獨り之れを吟じてゐる間に、自然と其妙味が出て來るのであります。吾が禪の方では『與奪』といふ言葉を用ゐる。即ち與へて言ふ時と、奪ふて言ふ時とであつて、之れを奪つて言ふ時は、

『一法として人に與ふるなし』

釋尊は横説堅説、西に東に三百餘會を重ね、五千四十餘卷の經文を説法せられたが、揚句の果は、『一字不説』とまで言はれました。即ち

『吾四十九年住世未嘗説一字』

で、兎の毛一本、塵一片も説いたことはないと言はれました。併し之れを與へて言ふ時は、天地總ての現象、一切萬物悉く、禪宗の藥籠中に歸するといふて差支ありません。指一本の中にも、八萬四千の法門が存してゐると言ひます。けれども這麼ことは、それ／＼の見やう一つであります。世間の事々物々は皆相對的であるから、上があれば下、裏があれば表といった有様で、換言すれば、言語文字等は末の末で、吾々の思想や才能は、其極致に至らば、用ゆるに由なく、唯アツといふ其處に落在して了ひます。だから何事に依らず、其アツといふ所に至つては、何うの恚うのと解釋したり、文筆の暇はない。これは第二人者に爲つては、決して其味が分るものではありません。當人自身が、直覺的、單刀直入的に往かなければ不可ぬ。即ち『冷暖自知』であります。絶對無限界に至つては、論理も理窟も盡きて了ふ。唯默するより仕方がない。尤も昔は維摩居士のやうに黙つた人もありました。が、黙つて了つては又是れ解らぬことに爲る。此言ひ難い妙所を現はしたのが、歌や詩であつて、山の青々たる、花の艶麗なる、鳥の樹間に囀つるなど、自然の風光は、理窟や、説明では迎も駄目であります。其處に詩が生れる、歌が生れる。詩や歌の如何に妙なるかと解るであります。彼の宋朝時代の有名な蘇東坡が、

『溪聲即是廣長舌、山色豈非清淨身、夜來八萬四千偈、他日如何學似人』
と吟じたのも、能く味はつて見ると實に幽玄で、且つ深く自然の眞理を穿つてゐます。廣長舌は、一

に長廣舌ともしてありますが、そんなことは何うでもよろしい。兎に角佛説法の巧みなことを意味したものであります。溪聲は恰も佛が、長き舌を以て、滔々と一大説法せらるゝかの如き感があると言はんばかり、佛の舌は、其長き頂上に達すとあつて、鼻頭から額を過ぎて、頭の頂點迄伸びたと言ふが、恐ろしい長い舌もあつたものだ。併し之れは佛の横説堅説、自由自在な其辯舌の卓越なるを形容したのであります。そこで山色の風光も、見れば見る程光明赫々たる清淨身、即ち三十三身に現する佛菩薩の淨き姿の如くであると言はんばかり、水の音を聞くに就けても、如來説法の妙音、山色の千態なるを見れば、又佛身の三十三處に現する其神通無礙なる法身に、何れも親しく接するが如き感あらしむるのは、實に詩の味はうべき點であります。だから俳句であらうが、和歌であらうが、其妙所に至らば、禪の境と略々一致のところがあります。否兩境密接なる關係のあることは、言を俟たない。禪に於ける商量といひ、それくの偈頌といひ、言語不到のところを意味させるのだから、却々難かしい。

眼中の眼即ち心眼

『無邊風月 眼中眼、不盡乾坤 燈外燈、柳暗花明、十萬戶、叩門處、有二人、齋』

是は吾が禪門では、有名な詩であります。『無邊の風月眼中の眼』は、何も風月に限らぬでも可い。一切萬物、山川草木、森羅萬象と見たら宜しい。無邊の風月を見るに、決して肉眼ばかりでは見えませぬ。世間の多くは、直ちに五感の眼を當てにして見る。物質的文明の進歩した現今は、遠くを見るのに望遠鏡、微細の見えるのに顯微鏡があるが、これは一つの程度までであります。其間に障害があつたり、遠きも微細きも、其度以上に爲れば、見ることはできませぬ。文明の進んだ世の中でも、爰に至れば役に立ちませぬ。又科學に於ける實驗も、結構は結構だが、只五感即ち『眼、耳、鼻、舌、身』を離れては、出來得ぬので、科學者其者に言はしむれば

『發達せる學理、進歩せる機械に依つた實驗以外の、畢竟、眼に見えず、耳に聞えぬところには、何んの眞理も秘在して居らぬ。元より神や佛などいふものはあるものではない』

と言ふかも知れぬが、此處は餘程考へねばならぬ所でもあります。哲學などでも然うである。理の不及點、不可知點に到らば、唯聾の如く、啞の如くである。何うして其處に宇宙の眞理を徹見したと言はれませう。即ち五感の眼、物質を見る眼は、唯其表面的の觀察に過ぎませぬ。其眞理換言すれば、森羅萬象の形なきところ、其絶對無限なるところに到つては、肉眼の及ぶところではありませぬ。其幽玄不及の所を見る眼中の眼は、吾が禪門の所謂『心眼』とでも言ひませうか。精神的眼で見なければ見ることはできませぬ。眼に就いても『天眼通』といふのがあるが、これは矢張『天耳通』とか、『宿

「神通」とか、今の神通妙用の意味から来たものだ。其外慧眼ともいひ、嘗て流行した「千里眼」といふのも、其方面の天眼通即ち心眼なのであります。敢て禪門の修行をして、悟道せずとも、それく専門々々の眼を透さば、何んでも分つて來ます。吾が宗教禪門の立脚地から、一切を見る時、吾が目前に天道地獄、あらゆる魔界佛界が現はれて來るやうに見受けられる。其靈なる働きは、哲理科學の論ではない。古人の語に

「巢知風、穴知雨」

といふのがあるが、鳥や虫の類に至つても、此不可思議なる神通妙用は、自在なのであります。臺灣とか、小笠原島とかいふ名稱は知らなくとも、どの邊に低氣壓が起つた。何時頃颶風がやつて來ると、自然に鳥には分るから、早速巢の用心をして安全を圖る。又如何なる大雨が降つて來るにしても、地中に居を構へてゐる蟻は、早くもそれを知つて、豫め相當の防禦準備をするといふ状態、其他自然界を眺めて見ると、あらゆるものが自然の妙靈に依つて支配され、不可思議な働きをして居る。爰に至りて到底理窟や學問の遠く及ばざるところであります。彼の千里眼とか、透視術なども、共に不可思議な術で、矢張り外の理から割り出された一種の神通に違ひない。世間のことも、唯單に五感のみ當てにするのでなく、最う一步進んで、所謂眼中の眼即ち心眼で、一つ大發見がありさうなものだと思ふ。勿論禪其者の立場に至つては、彼れ是れ論ずるには及ばぬ。餘りに今の世が、哲學といひ、科

學といひ、其他何れも物質化し過ぎた表面的學問にのみならず、此天地の大眞理を、精神的に、徹底的に自覺するといふことに缺けてゐます。此點は社會の各階級を通じて、一段進んだ省察を促す必要があると思ひます。

穿ち得た人情噺

落語家の泰斗故三遊亭圓朝の話に、面白い穿つた人情噺があります。題は「心の眼」といひます。或る所に夫婦者があつたが、亭主の方は、結婚せぬ前から目が見えなかつた。それで貰つた女房の顔が、どんなだか分らぬのが、本當だけれども、其處は妙なもので、亭主には非常に別嬪に見えた。見えたといふのは心の眼で、肉眼では見えなかつた。明け暮れ一緒に暮してゐる女房が、如何にも美しい女で、其姿といひ、頭髮の工合といひ、殆んど肉眼で見ると、一心に愛してゐた。一方女房は丁度壺坂のお里のやうに、盲目の亭主を大切に、諸所の醫者の手にかけてたり、又は神や佛に祈願を籠めたので、其加護に依つてか、嬉しや亭主の兩眼が開いて、何んでも見えるやうに爲りました。ところが眼が明いて見ると、今まで別嬪だとのみ思ふてゐた女房が、色は黒く、鼻は低く、口は大きく、眼は金壺で、頭髮は縮れ毛で、素敵滅法界もない醜女であつたから、亭主は眼が明いた

ばかりで、直ぐ厭やに爲り、そして離縁沙汰と爲りました。
 其話の筋は慙うであります。嘗て延壽太夫の『夕霧伊左衛門』を聞いたことがあるが、其話ひ出す
 聲の中に、如何にも伊左衛門が動いてゐるやうにも思はれたし、其着衣の工合から、手足の動きが、
 明瞭と眼に見えるやうな氣がしました。矢張其處に眞の妙味といふものが、存在してゐるので、理屈
 や、學説などでは、到底其味は出ませぬ。延壽太夫は其藝に超越してゐると言つても可い。だから今
 の科學や、哲學も、超科學、超哲學といふやうに、之れを心から會得する一步進んだものにしたとい
 思ふてゐます。ワットの蒸氣汽罐の發明や、ニュートンの引力發見を見ても、此超科學、超哲學の發
 現に外ならない。言はゞ吾が禪宗に於ける豁然大悟、所謂大死一番の境(大なり、小なり、事は違つ
 ても、其眞理に至つては)と甚しき差はなからうと思ひます。佛が麻麥の苦行をせられて、雪山十二
 年後の大悟は遂に、

『奇なる哉一切衆生は如來の智慧徳相を具有す。』

と呼ばしめました。即ち山川草木悉皆成佛の眞理を發見されました。古徳祖師方でも、或は桃の花の
 開くを見て、豁然大悟され又は鷄鳴を聞いて、佛陀の光明を放たれたものもあります。之れ皆心を中心
 としての問題に外ならない。無邊の風月も只平凡の眼には何んの價値もないが、所謂悟つた眼とでも
 言はうか、眼中の眼に依つて見たならば、必ず『無邊の風月』の意味が分るのであります。

恰も回轉する井戸車

次に承句の『不盡の乾坤燈外の燈』が、又面白い。乾坤といふは、宇宙といふも同じで、起句に對
 して言ふたまでで、爰には空間的……時間的に現はれてあつて、宇宙其ものから言へば、盡くる所な
 しであります。三世を通じて、現在は早や過去に爲り、未來は又現在に爲つて、轉々として盡くるこ
 となし。吾々人間ばかりでなく、世の一切萬物悉く生死輪廻を行つてゐます。死んだと思ふと生れ
 る。恰も井戸車の日夜回轉して、尙ほ元の如しと同じであります。之れを物に喩へても、塵一片でも
 なくなることはありません。形は變り、場所は異つても、其物たるや、萬世古今滅することもなけれ
 ば、生ずることもない。絶對眞理に至りては、此處まで見抜かねばなりません。此盡くることなき不
 變の眞理、始めもなく、終りもなき不生不滅のところ、直に其儘春に百花あり、秋に月あり、夏に涼
 風あり、冬に白雪ありて、此處が所謂宇宙の生命ともいふべきであります。此中にありて、人生五十
 と説き、七十と説き、生を喜び、死を悲しむとは、何んぞ夫れ愚なるの甚しきやだ。宇宙の生命が、
 同時に吾が生命と知らば、生死ありとて又敢て悲喜することもない。いや生死の沙汰はないのであり
 ます。次に『燈外の燈』とは、光明赫々たる眞理の燈で、物質的燈は、時ありて生滅すれども、絶

對眞理の燈にあつては、所謂燈外の燈で、縦三寸を貫き、横十方に擴がり渡つて、隈なく照り煌いてあります。

悲觀も樂觀もない

爰に第三句目の轉句に移るが、最うこれからは、前の起承二句を受けて、解り易き形容に止まるのであります。『柳暗花明十萬戸』の十萬戸といふのも、別段十萬と定つた譯のものではありません。只廣い世界を指したので、何處も彼處もといふ意味に爲ります。春來ると、柳は緑に、花は紅を競ひ、秋に爲れば紅葉の錦で、自ら天地自然の情趣を感得することが能きるのであります。昔も今も、柳は緑で、花は紅で、而かも春風騎蕩、少しも變つたところはありませぬ。前句の眼中の眼で眺めたところは恚うであります。此處に至つては、悲觀もなければ、樂觀もない。次ぎから次ぎへ、ズンズンと轉々して往くのです。眼中の眼を以て、燈外の燈に照らして見れば、『日々是れ好日』で各自其天職本分を竭して往くならば、何時も春風騎蕩、感謝の念が溢れるのでありませう。これが宗教の信念とでも言はうか、實に有難いところであります。事に依ると世間の若い人達が、『有難屋』なんて、此信仰厚き人々を笑ふけれども、お爺さん、お婆あさんが、一心不乱に念佛三昧に入り、南無阿彌陀

佛を唱へてゐるのは、眞に無邪氣で愉快であります。其人の年輩、其人の學力など、種々の差はあらう。詰るところは此處であります。何も變つたことはありません。

眞理には生命あり

結句に至りては、今までの意味を總括してあります。即ち『叩門處々有二人齋』で、何も神や佛に尋ねる迄もない。吾れ即ち神にも、佛にも變らぬ精神を具してゐるのだから、自ら自身に就いて尋ねたら可い。外に向つて此法を尋ねなくとも、内に向つて諾と承知すれば、それで可いといふまでのことに歸着する。だから自分の心に向つて、如何に／＼と問ふならば、自ら『無邊風月眼中眼、不盡乾坤燈外燈、柳暗花明十萬戸、叩門處々有二人齋』の面白味が解つて來るのであります。前章にも例を引いたが、瑞巖師彦禪師といへば、禪門では有名な人である。此禪師は平常自ら呼んで『主人公』といひ、又自分で諾即ちハイと答へ、『惺々着諾、他時異日、莫受二人瞞一諾々』と點頭したのです。即ち獨り盤石に座して、終日愚の如く靜座工夫をしながら、恚くも自問自答して居られた。そして惺々とは、最う徹底的に判然と覺めたやうに、能く萬象を照らすが如くなる境涯、着は只惺々の意味を強める爲めに使つたのであるが、所謂自己も主人公も、爰に至りては、共に惺々である。唯

同一だ。恚うなれば天地法界惶々着、そして自らを謾し、他を漫する兩般もなければ、他の人の瞞を受くることもない。醒めてゐるか何うか、主人公は居るか何うかと言ふやうに、始終心其ものに氣を付けて、修養を續けて往つたならば、何時でも主人公と呼んでも、諾々と言ひ得ることが能きます。内に向つて尋ねることに於ては、爰に何んの理窟も、何にも挿む餘地もない。天地一乾坤、唯主人公あつて、他に何も無い。其主人公は、自ら諾と答ふるではありませぬか。門を叩けば處々人の響ふるありだ。此處を確り會得したならば、天日是れ同一で、超科學とか、超哲學とか、現はれて來ます。爰に至りて、我れと彼れ、此處と彼處と相對するものはなくなりませぬ。物質的の五感の支配を受けて何うの恚うのと言ふ、懸け離れたものではない。水は冷かだ。火は熱いと説明したゞけでは、聞くもの、見るもの等の第三者には何んの感じもないと同様、説明は第二義門、末の末なるものと爲つて了ひます。冷暖自知とは、此處の有様を言ふたに過ぎないのであります。眞理の極致は、何うしても此處まで達しなくては不可ぬ。それで門を叩けば、誰れが返辭をするのか、誰れが響ふるのか、又誰れが門を叩くのか、此處の消息に至りては、何者も之れを侵すことはならぬ。瑞巖禪師が「惶々着」と言ふたところは、又大眞理の秘在してあるものであります。夫れ眞理其ものには生命ありで、無限の眞理は無限の生命を生み出す。吾等は此無限の生命に生きてゐることを自覺して居らねばなりませぬ。吾等の精神は、宇宙の大精神と違つたところはない。「釋迦何人ぞ、我れ何人ぞ。」我れは之れ大眞理の

權化である。分身である。片割であるとしたならば、敢て生死に迷ひ、順逆に悶えることは、莫迦氣た話であります。而かも森羅萬象を、精神的眼中の眼で、眺め盡きざるところの宇宙を、眞理の燈明で照らして見ると、何處も彼處も柳暗花明、一點の偽りなき眞理が現出してあるではありませぬか。こんなことも吾が主人公に尋ねて、常に惶々着ならば、自ら諾々と答ふることも能きませぬ。確然、判然とした眞理を會得して、無限の生命に活きんとするならば、矢張宗教的信念を堅く生じて、常に修養を怠つてはなりませぬ。

江南春 杜牧

千里鶯啼綠映紅 水村山郭酒旗風
南朝四百八十寺 多少樓臺煙雨中

四恩とは何んぞや

篤く三寶を敬せよ

佛教の起る順序として、佛教者の心得と爲る『四恩』といふことがあります。其處で『四恩』とは何んであるか。『國王恩、父母恩、衆生恩、三寶恩』の四つであつて、之れを心に記銘すべしである。先づ『三寶の恩』といふのを詳しく説くと、智慧の方面から、又感情の方面から言はねばならぬことであります。けれどもそれは却々説き盡せぬから、先づ諸佛通誠の偈を以て、四恩を籠めたことにします。

『國王の恩』とは、國家の主上權を有つてゐる所の人に、盡さねばならぬことであります。大意を言ふと、吾々が此生命財産に就いて、安心に保護を得てゐるといふのは、國家が成り立つてゐるからであります。去れば國王に報答せよと佛教では教へます。就中日本の如きは、各國に類例のない國柄でありまして、神代から今日に至るまで、金枝玉葉榮え來つたのは、西洋にも支那にも何處にもあり

ませぬ。支那でいふと、秦漢六朝、唐、宋、元、明、清、といふやうに繼續はして來ましたが、それは皆血統が違ひます。そののみならず、國王が善政を行ふ時は、國王でありますけれども、若し善政を失した時には、國王は臣下に爲り下らねばなりません。又西洋でも天子の身分でありながら、殊によると遠島せられたり、又斷頭臺上の露と消えるやうなこともあります。それは何故かと言ふに、恣ういふ天子は、約束的から出來てゐるからであります。ところで吾が日本は、他の一面からいふと、姦子親戚の關係があることが、國民一般の頭に、深く印象してゐるから、いざ戦争でも始まると、毎も連戦連勝であります。聖德太子は、推古天皇の世に現はれて、太子の位に居られ、萬機を執られました。太子は或る意味から言ふと、吾國に於ける佛教の開山のやうなもの。又國家の上には、政治や、法律は皆太子が創造せられました。そののみならず文學、技藝、總ての道を開かれたといふのは、却々太子が、一世や、二世の仕事ではありませぬ。憲法も明治に於て、吾が日本で、西洋に倣ふて制定したやうなもの、實は早くも聖德太子が、十七憲法を制定せられてゐるのです。其箇條中主なるものとして、『篤く三寶を敬せよ、三寶とは佛法僧なり』とあります。それを見ても、國恩に報答するといふことは、佛教者が深く關係してゐます。此佛法は代々の至尊が保護なされ、又佛教者が皇室に對して、功績を立てたことは、却々容易ではありませぬ。『父母の恩』を報ずるといふのは、今更言ふにも及びませぬ。吾が日本は、忠孝一致であります。言ひ換へれば、君に忠を盡すのは、親

衆生の恩

に孝であり、親に孝を盡すのは、君に忠義に爲り、即ち忠孝一致といふのが、爰に成り立つてゐます。

「衆生の恩」に就いては、佛法で大いに奨励し、鼓吹せられてゐまして、これまで説くところの忠といひ、孝といひ、それは儒教にも、又神道にも教へられてありますが、此「衆生の恩」に對する報答といふことは、外の教にはありません。尤も儒教には、陰々と響かせてはありますが、明らかに教へてはありませぬ。其處で「衆生の恩」といふたのは、君に忠義を竭すことに密接の關係を有つて居ります。即ち衆生とは、人間ばかりを指したのではありませぬ。人間以下の動物總てを指すものであります。廣い意味から言ふと、動物以下植物、又微細かくいふと、バクテリアのやうなものでも、此衆生の中に入れられます。有機物、無機物皆衆生といふ中に入つてゐるのであります。先づ早い話が、あれは親類であるとか、これは他人であるとか言ふて、我れは他人に、何んの恩義もないなど、言ひますが、此「衆生の恩」に至ると、元より親類の區別を離れてゐます。即ち活きとし活けるものゝ恩に酬ゆるのであります。だから總てのものに對して、慈悲仁愛の心を以て向はねばならぬのであります。佛の見てゐる範圍は、實に廣く、吾々が母の胎内から生れ出て、棺桶に入るまで、幾かな過去、

現在、未來を通過してゐる。未來といふても、過去といふても、見やうに依つて、未來とか、過去とか假定してある。吾々は他人としてゐるが、全地球上悉く親類ばかりであります。廣大無邊の慈悲から、此世界が開けてゐて、吾々が生きてゐるのは、空気を呼吸してゐるからであります。出る息、引く息に依りて、吐いたり、吸ふたり、即ち酸素を吸ひ、炭素を吐き出す、恠ういふことは納は深くは知なぬが、酸素は藥で、炭素は或る程度までは藥であるけれども毒に爲る。草木の酸素を、吾々が吸ひ取ると利益に爲り、吾々が炭素の不必要なものを彼等に與へると、彼等には藥と爲る。吾々の身體を、生理的に調べて見ると、身體に毛の生えてゐる程口がある。其口があつて、吾々は生きてゐます。此方の滓を向ふへ與へると利益に爲る。上から詰める、下から出る。これは言はず學問上の考へであるけれども、宗教の考へを以てすると、如何なるものにも恩があります。去れば吾々は菜種に對しても、恩を受けてゐます。血を流すことのみを、殺生と思ふてゐるが、實は草一本たりとも、故なくして抜き取るのは殺生であります。だから吾々は、如何なるものにも、恩あり、義あることであらば、相互に感謝せねばなりません。ところが大抵の人は、あれは無縁であるの、これには恩義はないと思ひ、例へば東京人と、大阪人とは無縁だと思ふてゐます。此上に繋ぎを付けて、恩頼といふ上に於ては、着物一枚でも、湯巻一枚でも、其土地ばかりで出来たものはない。糸から織り出したものは幾人かの勞力が加はつてゐるか知れませぬ。唯一と筋の糸でも、幾人かの勞力より仕上つたもの

で、毎日缺くべからざる米、其米一粒でも七十幾回の勞力を要してゐるから、一枚の着物、一粒の米に至るまで、人の手から手へ傳はり來り、天地も、國土も、太陽の光りも綜合して來ると、直接間接に容易でありませぬ、山よりも高く、海よりも深き恩頼が繋つてゐます。酒屋は建具屋の厄介に爲り、又建具屋は酒屋の厄介に爲つてゐます。即ち長を以て、短を補ふてゐるのです。地主も、小作人の厄介に爲り、又小作人は、地主の厄介に爲つてゐます。互に助け合ふてゐるから、社會は共同生存であります。少しばかり財産があるといふて、自分の力ばかりで、財産が出来たやうに思ふが、然ういふ理由ではない。豆のやうな小さいな眼を以て見えては不可ぬ。即ち精神界に入つて、慈悲の眼を以て見ねばならぬ。「心地觀經報恩品」には、朝から晩まで親を頭に戴いて禮拜しても、親の恩に報じ切れぬと説いてあります。何も西洋、かも西洋と、餘り西洋にかぶれると、日本固有の道徳を忘れて了ふ。過渡の時代と言ふが、轉ばぬやうに渡らねばならぬ。

慈悲心と佛は共通

佛とは、抹香臭いのを言ふのではありませぬ。若しそののみが、佛といふものならば、喜ぶべきではなく、却つて一種の悲しみであると思ふ。迷信深い人は、發音のシといふこととさへ厭やがる。それ

は全く迷信の爲めでありませぬ。佛といへば、縁義の惡いやうに思ふが、三寶は然うでなく、極く目出たいものであります。經文の中に「佛心とは大慈悲心是れなり。」とあつて、大慈悲を有つてゐれば、誰れでも佛であつて、決して木佛、金佛、石佛ばかりが佛ではありませぬ。尙ほ裏長屋に住ひ、襤褸を着てゐても、立派な佛であります。それと反對に、金殿玉樓に起臥し、綾羅錦繡に身を包まれてゐても、貧慾、嗔恚、愚痴の三毒の煩惱を起しては、それこそ佛とは言はれませぬ。佛と言ふは原語に「ブツ」といひ、日本語では「ボツゲル」といふことで、即ちもつれた糸がほどける意味であります。それをもつれた糸に、頭を突つ込むと、三毒煩惱の火を燃し、又は深い井戸へ落ち込んだやうに、愚痴に陥つて、頭出頭没するのであります。然るに凡夫だの、佛だの、迷ひだの、悟りだのと名が付くから、其もつれ糸を、ほどくだけである。其ほどけたのはボツケである。慈悲心のあるところは、佛のある所、慈悲心と、佛と意味は共通してゐます。唯ラブであります。此ラブは、男女相愛する方ではなくて、清らかなる愛であります。凡そ人間界を始めとして、あらゆる生物界は、愛と、慈悲心に繋がれてゐて、此愛と、慈悲とが、一家庭に行はれなければ、夫婦間に角突き合ひをして、家庭は治まりませぬ。家庭で睦じく、仲の良いのは、慈悲の共通であります。即ち親の慈悲心が、子に及ぼし、子の慈悲心が、親の上に及ぼしたる時には、唯孝行と名の付くのであります。段々と社會問題が喧ましくなるであらうが、智慧、學問を争ふ時は、停止する所はない。學者と、無學者と衝突し、財

産家と、貧乏人とが衝突した時に於て、これを旨く調合して往くのは、宗教の慈悲の心であります。依つて社會に入要なるものは、和合の徳、慈悲の徳であるから、佛教は其徳を教へて、安寧平和の日を送るのが本務であります。であるから佛教は、年忌、葬儀に拘はつた譯ではありませぬ。佛教は決して難かしくはなく、至極安い教へであります。一國の帝王が、佛心を以て心とせば、これを仁君といひます。明治天皇の御製に

冬深きねやの衾を重ねても

思ふは賤が夜寒なりけり

といふ御和歌がありますが、其御思召は、唯感泣するより外はありませぬ。

佛の心を心として働けば、孝行とも爲り、忠義とも爲り、又友愛、親愛と爲つて働くのであります。種々と名は異なるが、働いて出るところは、總て同一であります。だから「佛心とは大慈悲心是れなり。」といふところへ來ては、悟りといひ、理窟といふやうなものは、入要ありませぬ。即ち「悲智圓滿」が佛の換へ名に爲りまして、又之れを「福智圓滿」ともいひます。誰れしも佛といふ觀念を、恚うしたところに置けば可い。然うすれば寺へ參つても、悲觀的にはならず、有難い感じが、泉の流るゝ如く、滾々として湧き出るのであります。納は僧侶の端に列つたものだから、聊かなりとも、布教傳道をして、斃れたらそれで可い、例へば、眞宗の親鸞上人とか、或は日蓮宗の日蓮上人にしろ、又は曹

洞宗の道元禪師にしろ、彼の寺には米何俵の收得があるから、住職として轉じやうなどいふことはない。佛祖の心を一分たりとも、保つたならば、正法を世に發揮することが能るのであります。佛は社會改善の爲め、人類平和の爲めと思ふたならば、大なる間違ひはありませぬ。

爲家

名に高き嵐の山の麓寺

入相の鐘に松風ぞふく

顯仲

谷しげみ跡だに見えぬ古寺は

かけひの水のゆくにてぞ知る

婦人に就いて

婦人に對する佛弟子

日本婦人の美點と云ふことを説く前に、我々佛敎僧侶として、婦人方に對する時の觀念と云ふ様なものが、どんな物であるかと云ふことを説かねばなりません。佛敎僧侶の本來のきまりと云ふものは先づ家族のない様なもので、家庭と云ふものは有つて居らぬ筈であるが、併し今は宗旨々々に由つて違つて居る。宗旨に依つては、立派な家庭も、家族も、有つて居ますが、現在柄の如きものは、人の子弟を貰ひ受けて、我子の如くに育てて居ります。言はば變則的の家庭を有つて居るのであつて、正式の家庭と云ふものを有つて居らぬ。それでありますから柄が日本の婦人と云ふことについて説くのは、餘程縁遠い様に考へられますが、佛の説かれた經文の中に、吾々佛弟子は婦人方に對して、如何なる感想を以て臨んだら可いかと云ふ事を敎へられてあります。それは「我よりも年長けたる婦人に對しては、我が母親の如く思へよ。我よりも少し年長たる婦人に對しては、我が姉の如く思へよ。我

より年少の婦人に對しては、我が妹の如く思へよ。極く幼い者に對しては、我が娘の如くに思へよ」と云ふ様に敎へてあります。でありますから、柄も其心持を以て、婦人の方に對して、精神上極く親しい意味を以て見るのであります。それで柄は家族とか、家庭とかは有つて居りませぬけれども、他の意味に於て、最も親しい、最も大なる家庭を有つて居ると思ひます。それは如何なる家庭であるかといふと、柄は常に種々の家庭に入つて行き、種々の家族の中に交つて居ります。貴きも、賤きも又富める所にも貧しき所にも出入するのであります。是等様な家庭は、やがて我が家庭と見ることが能きるのであります。それは我々自身に取つても有り難い事と、始終感謝して居る次第であります。扱近頃此婦人と云ふ叫び聲が大層高まつて來まして、婦人の教育は何うとか、女性とは何かと云ふやうな事が、却々喧ましくなりました。勿論東洋固有の婦人の敎と云ふことは定つて居るが、同時に亦西洋諸國から入つて來た婦人の敎もあると云ふ風で、元よりあつたものと、新に入つたものと出合つて、鹽梅よく調和することもあり、又甚しき衝突するやうな事もあるのであります。が、悲しいかな、何事に就いても過渡時代たるを免かれぬやうなことが多い。それで純粹の日本の日本的で通すことは能きるが、全然西洋風を學ぶと云ふやうなことは思ひも寄らぬことでもあります。動もすれば鹽梅よく調和せられずして、不具的の婦人が出來るやうであります。併しそれは形に於てはありませぬ。婦人の道徳と云ふものが、動もすれば不具じみたやうなものにならうとする。全然日本婦人でありながら

大和民族の血を傳へて居りながら、アメリカ婦人、フランス婦人の様なものになつたり、形だけは日本人であつて、精神は外來のものを尊んで、日本固有のものを賤んで居ると云ふ様な傾きのものもある。然ういふ婦人が如何なる事をして居るか、と云ふと或は醒めたる婦人とか、覺醒せる婦人とか言つて、男子も苟もせぬやうな、甚しい亂暴狼籍極まつたことをして居る婦人を往々見るのであります。納ども多少面識ある婦人の中にも、こんな婦人がないでもない。餘程今日は婦人と云ふものゝ問題はやかましく、單に之れを輕々しく論斷する事は難いと思ふのであります。けれども納の希望する所は、一般婦人は矢張日本の婦人、敢て殊更に賢母良妻と言はずとも、日本婦人として道徳を有つたらば、先づ危険の場合が少いであらうと思ふのであります。それに就いて、一つ此處に思ひ起すのは婦人と男子との關係であります。

夫婦の和合から始まる

此社會と云ふものを折半して見れば、一部分は男子から成立ち、一部分は女子から出來上つて居るのは言ふまでもないこととあります。殊更に男女同權とか、何んとか云ふやうなことは言はずとも、男は剛に、女は柔に、上に天あり、下に地あり、陰と陽と相俟つて、萬物の生育して行く如く、殊更に

に同權同等と云はないでも、柔い人は柔いなり、剛い人は剛いなり、相俟つて調和する所に於て、天地自然の妙が現はれて來るのであらうと思ひます。多くの人が此男女の關係に於て、動もすれば人格と云ふことゝ、人倫と云ふ事とを取り違へて居るやうであります。人格と云へばやかましいやうでありますが、人間一人として見れば、男も女も同等同一で、寸分でも譲る所はないのであります。男と女があつて、其處に家庭が出來、社會が出來るのであります。此關係からして人倫と云ふ一つの道の上に於ては、同じ女の身にあつても、娘時代と、人の妻たる時代と、母となつた時代、寡婦時代と云ふやうに、時と折に因つて、其考へなり、仕事なりが違つて來ます。其違つて行く上に於て、母は母としての道、妻は妻としての道、娘は娘としての道と云ふものがなければなりません。即ち倫道の上から言へば、決して男と女と同等に見ることができぬのであります。男があゝするから女も恚うする。男が飛び廻はるから、女も飛び廻はる、男が外に出て仕事をやるから、女も然うしなければならぬとすると、人倫として區別あるべき所のものを、相混じて了つて、男が男でもない、女が女でもない。即ち女が男が分らぬやうな變體なるものが出來ると云ふやうな事になるのであります。

そこで『易經』の中に、

『天地あり、萬物ありて人間あり、人間ありて君子あり』
と云ふことがあります。此君子と云ふのは男と見て宜しく、

『君子ありて禮儀錯する所あり、故に夫婦の道は久しからざる可らず』
 などとも書いてあります。それで天地から萬物、人間から夫婦。恁う云ふ工合でありまして、此天の道を圓滿に行くのは、男と女と相俟つてせざるを得ぬと云ふのであります。又『詩經』の中にも、
 『關々たる雎鳩は河の洲に在り、窈窕たる淑女は君子の好述』
 と云ふことがあります。これは即ち夫婦の關係を歌つたもので、彼の周の文王と皇后との間柄の、美しい事を云ふたのであります。恁ういふやうに一々擧げて來ますると、際限がありませんが、同じ詩經の中に、
 『家妻に則つて、以て兄弟に及ほし、而して家邦に及ぶ』
 と云ふことがあります。自分の妻に則つて、而して兄弟に及ほし、そして家邦とは家と邦……家邦に及ぼすと云ふことであります。一家内に於て、夫婦仲善く往かぬやうでは、何うしても兄弟の和合ができません。さうすると一國の平和も保つことができない。天下の政法を治めると云ふ事ができない。それで天下の政事（天下の政事と云ふと大袈裟だが）、如何なる大袈裟の事でも、其實小さいな家庭から始まると云ふのであつて、其家庭は夫婦の和合から始まるのであります。若し一家として自分の家庭を治める事ができぬ者なら、彼此と人に言ふ丈の資格がない。妻として夫の心と相和せねば、外に向つて彼此と言ふ資格がないと云ふのであります。先づ自分から修めてかゝれと云ふやうな事を、

詩に誦つたのであります。斯様な事は納がいふ迄もありません。

心の美しきが眞美人

我が佛教に於ては、此家庭とか、夫婦とかの間柄に就いて、如何様に教へられてあるかといふと、彼の『玉耶女經』の中に、釋尊が玉耶女に向つて説かれたことがある。搔い摘まんて其主意を説くと玉耶と云ふ夫人は、其名の如く玉の如き天成の美人でありました。ところが人間と云ふものは、何うも情ないもので、自分の顔が美しいと云ふのが、自負心となつて、自然高ぶる心が起り、人を眼下に見、夫に對して從順でなく、親に對して我儘であると云ふやうな有様であつた。そこで親の頼みに依つて、釋尊が此玉耶女の爲めに説法せられたのであります。其意味は、凡そ人として美しいものを好まぬものはないが、其美しいのは、顔容の外、形の美しいのを云ふのではなく、其心の美しいのを、眞の美人と云ふのである。人の顔容は如何に美しくても、花の盛りの長からぬやうに、如何に明眸皓齒、玉の如き顔、雪の如き肌と雖も、忽ちにして老病死の苦に襲はれ、果敢ない姿となつて了ふのである。然るに心の美に至りては、恰も彼の玉の磨けば磨く程、光りを増すが如く、年を重ねるに従つて、愈々益々其美しさを増すのである。故に其形に於ては、左程に美ならずとも、心の美なる人は

却つて一生を平和に、幸福に送る事ができると云ふやうな事を説かれた。これは洵に至當の事と思ひます。縦令楊貴妃とか、小町とか云ふやうな美人でも、赤ん坊から大きくなつて、娘となり、妻となり、母となるやうに、段々進んで行くので、それは宜しいが、一面から見れば、一日は一日、一年は一年と年老ひて行くのであります。其有様は、

古歌に

目はかすみ耳に蟬鳴き齒は落ちて

頭につもる老の白雪

と云ふやうになります。實に形の美は、當てにならぬものであります。併し心の美、即ち忍耐とか、貞操とか、柔順とか、數へ立てれば、限りがありませんが、是等の美しい婦徳と云ふものは、人の生涯は愚、百年も千年も其美を保つて往けるものであります。それであるから、互に此美徳を磨くことに、常に心掛けねばなりません。それで家庭に於ける主婦として、只自身の心の玉を美しくするばかりでなく、自分の息子や、娘をも亦美しく育てなければならぬと云ふ最も重任を有つて居るのであります。

それで尙進んで宗教上からは、婦人を如何様に見るか云ふことを説きませう。宗教上と云ふても、佛教から見た婦人は何うか、基督教から見た婦人は何うか、若しくは儒道から見た婦人は何うかと言

ふ風に、教を土台にして眺めて見るのであります。世間多くは儒道や、佛道では、男より女を低く見るやうに思ひ、東洋では大層婦人と云ふものを賤んで居るが、西洋では大層貴んで居ます。けれども東洋にても、西洋にても、常識を土台に見れば、婦人觀は大抵相一致して居るやうに見えます。先づ基督教のバイブルに就て擧げて見ますと、

『哥林多前書』第七章に、

『爾曹、我に書き遣りし事に就いては、男の女に近付かざるを善とす、然れども淫行を免るゝ爲めに、人各々其妻を有ち、女も各々其夫を有つべし、夫は其分を妻にすべし、妻は又夫に然すべし、妻は自から主る事を得ず、夫之れを主る、此の如く夫も自ら其身を主る事を得ず、妻之れを主る、相共に拒む莫れ』

とあります。

『馬太傳』第五章に、

『我爾に告げん、凡そ女を見て色情を起す者は、心中已に姦淫したるなり。乃至我爾に告げん。姦淫の故ならで、其妻を出すものは、之れに姦淫なさしむるなり。又出されたる妻を娶るものも姦淫を行ふなり』

『以弟所書』第五章に、

『爾曹も各々其妻を己れの身の如くにして愛すべし、婦も夫を敬すべし。』と教へてあります。

『哥林多前書』第十一章には、

『我基督に倣ふ如く、爾曹我に倣ふべし。兄弟よ爾曹すべての事に於て、吾を記念し、且つ我汝に傳へし如く、其傳を守るに因つて我汝を嘉む。凡ての人の首は基督なり。女の首は男なり。基督の首は神なり、爾曹が知らんことを願ふ。』

又曰く、
『男は神の像と榮えなれば、其首に物を蒙るべからず、女は男の榮なり、そは男は女より出でしに
あらず、女は男より出でたればなり、又男は女の爲めに造られたるにあらず、女は男の爲めに造られしなり。』

と説かれてあります。又此外にも種々ありますが、先づ此位にして置いて、次に儒道の方に於ては何うかと云ふに、

儒教は大分事が八釜しいものであります、

『女誡』第二章に、

『夫婦の道は、陰陽になぞらへ、神明に通ひて、天地の道理に違はず、人倫相續の基なれば、聖人の教へにも、夫婦の道を先とし、至つて重き道なり』とあり。

又同じ第五章に、

『聖人の定め置き給ひし禮法にも、夫は再び娶る義あり。女には再び適く法なし。夫は天に喩へたるものなれば、妻の夫を戴く事、天の我を覆ひ給ひて逃れざるが如く思ひて、夫に事へ奉るべし。兩夫に見ゆる事は、戴く天に二つなきが如く、夫に放ち出されたる女は、天の覆ひを離れたる如くなれば、人間の中にあらず、行神明に違ひ奉れば、天罰を蒙り、禮義愆あれば、夫之れを薄む、誠に慎み恐るべきことならずや。』
と、厳しくいつてありますが、之れは畢竟聖賢の仁慈でありまして、女の美點を擧げると澤山ありますが、併し婦人の美點を擧げて、之れを褒むるよりも、缺點を示して、其足らざる所を教へて行くのが眞箇の親切であらうと思ひます。

本來同等同一

又『女大學』には、

「婦人は別に主君なし、夫を主人と思ひ、敬ひ慎みて事ふべし。輕しめ侮る可からず、總じて婦人の道は、人に従ふにあり、夫に事ふるには、顔色言葉使ひも慇懃に遜り、和順なるべし、不忍にして不順なるべからず。奢つて無禮なる可らず。是れ女子第一の勤めなり。夫の教訓あらば、其仰を背く可からず、疑はしき事は、夫に問ふて、其の下知に従ふべし。夫問ふことあらば、正しく答ふべし。其の返答疎ならば無禮なり、夫若し腹立ちて怒れる時は、恐れて順ふ可し。諍ふて其心に逆ふ可からず、女は夫を以て天とす。返す／＼も天に逆ひて、天の罰を受くべからず。」

とあります。頗る厳しい言ひ方でありますから、現代の所謂醒めたる婦人、新しき婦人など云ふ人達から、見ましたならば、一字一句皆議論があることでありませうが、さう云ふことは先づ措いて、『大戴禮』に七法と云ふことが出て居ります。

一、舅姑に従はざる女は去るべし。
 恚ういふ事も、矢張り納が婦人ならば、餘程考へなければならぬ。

一、子なき女は去るべし。是れ妻を娶るは子孫相續の爲めなればなり。然れども婦人の心正しく、行儀よくして、妬む心なくば、去らずとも同姓の子を養ふべし。或は妾の子あらば妻に子なくとも去るに及ばず。

と。これは一言附け加へて置かねと工合が悪い。支那の立場をいふと、如何にも女は子を作る機械見

たやうに見えます。昔は腹は借り物と言つて、子を作つたら、最う要はないと言ふやうなことは、甚だ都合極まるのであります。

- 三、淫亂ならば去るべし。
- 四、恪氣深ければ去るべし。
- 五、癩病など悪き病あれば去るべし。
- 六、多言にして慎みなく、物言ひ返へすは、親類とも仲悪しくなり、家亂るゝものなれば去るべし。
- 七、物を盗む心あれば去るべし。

かう云ふやうな鹽梅であります。之れは儒教で教ふる中の一つ二つを擧げたのであります。

然らば佛敎は何う云ふ見方であるか、『玉耶女經』の中には三障と云ふ事が説いてあります。

『幼にしては父母に障へらる。嫁しては夫主に障へらる。老いては吾子に障へらる。』
 又十惡と云ふことも説いてあります。惡と云へば大層殿しい文字でありますが、惡の字には左様重い意味はないのであります。

一、其の生るゝや父母之を喜ばず。
 吾々事情は知りませぬが、世間によくある事で、お子様が出来たさうですが、男の御子ですか、何

うもお耻かしいが女の子でありますなど云つて居る。何にも愧ぢる事はない。何れにしても同じこととで芽出度であります。女の子が生るれば、父母之を喜ばぬ傾向があります。そして男の子が生るれば喜ぶ風があります。

二、生れ終りて、之を養育するに味なし。

三、成長するや常に嫁するを憂ふ。

四、到る所として常に人を畏る。

五、終に嫁して父母に離れざるを得ず。

十悪といつても悪い事をするに云ふのではありませぬ。女としては、斯う云ふ事がある。生んで貰つて親の側から離れたくないが、離れなければならぬのであります。

六、生家を去り、他の門戸に倚る。

七、懐姓の悩みあり。

男にはないことであります。婦人には此懐姓の悩みがあります。

八、出産の悩みあり。

これは洵に餘儀ないことであります。

九、常に主夫を畏る。

十、席に自在ならず。

斯う云ふ事が佛教の方で敷へ立ててあります。兎に角、基督教なり、儒教なり、婦人の見方は、略ほ或る點に於て一致して居るやうであります。

女にも勝れた點が澤山ありますが、それはこゝに省きて、其至らざるところ即ち弱點とか、缺點とかを擧げて女を訓へてあります。之れが即ち教であります。人間は妙なもので、人から褒められたり追従を云はれたりすることは、身の爲めにならぬことでも之れを喜ぶが、所謂良薬は口に苦しで、氣に入らぬことでも云はれると、其の時は快くないが、後に至りて利き目が分る。元來婦人は情に脆いものでありますから、餘りおだて上げるやうにすると、却つて後に不爲めになることになりす。此點から考へて見ますと、其弱點を擧げて教へて呉れたところは、基督教でも、孔子でも、釋迦でも、親切な次第であると思ひます。今一家庭に於きましても、夫の役目があり、妻は妻の役目があつて、夫が外で働けば、妻は内に在つて之れを助けるのである。同等とか同權とか然う云ふことを云はずとも、本來同等一なのでありますから、其點は實に天の配劑の妙であります。故に若し人格と云ふ立場から言へば、婦も夫も、男も女も、親も子も、通じて皆一つであります。其點に就いては、佛は斯う云ふやうなことをいつて居られます。若し佛性を知らざる者あれば、吾之を解いて女人となし、若し能く佛性あることを知る女人あれば、吾之を解いて大丈夫と爲す。』とあつて、女が男になつたり

男が女になつたりすることが能きる。智慧の光りを認めて居る者は、女でも男である、此故に女人であつて能く自身に佛性あることを知らば、即ち是れ男子なりと、之れは人格の上から見て言はれたのであります。

艱難に生れて逸樂に死す

猶彼の一夫一婦と云ふことが、佛の教に於ては、最も八益しいので、妾を有つとか、妻の外に何か隠れたる婦人を有つとか言ふ事は嚴禁である。それで『六法禮經』に、夫として其妻に對する條件のやうなことが説かれてあります。『其第一の簡條に、出入常に婦を敬す。第二に、飯食も時を以てし又衣服を與ふ』とありまして、三度の食物は勿論四季時々の衣服なども、不自由をさせぬやうにする。『第三に、常に金銀球璣を給與す』とあつて、金錢の不自由をさせぬやうにする。『第四に、家中所有多少悉く用ゐて之れに付す。』一家中のあらゆる物事、皆妻に一任すると云ふやうな種々の條件が説かれてあります。又妻として、夫に事ふる條件は、『夫外より來らば方に起ちて之を迎ふべし。夫出で、在らざる時は、方に掃除して之れを待つべし。常に夫の教誡を用ひ、あらゆる什物藏匿することを得ず、夫休息する時は善藏して乃ち臥すことを得』と云ふやうに教へられてあります。

古語に『艱難に生れて逸樂に死す』と云ふ言葉があります。之れは男女に限らず、人間は辛苦して汗水になつて働いて居る時には、活潑に生きて居るが、餘り樂になると死んで了ふ。身體は死んで了はぬでも、精神的に死んで了ふ。優れた人物になる迄は、あらゆる艱難辛苦に堪へて、精神も活々として居るが、樂になると飛んでもない心得違ひが出来る。此の樂になる時代が、最も氣を付けねばならぬ時代であります。何んでも艱難辛苦の時代の心を以て、愈々益々進んで、良人を助け、成功の域に達せしめられるやうに願ひたいものであります。良夫の成功は蓋し婦人内助の功が與つて力があると思ひます。

夫れに就いて妙な話があります。無住和尚の『沙石集』と云ふ書物に出て居ることではありますが、或る處に若い夫婦があつて、仲睦じく暮して居つた。ところが或時良人が不圖した風邪が元となつて次第々に重病に陥り、遂に醫者も首を傾げるやうになつて、本人自身最早此様子では、到底助かることはないと思ひましたが、只自分の心に掛るものは、後に残るところの美しい妻の事である。それで或る時妻を枕邊に呼んで云ふには、『私は病氣に罹つて、今度は到底助からぬことと思ふ、就いては私が死んだあとは、御前は未だ年が若いことであるから、決して寡婦で居るには及ばぬ。然るべき良人を擇んで再び嫁入して呉れ、併し私の事を想ひ出したら、三度に一度、何うか線香の一本でも上げて呉れ』と云つた。斯う云ふ事を言つたものゝ、實は吐の底には未練があるのであります。ところが妻

は却々確乎した者であつて、「それは貴郎何を仰有います、病氣は氣から起るとさへ申します。心を確乎有つておのになつて、喩へ石にかぶり附いても、屹度癒つて見せると云ふ決心があつたならば、必ず全快しますから、弱い心を出さぬやうに」と熱心に言ひました。妻はさう云ふて置いて、臺所に行つたと思ふと、間もなく、キヤツと叫び聲を放つた。そして庖丁で鼻を殺ぎ取つて、血だらけになつた儘、夫の傍に出て来ていふには、「貴郎には心がりがある様子ですから妾は斯うして決心を御目にかけます。妾は貴郎が萬一亡くなられても、決して再縁するやうな事は致しませぬ」と言つた。それを聞いて良人は嬉しやと思つたのが動機となり、妙なもので、助からぬと思つた病氣が、打つて變つて、次第々々に快くなつて來ました。或はさう云ふこともありませう。神經作用と云ふものは、病氣を手傳ふもので、良い方にも、不良方にも導くものであります。其處で其夫は安心が能きたから、病氣が全快した。

ところが人間は達者になつて見ると、心の變り易いもので、今迄は貞節な妻、美しい妻と思つて居つたのが、さて鼻がなくなつて、其顔が變ると、朝から晩まで、顔を附き合せて居ることが、何うも面白くないと云ふやうな勝手な心が起つて來た。恚う云ふ事は、往々あるものです。何うも厭やになつて來たから、別れたいと云ふ所から、難癖を付けて、無理に離縁して了つた。昔は亂暴な離縁をすることが澤山あります。ところが如何に女と雖も、黙して居られませぬ。餘りな仕打である。あれ程

に言つて置きながら、何の罪もないのに、離縁にするとはい、口惜しいと云ふところから、之れを領主に訴へ出た。其處で領主の方から段々と取調べて見ると、妻の貞節な事、夫の心得違ひの事が明かになりましたから、そこで後の誠めの爲めに、其夫をも鼻なしにしたならば可からうと云ふことになつて、其夫の鼻を切落して了つた。其處で丁度よい鼻なし夫婦が出來上つた。夫れから其夫も不心得を改めて、何んの苦情もなく、平和に一生を送つたと云ふ事でありませう。此話の如く人間は艱難の時に、眞箇の精神が活きて働いて居りますが、逸樂の時には、虚榮と云ふ心が起りまして、所謂精神的に死んで了ふやうなことになります。

川柳二句

たのしみは嫁をいびると寺参り

佛にも木性金性京と奈良

煩惱は菩提の種子

生死其儘が涅槃

煩惱を截斷するには、如何にすれば可いかと云ふに、是だの非だの、好だの悪だの、順だの逆だのと云ふものに關せず、一向に修行を積んで行くのである。かくて念々不退して行けば、時節同縁は不思議なもので煩惱の影像自然に消え去ることが出来る。即ち暗い室に燈明をつけると、暗さが去つて明が一時に来るが如くであります。此處に於て、初めて生死を脱し、無念無作の妙境に達することが出来るやうになります。

生死を解脱し、有無を超越することができたならば、單にその生死を解脱したことを喜び、有無を超越したことを誇つてゐるばかりでは不可ない。そこに止つて居るのもまた病たることを免れない。既に兩邊を截斷し盡したならば、今度は、生死を自分の方から使つて行くやうにすべきであります。たとへば金を手に入れたならば、それを單に懐中に入れて置かずに、使はなければならぬと同じであ

ります。併し金を得たからと云つても、無茶苦茶に使ふのではない。チャンと使ふべき方面によつて、それ／＼使ふのであります。學生が月々郷里から、學資を貰つたならば、拂ふべき順序に應じて、これを整然と拂つて行くべきであるが、全部を遊興費に充て、更に假病を遣つて、郷里に増加を要求するが如きは、決して當を得たるものと云ふことができません。現代の學生の風俗頗る紊亂したと云ふのも、恚くの如く金錢を悪用するのが、多くなつたからであると思ひます。今の今まで煩惱に使役せられて居つたのが、今度はそれを截斷して、主人公となつたのであるから、今からはその煩惱を召使ひとして行くやうにするのであります。

元來此の煩惱と云つても、決して他物ではない。迷つて居る間こそ、煩惱は憎むべき仇敵であるけれども、一度それを截斷して、無心の境界になれば、その煩惱は却つて菩提の種子たりしことが解つて來るのであります。

田の草を取つて其まゝ肥かな

と云ふ句があるが、煩惱そのまゝが菩提、生死そのまゝが涅槃たることが知られます。故に「六祖壇經」には

「凡夫は即ち佛、煩惱は即ち菩提、前途迷へば凡夫、後念悟れば即ち佛、前念境に著すれば即ち煩惱、後念境を離るれば即ち菩提」

とあります。更に『説戒』には此旨をいよく明細に説明して、

「衆生の三毒は澁柿なり、如來の三徳は乾柿なり、澁柿のまゝにて置けば、腐爛して棄つる故に、其皮をむきて、意をつけて日々乾し、雨のかゝらぬやうに用心して、毎日々々出し入れに念を入れ、程よき様に干し揚ぐれば、妙味の乾柿となる。故に甘味となりて、後に再び澁味に還る道理はなし、我等が三毒も其のまゝにて置けば、煩惱にたゞれて、三惡道に落ちて棄たる、それを煩惱の皮むきのけて、佛の慧日にあて、乾かして、魔業の雨のかゝらぬやうに、時々、日々、月々、年々生々、世々、出し入れて、念入れて如法につとめて、窮竟に至れば、甘露の三徳三身の境界となりて、もとの澁味の三毒にかへることはなきなり。金銀の土石の中より出で、淘り鍊りして後は、再び土石にならざる道理にも以たり、是れをさへ篤と合點すれば、煩惱即菩提の妙旨がいよく明白なり。」

とあるは、大いに吾人の參究しなければならぬ點であると思ふ。若し這裏に向つて、當所に出生し、隨處に隱没し、念起念滅出沒自在なるが如きは、これ得道上の活作用にして、宿を周家に借りて再來し一笑直に脱去し、火定三昧に入り、斷頭の時に臨んで、白乳三尺を遍出するが如きは、生死を以つて遊戲一場としたものと云ふべきであります。

超越が大切

然るに此處に一つ注意せなければならぬことがあります。それは世上に於て、或は死に處して泰然自若、毫も神色を變ぜぬものと見て、彼れは豪傑である。道力であると早合點して居るものがありますが、死に臨んで、泰然自若として居ると云つても、決してそれが悉く道力そのものであると斷定される譯のものではありません。それは只糞度胸が強いと云ふものであります。糞度胸の強いのは昔ばかりではなく、今でもある。無教育な無頼漢のやうなものになると、生命などは何んとも思ふて居ない。世の中に何にが爲めに生れて來てゐるかも知らぬ輩であるから、随つて生命など捨てることを一向氣にとめぬ。それが爲めに往々血塗れの大喧嘩をしたりなどして、死に到るが如き實例は、日日の新聞で、常に吾々の見るところであります。眞の大丈夫は、こんなものではありません。死ぬるべき時には死ぬるが、無茶苦茶に生命を捨てるやうなことはしない。得力の上の度胸は、一條の生死上に脈血貫通して、斷つべからざるものであります。

それはまた何故であるかと云ふに、縁の大慈悲心を起し、順逆二境に向つて、一點の眼華すら見ることがない。即ち活脫現前して、格外の玄機を發揚することが能るのであります。總て世間と云

はず、出世間と云はず、獨脱した上でなければ、自由自在の活用が能きない。最近に於ては、乃木大將の如きは、確かに道力の上から自刃したものでありませう。大將は南天棒和尚に參じて「露双劍」の公案が透つたと云ふことであるが、大將があれだけの大決心は、何うしても順逆二境に超越しなければ能きぬ業であります。故に總てに此超越と云ふことが大切であります。自分が其渦巻の中に居る内は、如何に口や文で偉いことを云つても、現に身の動きが取れて居らぬのであるから、眞理とするに足らない。渦巻を超越して、初めて其渦巻をも自由に論究することの能き資格がある。生死の渦中にありながら、如何に生死の透脱を人に教へても、それは偽りである。自分が眞に生死を超越して、一步その上に出で、初めて生死を論量する資格を具へることになります。而してこれは總てに應用することが能きます。見よ、金錢に執着する人間は、之れを自在に使用することが能きませぬ。金錢を超越して、初めて金錢を自在に運用する事が能きるではありませぬか。身體に執着して居る内は、身體を自由自在に活動せしむることが能きませぬ。身體を超越して、初めて身體を自由に活動せしむることが能きます。若し身體に執着して、朝寝坊を極めこんだり、淫樂に耽つたりして居ては、決して自由の活動の能きるものではありません。政治を修する人も、實業に従ふ人でも、武人でも、農夫でも、そこに居て、そこを忘れることによつて、初めて自由の分がある。こゝが無心であります。此の無心から出た活動にして、初めて有意義なのであります。故に古人曰く、

「外に山河大地あることを見ず、内に見聞覺知あることを見ず、求むべきなく、度すべきなく、打成一片ならば、一毛頭上に在りと雖も、廣きこと大千世界の如く、鑊湯爐炭の中に居すと雖も、安樂國に在るが如し、七珍萬寶の中に居すと雖も、茅茨蓬蒿の下に居るが如し。」
 と。恁くの如く貧富貴賤の外に脱然たるものがあるならば、社會に處して眞に意味ある生涯を送ることが能きます。

然らば徹底無心の境界は如何と云ふに、白隠禪師が、

畢波羅窟裡。未結集此經。童壽譯無語。

阿難豈得聽。北風窓紙隙。南雁雪蘆汀。

山月若如瘦。千佛縱出世。不添減一丁。

と云つたのは、所謂是れであります。併し這裏は且らく古人の道得底である。若し衲に向つて如何なるか是れ無心の活動と問ひ持ち來るの漢あらば、衲は間に髪を容れず直下に、

渭北春天樹。江頭日暮雲。

と云はんと欲するのみである。喝。

平等主義と差別觀念

佛も人間も同じこと

人間は元來平等なるものであります。其間に差別のあらう筈がありません。否、佛と人間も同じもので、即身即佛であります。そればかりではない。無情の草木國土さえ、猶ほ人間と同じものであります。草木國土も一切成佛します。昔から現今に至る國家の歴史に就いて考察しても、一大長足の進歩を遂げんとして、自覺の時代に到達すれば、既往のあらゆる囚はれから脱して、人心を直指し、其根元に還つて、平等觀念を懐くやうに爲るのが法であります。國家が未だ自覺せぬ内は、無闇に外國を怖れたり、外國の文明に心酔したりなどするが、一端自覺して、國運興隆の機運に向へば、國を擧げて平等觀念を懐き、自國の力と、外國の力との間に、差別を認めず、歐洲の文明何かあらん。神州には神州建國以來、他の窺ふを許さざる正大の志氣があるといふやうな調子に爲るものであります。又同時に國民各自の間にも、平等觀念が頗る旺盛に爲つて來て、伊太利統一の勇士ガルバルヂーの如く、匹夫の身を以てして、一躍將相の位置に上るものを生じ、上下貴賤の差別が、撤去せられて了ふものであります。維新の風雲に乗じて、身を立た元勳連中の動機と爲つたものは、孰れも平等觀念でありませぬ。個人の私生涯に於ても、猶ほ且つ同じで、二十歳前後の春期發動期に達し、これから智情意の一と進歩があらうといふ年齢とも爲れば、國運興隆の際に於ける國家と等しく多少活地のある青年は、孰れも皆、平等觀念に驅られ、彼れも人なり、我れも人なりと思ふやうに爲るものであります。釋尊が、四十九年三百餘會の説法を始め、最初に方つて、唱道せられたところも、猶ほ且つ此平等思想で、四河海に歸すれば、同一鹹味と爲り、四姓佛に歸すれば、同一釋氏と名づくといふにあつたのであります。天地宇宙は一金萬器であります。同じ一つの金が、種々雑多の器物に、其形を千變萬化してゐるのであります。少しく思索の歩を進め、尋ね究めて其根元に至れば、必ずや平等と爲ります。あらゆる物質の元基が、皆一の電子に歸して了ふのと同じであります。併し平等觀念は元來原始的の思想で、かゝる觀念に逢着するには、必ずしも骨の折れるものではない。どちらかと言へば、平等思想は、元來が破壊思想であるから、之れに達するには、比較的容易であります。敢て智者、天才を要するまでもなく、凡才の猶ほ之れを能くし得るところであるのです。

差別観念は建設的

併し人間に、平等観念ばかりがあつて、差別観念がなくなつて了らば、世の中は宛ながら闇黒の中で、獸が相搏つ如き雑然たる状態に陥るものであります。「柳は緑、花は紅」とは、外ではありませぬ。人間の差別観であります。此差別観に入るには、平等思想に到達するよりも、遙に大なる智慮を要し、遙に多くの經驗を積みねばならぬのであります。蓋し差別観念は、平等観念の如く破壊的性質を帯びず、建設的性質のもので、原始的の思想でありませぬから、差別思想は、平等思想よりも更に進歩し、更に成熟した思想であります。天地宇宙は、一つの大きな網のやうなもので、又一大連鎖であるとも見られ得るが、其一つ一つの網の目、若しくは連鎖に相當するものが、是れ即ち差別であります。網のある内は、網の目の結節をなくして了らば、連鎖のある内は、鎖の連結をなくして了らば、譯には往かぬ如く、天地宇宙のある内は、差別をなくする譯が往くものではありません。否な微少の差別が亂れても、それが直ちに、宇宙全體の組織の上に、大影響を與へることに爲ります。社會組織の上に於ても、猶ほ且つそれが同じであります。差別を全くなくして了らば、社會其ものも亦なくなつて了らばねばならなくなります。社會は無差別で、到底存在し得らるるものではありません。人倫道

徳の社會に缺くべからざる所以は、實に愛にあるのです。靴は足に穿くべきもので、帽子は頭に戴くべきものであります。靴を頭に戴き、帽子を足に穿いて、それで社會の利益幸福を、増進しやうとしても、到底能きるものではありません。又これは決して平等思想でもない、差別を顛倒して、更に一層其差別に囚はれたるものであります。襦袢は寝衣にするか、或は家内に寛いでゐる時に、着るべきもので、荷くも禮儀を保つべき宴會の席上などへ、着て出るべきものではない。然るに強いて襦袢を着て、禮儀を保つ可き宴會に出席したり、弔意を表すべき葬式に列して強いて笑つたりするのは、之れを稱して平等思想であるとは言ひ得ぬ。否な恚の如きは、却つて平等を無現する我見に囚はれて、其奴隸と爲つたものであります。眞の平等思想は、全く我見を離れた『無我の愛』であるべき筈のものであります。基督教が頻りに博愛を唱道し、世界の同胞悉く是れ兄弟姉妹で、共に等しく神の子であると言きながら、基督教國民に、兎角戦争好きの弊多く、十字軍以下多くの戦争が、神の名に依つて行はれ、遂に先年の歐洲戦争を醸すまでに至つたのも、基督教の神は我見の大なるもので、平等の權化でないからではありますまいか。佛教の神は平等の權化で、萬物悉く之れを神なりとし、人間も、佛も、草木國土も皆等しく神なりと稱へるのが、是れ佛教であります。従つて佛教を信する教徒の間には、自ら大慈悲心の發起を見、勢ひ戦争癖を懐き得られなくなります。恚くして眞の平和は、佛教に依つて、始めて世界に將來し得らるゝものと爲るべきは、火を賭るよりも明かだが、今や

佛敎界に其人なく、かゝる世界的平和運動を佛敎國たる日本より開始し得られぬを遺憾とします。

理に順つて心を起せ

理の顯現は秩序であります。秩序の體は差別であります。人間は全く平等觀念がないやうでは、其人や卑屈、度すべからざる者と爲り、奮發も向上も全く遂得られぬ、無氣力の形骸に終つて了ふが、去ればとて差別の貴ぶべきを知らず、秩序を壞亂して悔ひず、徒に我見に囚はれて、進退するのみならず、其人と爲つて了へば、其人は必ずや、人倫に反く亂臣賊子と爲るに至るものであります。嘗て歐洲基督敎國の君主間に行はれた帝王神權説の如きは、我見に囚はれて、差別を顛倒し、平等を無視した結果であります。社會の秩序も蔑視し、人倫を顧みず、靴を頭に戴いて、これが即ち平等であるとするが如き、誤つた思想も、亦是れ帝王神權説と等しく、理に逆らふ我見たるに過ぎぬのであります。去れば經文にも

『理に順つて心を起せば善となり、理に逆つて起せば惡となる。』

とあります。青年は、須く入るに容易なる平等思想に囚はれて、差別觀を忘るゝ如きものとならず、更に進んで平等思想の上に築き上げられたる差別觀に入り、平等觀念を離れずして、能く差別に處し

無我の愛に入りながら、然かも能く『唯我獨尊』の見識を支持する人と爲るに至るを心懸く可きであります。我見と唯我獨尊との間には、猫と虎との差よりも、更に大なる差があります。平等思想に到達して、亂臣賊子と爲り、差別を無視して、理に逆へる背徳漢と爲るのは、恰も是れ虎を描いて、猫に類すると其軌を一にするものであります。國家としても、國民としても、將た又一私人としても、平等思想を把持して、平等思想に囚はれず、差別觀を確守して、差別觀の奴隸とならず、平等主義にして而かも秩序整然、秩序嚴格にして而かも一視同仁の主義を忘れぬものゝみが、常に強くして、常に勝利者たるを得らるゝのであります。ピスマークが、獨逸の國家をして強くし、祖國の國民を健全ならしめんとして、國家社會主義を唱道するに躊躇しなかつたのも、其由來するところ、實に此處にあるであります。蘇東坡の詩に、こんなのがあります。

廬山烟雨浙江潮、不到千般恨未消、到得歸來無別事、廬山烟雨浙江潮如何にも面白い。

覺忠

世をてらす佛のしるしありければ

まだ燈火も消えぬなりけり

永久不變の大道

宗教的安心

納は先づ恚ういふことを尋ねて見たいと思ふのです。爰に衣食住に何も缺くる所のない人があると想像します。所が此人は其心の中に深く省みることがありまして、遂に何か一つ不足してゐる物があると自覺することがありはしまいか。これは實際問題であります。家もあり、妻もあり、子もあり、それに健康でもあるといふそれだけで、一寸考へた時には、事が足りてゐるやうであるが、最う一段心の中に立ち入つて見て、さて實際何にもかも圓滿具足かと、深く思ひを廻らしますと、何んだか知らぬが、一つ足らぬものがあるやうになつて來るのです。そこを一つ考へて見ますと、何うしても、何にか宗教的に一つの心の落付き場所と云ふものも有つて居らねばならぬやうになるのです。宗教的といふ文字を態と此處に付けて置きます。併し是非共、佛教に頼らなければならぬと云ふのでなく、是非とも基督教に頼らなければならぬと云ふのではないが、宗教的安心、然ういふものが要りはしま

いか。若し己は温き衣服を着、飽くまで食ひ、安らかに住つて居るから、それ以上求めることはないと云ふのは、苟も萬物の長とか、靈とか云ふ人間として、決して言ひ得る所ではないと思ひます。また言ひ得るとしましても、それが何にも豪いことでもなく、人間の價値を高めるやうなことでないのです。

吾々は能く一と口に人生々々といひますが、この人生を如何様に眺めるかと云ふと、それは學問的に云へば種々であります。これは學問の研究ではありませぬから、努めて平たく説きたいと思ふ。此人生を何う眺めるかと云ふと、先づ大凡二つの眺め方があると云つて可からう、同じ人生であるが、之れを二つに分ける。それは何にかと云へば、一つは樂觀的に此世の中を眺めて行く、即ち此世の中を面白いものと眺める。最う一つは悲觀的であつて、此世の中は、實に果敢ない、味氣ないものであると、恚う云ふ工合に見るのであります。

故郷に残して置いた年寄つた親が淋しく暮してゐはしないか、最愛の妻が病床に臥して居りはせぬとか云ふ時には、月を見ても、花を見ても總て、悲しみを催す種となるのであります。又一方の此世を樂觀する人から眺めると、古人の歌ふてゐる通り

この世をば我世とぞおもふ望月の

かけたることもなしと思へば

と云ふやうに觀らるゝのであります。元來同じ月でありながら、一人はこれを悲しく眺め、一人は之れを樂しきものとして眺め、殆んど此世を我物の様に思ふて、天上に輝いて居る十五夜の月の如く、少しの缺けたところもなく、萬事萬端、意の如くならざる事はないと云ふ、かう云ふ眼を以て眺めたのです。同じ月だが、兩面から眺める事ができます。併しながら之れを眞理の上から説きますと、只之れを悲しいものとばかりに眺めたのも、本當に月を眺めたのではない、又一圖に嬉しい、樂しいと眺めたのも、又月の本體を眺めたこと云ふ理由には爲りませぬ。月の本體にあつては、悲しい、嬉しいと云ふ事を立ち越えて居るのであります。

ところで先づ悲觀する人は何うかと云へば、月の本體は知つて居らぬが、悲觀すべき理由がありません。それは人間には一の慾望がある。此慾と云ふものは、必ず退くべきものかと云へば、然うでもない。慾と云ふものを善く用ふれば、それが即ち意志の力となるのであります。悪く用ふれば、強慾とか何んとか、大いに忌むべきものとなるのであります。此慾のことは心理學的に説かねばならぬが先づどんな慾を有つて居るかと言へば、我々は智識慾、名利慾、生存慾と云ふやうなものを有つて居る。智識慾、ものを識りたいと云ふのが、人間の持前、孩兒でも徐々智恵がついて來ると、見る物、聞く物に就いて一々尋ねる。例へば茶碗があればこれは何にかと尋ねる。それが解ると、又食卓のことが知りたくなります。その上に並べてある種々のものが訊きたくなると云ふやうに、智恵が段々増す

に従つて、物事が知りたくなつて來る。初めは普通の物事を知り得たならば満足して居るか、段々智識が進んで來ると、之れを學問的に知りたくなる。それでも安心ができません、哲學と云ふやうな學問に入つて行く、猶ほそれでも安心ができませんと云ふので、今度は宗教界に入つて行くと言ふやうな有様であります。ところが智識が幾ら進んで行つても、此世の中は智識萬能では足りない。智識が一尺進めば、又一尺不可解のことが殖えて行く、二尺進めば、二尺分らぬ事が殖えて來る。一丈、二丈と進んで行けば、又それ丈の解らぬことが殖えて行く。そんなものでありませう。

何も知らん間は何もかも分つて居るやうであります。滿洲などを旅行して汽車の中から眺めて見ると、支那人などが田畑の畦に腰をかけて、長い煙管を啣へて、青天井を眺めて居る。其様子は實に天下泰平の様だ。世界の事は何も彼も解つて居るやうな顔をして居ます。其様子は毫末の煩悶もない様であります。之れは物を知らんから安心して居るので、一時的の安心であります。斯う云ふ連中でも、若し智慧を啓けさして行くと、疑ひが出て來る、そして分らぬ事が段々殖えて來る。解決が付かぬと益々心に不安を感じると云ふ風に爲る。であるから、學者になればなるほど、解らぬ範圍が廣まつて來る。それでは仕方がないでせう。人間は僅か三十年で死ぬるものあり、また五十年で死ぬるものもある。七十は古來稀なりと言ふて居る。縱令百まで生きて居つても、宇宙から見れば、實に瞬きする暇もない位であります。でありますから、此短き時間に於て、智識だけで安心して死なうと云ふ様

な事は能きないといふても、智識を否定するのではありませぬ。智識は必要であるけれども、何うもこれだけでは安心が能きぬ。假令一時は安心が出来るとしても、生涯を通じての安心が能き得られないのであらうと思ふのであります。

所で人間は、智識慾をも有つて居り、名利慾をも有つて居る。そして智識だ、學問だと云つて叫ぶが、實體上から考へると、學問するのも、智識を開くのも、自分の名譽を得たい爲め、自分の利益を得たい爲めで、口では道徳者らしい事を言つても、其實人間として利益と云ふ事と、それから名譽と云ふことを離れることを得ないのであります。露骨に言つて見れば、學問するのも自分の名前を高めたい。自分の利益を得たいと云ふ事を主として居るのであります。如何なる人でも食はず飲まずに、學問すると云ふ人はない。皆利益の爲めであります。利益を離れて居らぬと思はるゝ人は先づないと云ふても可からう。

四苦とは生老病死

それから現はれて來るのが、生存の慾であります。死にともない、永らへたい。若し生命を取ると云ふたら、金も惜しくない。名譽も何も要らないと云ふ事になるに違ひない。して見ると如何なる智識學問も、如何なる利益名譽も、煎じ詰めた所は、生存慾と云ふ事に歸するのであります。我々は何時までも永らへて居りたい、生命が惜しいといふ事は、どんな豪い人でも、普通の人でも此心に變りはない。諺に生命あつての物種といふ通りであります。人が朝から晩まで、齷齪として働いて居るのも、亦只此慾の爲めであります。

其處で人間には、今いふた如く、智識慾、名利慾、生存慾といふやうなものがあるが、併し此慾が一々遂げ得らるゝものであるか、何うかと云ふことを考へて見ねばならぬ。欲しいと思つても、扱世の中は然う問屋が卸さぬ。慾は腹に一杯満ちて居るのであるが、之れが思ふ通りに行かぬのは自然であります。其處を釋尊が洞見されて、此人生には四苦八苦ありと教へられてあります。四苦とは生、老、病、死、夫れから八苦とは此四苦に加ふるに更に哀別離苦、怨憎會苦、求不得苦、憂悲惱苦の四を以てして、八苦となる、斯くの如きものが、吾人の周圍を取り捲いて居ると云ふのであります。然うであります、人がオギャーと、此世に生れ出た時には、互に目芽度と言つて居るが、これにも出生の苦と云ふものはあるが、兎に角芽出度と言つて居る。然う云ふ中に大きくなつて、一日一日段々年寄になつて往くのであります。これが老苦であります。それから達者だ達者だと云ふて居る間に、病氣と云ふ苦に罹る、そして遂に來るものは何かと言へば、死の一字即ち死ぬると言ふ事になる。誰れでも長生したいと云ふことは慾望であるが、遂には死なねばならぬ。誰れしも年寄になりたくな

いが、年寄になつて行くと云ふ有様であるから、此點から見れば、悲觀せねばならぬ筈である。誰やらの歌に

朝夕の飯さへこわし柔かし

思ふまゝにはならぬ世の中

とある通り、思ふ通りにならぬのが世の中でありませう。そこで苦と云ふ字が附いて廻はる。昔弘法大師が、文字の手ほどきをすると同時に造られたのが、

『色は匂へど、散りぬるを、我世誰れぞ常ならむ、有爲の奥山、今日越えて、浅き夢見し、酔ひもせず。』

それを無意識に、『いろはにほへと』と言つて居るが、色は匂へど散りぬるを、我世誰れぞ常ならむ人生は生老病死の四苦が入り代り、立ち代り、攻め寄せて来る。そこで此有爲無常の奥山を越え、浮世の夢から覺めて、眞の無爲の大道に入らねばならぬ。佛經に、

『妻子珍寶及王位、臨命不隨者』

とあります。所謂偕老同穴を契つて、いとし可愛と思ふ者は妻子であるが、其妻子と雖も、いざ死するといふ一段になると、之れを携へて死出の旅に上ると云ふことは、人間の力では行かぬ。如何に多くの金や寶があつても、又何程の尊い王位に居つても、死ぬる時は、それを携へて行くと云ふ事は

能きませぬ。であるから、彼の有名なカーネギーは、金が出来れば出来る程、國家の爲めに役に立つこと、多數の人を救ふことに金を使ふのを考へて居ます。カーネギーの様な金持は、小さいな自己だけの慾を充したいと云ふやうな淺薄な考へは有つて居ませぬ。金と云ふものは、自分が専有すべきものでない。これは預り物といふ位な考へで資本を増しては大きい仕事をし、多くの金を得ては其金を更に大きく使ふと云ふ遣り方で、アメリカあたりの文明的な教育ある人達は、斯くの如く活きた仕事をして居ります。妻も、子も、珍寶も、及び王位、如何に最愛なる妻子でも、如何に多くの珍寶でも亦如何に貴き國王の位と雖も、いざ命終の時となつては、何んの力にもならぬ。爰に於て始めて道德的の考へを起したり、宗教のことを聴くやうになつて来る。これば洵に道理な事でありませう。此様な考へは、只人の命終の時ばかりでありませぬ。遠く故郷を離れて、外國に彷徨ふて居る時などは、利益、幸福、名譽など云ふものゝ外に、何やら一つ形而上の慾求を生ずる傾きがあるやうに思ひます。人間と云ふものは、内地に居る時よりも、海外に出た時に於て、斯様な事を切に感ずるものと見えませう。又危険な境遇に入ります時は、斯くの如き感はずるに當じて来るものです。柄も日露戦争の時に従軍して、多少経験もあります。人間は平時よりも戦時には、至つて眞面目に立ち返へるものであります。立派な上長の人でも、眞面目な凡人に立ち返へり、一言半句でも、安んずる意味を知りたいと云ふことになりまして、生死に關する質問が、續々出ました。人間といふものは、斯くの如き

場合には、至極眞面目になるものであります。生存の否定と云ふことになると、容易の問題ではありませぬ、四苦の意味は、大抵これで解るであります。

眞の宗教的精神

次ぎは愛別離苦であります。可愛と思ふ者には別ればならぬと云ふ苦がある。世の中の可愛いものには、早く分れねばならぬ。次は怨憎會苦、彼奴は虫が好かぬ氣が合はぬ、何處へか行つて呉れば可い、早く死んで了へと言つて嫌ふ人とは、却つて始終出會はねばならぬ、一緒に暮らさねばならぬと云ふ有様、世の中は總て然うしたものであります。離れたいと云ふ人とは離れられぬ。離れたくない人には、早く離れねばならぬといふ様になります。これが愛別離苦、怨憎會苦と云ふのであります。然ういふ事は、皆が経験してゐることであらうと思ふ。次は求不得苦、あれも欲しい、これも欲しいと云ふ、其欲しいものは、人々の學問の程度、境遇の如何に由つて違ひますが、兎に角世の中は欲しいものだらけで、幾ら得ても足らぬやうに思はれる。所がそれが思ふやうには得られない。これが求不得苦。次は憂悲惱苦、或る一つの疑ひを懷いて居て、解けないとか、憂い辛い事に心が悶え惱んで居るとか云ふ時は、苦しむであります。少しばかり學問をして、或る一つの意味が解けない

時には、大變に苦んだ結果、瀧壺に飛び込んだり、或は噴火口に飛び込んだりする。此世の中のことには到底解らぬ、解らぬ世の中に住んで居つては詰らぬから、死んで了はうと、斯ういふ人は情に於ては大に憐れむべきであるが、理に於ては更に許すことが能きぬものであります。悲觀する方から眺むれば、斯ういふ鹽梅に、物を求めて得られないとすると、苦しくて堪まらぬ。此世の中は苦しい、悲しい、詰らぬものであると云ふ考へが起つて來れば、何事も能きないのであります。そこで何うであります。眞の宗教的精神と云ふものが、始めて現はれて來る。其宗教的精神といふ者は、それこそ永久的精神であつて、時間、空間を貫いて渝らぬと云ふ精神、それを哲學的に言はうとすると六かしいから、宗教の上では唯神を祈れよ、佛を念ぜよと云ふのであります。

我國の英雄豪傑の傳記を読んで見ても、亦外國の優れた人の傳を読んで見ても、ア、神よ我を助けよと云ふ様なことを言つて居る。助けよ所ではない、ア、神よとスツカリ同化してしまつて居る。眞の宗教者になると、唯南無阿彌陀佛で安心して死んで行く。加藤清正の如きは南無妙法蓮華經の題目を旗に書いて聯隊旗の如く押し立て、敵に向つて、千軍萬馬の中にも、殆んど人なきが如く進んで行く、又家康の如きも、南無阿彌陀佛を一日に八萬遍宛唱へたと云ふことであります。只念佛とか、題目とか云ふものは、死んで行く時の心休めに唱へるのとは違ふ。是が一切の行動一切の仕事の原動力となるのであります。其處に至ると、宗教の心は強い、人間が生れ、棺桶に入るまでの間に、此心が

なければ、大事を企てる事が能きぬ。であるから東洋でも、西洋でも、斯う云ふ堅き信念を抱いた人は、一つの仕事に對して、一生涯遺つて行く。一生涯で能きなければ、其子に之れを傳へ、其子が能きなければ、其孫が遺るといふやうに、精神を血から血に傳へて行つて、永久不變であります。此精神、此元氣があつてこそ、七たび死し、七たび生れて國家の爲にするに云ふやうな事が能きるのであります。それであるから吾々は相互に、道の爲めには此身を惜まないといふ様な大精神を起さなければならぬ。

吉田松陰であつたか、言は簡にして而かも我々が生涯の守りとするに足る程の詞であると思ふのがあります。それは何んであるかと云ふと、松陰の信條は只一つで『死して後已む』と云ふのであります。此簡短な一語の中に、實に確乎不拔の精神が見えて居ります。基督教でアーメンと云ひ、佛教で南無阿彌陀佛と唱ふるのは、決して形式にいふのではない。矢張此活きたる精神、堅き信念を以てするのであります。此精神は諸君が生れながらにして皆々具へて居らるゝ所のもので、新に他から借りて來たものではない。此精神、此信念の上に立つて、人生を觀ましたならば、今迄一面から見ても、味氣ない、果敢ないと思ふて居つた世の中も、大變面白い世の中となる。何故面白いかと云へば、今いふた如く、堅固なる信念があつて、世の中に立てば、自分の爲した仕事、千萬年に傳はつて、不變不朽のものとなるからであります。例へばこゝに釋迦なら釋迦と云ふものを觀念すると、其釋迦の面

目、釋迦の精神が、歴然として此處に存して居る。年代から考へると、三千年も昔の事であつて、釋迦は既に死んだと云ふのでありますが、併し其深き教、厚き感化と云ふやうなものは、實に千古不滅であります。又基督教からいへば、即ち我々の父、我々の主と云ふものは、儼然として現存して居る。宗教の教祖計りではない、楠正成でも然うであります。吾々が一度忠と云ふ觀念を生じますと、其處には直に正成公の活面目、大精神が儼として生きて存在して居るのを自覺することが能きる。即ち正成は討死はしたが、忠と云ふ字の上に、永久の生を保つて居ると云ふことが能きます。

それで要する所、世の中の悲觀、樂觀は尙ほ一つの姿に過ぎない。悲觀樂觀を立ち越えた所、其處に永久不變の大道と云ふものが存在して居るのであります。譬へば朝顔の様なものでも、朝咲いたかと思へば、夕方に萎れて了ふ、これ位生命の短い花はないのである。一日といふ上から眺めて見れば、短い生命であるが、其咲き初めは、何時頃かと言へば、六七月頃から咲いて、秋の末に至るまで咲いて居る。同じ朝顔であるが、部分的に見れば、一日々々の生命であつて、之れを總體から眺むれば、半年も咲いたり、萎れたりして居る。これは形の上であつて、其咲く精神は長い。それと同じ事で、人生も形體の上から見れば、短い生命ではあるが、本體から眺めて見れば、無始無終と言つて、大昔から末の末を貫いて、一以て之を貫いて居るのであります。理窟張つて言ふと、八釜しいが、神といひ、佛と稱して居るものは、何かと言へば、即ちそれを人格的に現はして居るのであります。吾々は

何度生れても、死んでも、生死に關係しない。安心は此點にあることを示されて居るのであります。初めいふた如く、人間と云ふものは、確乎した信念がなくては、これから將來に於ける仕事をなし得るのは難いであらう。故に若し此信念の上に立つてゐる人は、前途洋々として春の海の如く、面白い希望が、次から次に生れて来る。日々夜々、神に謝し、佛に謝し、天晴前途の望みを立て、一事終れば又一事、善き意味に於て、所謂隨を得て獨を望んで居るのである。丁度水が少し宛滴つても、漸くにして大器に満つる如く、九仞の山も一簣づゝ積んで已まざれば、遂に雲間に聳ゆる様な、大きな山を作り得る。それ故に衲が斯くの如き僅か一遍の講話にしても、若し之れを讀まるゝ人々の、肚の中に存して居る一種の信念其ものに目を注いで下すつて、一切萬事に此理を應用して行かれば、洵に苦しいことのみ多しと思はるゝ人生の荒野を辿り行くにも、精神上には、常に一脉の春風が吹き廻つて居ると思ひます。

竹の島人

屍陀林に骨打つ音や冬の月
達磨忌や床に活けたる芦一と葉

陰徳を積みめ

金錢に萬能力あるか

道といふものを説くには、大抵は會堂へ行くとか、寺へ行くとか云ふ様な有様で、それが爲に、神聖な道場もあり、會堂もあるが、悲しいかな、吾々宗教者が、其布教傳道に力を注がない。寺の如きは今日では殆んど唯一種の御祭、就中御葬禮でもするとか、又は先祖祭でもするか、それではなければ寺へ足を踏み込まぬ、踏み込まぬ事は無いが、世間に於ける各階級の紳士とか、何んとか立派な方々は餘りさう云ふ處へ立寄るのを恥しいとも思はれまいけれ共、常に足が遠ざかると云ふ様な有様であります。さうして偶には、衲如き者が、學校とか公會堂とか、俱樂部とかと云ふ處へ出て見ると、豈圖らんや、社會の各階級の立派な人々が、一場の講話でも聽いて見やうといふ様な、奇なる現象がある。それに就いて衲は何時も残念に思ふ。立派な寺があり、殿堂があつて、此處で法を演べて、人が出て來ずして、此方から出張つて行けば、常に種々な方々が見えると云ふ、斯う云ふ事は至極吾々が

怠つて居つたのであるから、何んでも可いから、假令詰らない者でも、頭を下げて道を求めて見たいと云ふ位……其處まで道義的精神、進んで宗教的一つの信仰を打ち立てたいと思ふて、さうして實に詰らぬ者でありますが、彼方此方へ鐵面皮を呈して居る譯であります。

さて陰徳といふ様な事に付て説いて見たいと思ふが、陰徳即ち隠れたる徳であります。成程今日世間に於ては、公德とか私徳とかいふ様な事も、屢々唱へられて居るけれど、其陰徳といふと陽報と云ふ様な字が、一方に竝ぶ様であります。其陰徳といふ様な事が、殆んど忘れられんとして居りはすまいか、衲が、例へば學校だけに就いても、小學以上の中學とか特殊の學校とかに行つて見て、試みに學生などに向ひ、陰徳といふ様な事を尋ねて見ても、其意味を解しない生徒ばかりである。立派な教師すら殆んど陰徳といふ様な事は、言葉から餘り知らぬ人がある。僅かな中學校位の程度の學校の教師……どうもさう云ふ事がありまして、衲は一種深い感じを惹起した譯であります。此陰徳の事に就いては、佛教なり、祖錄なり、何か難つかしい言葉を出せば、段々ある様であります。一番親しみ易い言葉は、彼の司馬溫公が家訓として貽したといふ言葉であります『不レ如ク積ニ陰徳於冥々之中ニ爲子孫長久之計』と、これは名高い一家訓でありまして、心ある人は誰も知らぬ人はない位であります。ところが今の世の中に於て、果して斯うした陰徳といふ様な事が、家庭に於いても父兄達から其子弟に教へられて居るのであらうか、進んでは、此社會に種々な徳を行ふ上に於て、殊

に陰徳といふ様なものを奨勵されて居るであらうか。實際に就いて見ると、何時でも言ふ事は、成程其公德とか、私徳とか、如何にも立派な事であるけれど、同じ様な事でありながら、陰徳といふ事は殆んど忘れられんとして居る有様である。大いに慨嘆せざるを得ませぬ。斯う云ふ事は、衲共のやうな社會事情に暗い、所謂門外漢が、種々な事を言ふと、どう云ふ語弊が、此處へ現はれて来るかも知れぬけれど、世間は唯言はゞ、書物萬能になつては居るまいか。言ひ換へると、學問萬能と云ふ事になつては居るまいか。勿論學問とは、尊重すべきものであるけれど、併し萬能と云ふ事は、果して得られるであらうか何うか、況して金錢萬能といふ様な事も、能く茶話にも互の口に出る所の言葉であるが、果して金錢に萬能力があるであらうか。種々な妙な言葉が、澤山吾々の耳に入つて居ります。拜金宗であるとか、黄金宗であるとか何んとか、そして金、利益とかいふ事を言ひます。衲が屢々出逢ふたところの人物、例へば學生などが、偶々吾々の所へ來て、何にを理想として居るかと言ふと、成功といふ事を必ず口にする。成功といふ事は、言ふ迄もなく立派な事であるけれども、段々話を進めて行つて、如何なる意味を捉へて成功として居るかといふと、大抵功名富貴と言ふ。功名富貴は勿論立派な事であるが、衲がモット煎じ詰めて見ると、唯、或る地位を得、そして財産を作りたい。それも結構な事だ。地位もなければ不可、財産もなければ不可。けれ共悲しいかな、殆んど其財産なり、金錢なり、夫れ以上に於ては、何物もなきが如く、其眼は盲ひられて了ふて居る。何にかと

言ふと、今はサイエンスと言ふ、即ち科學萬能と云ふ事は立派であるけれど、世の中は唯學問智識さへあれば可い、金錢財産さへあれば可いといふ事に至つて了つたならば、吾々人間の棲息する所の此社會も、洵に乾燥無味なる所のものに陥つて了ふであらうと思ふのである。例へば茲に公共の事とか、慈善の事とか、善事に盡す人があるにしても、最う一つ推して見ると、殆んど陰徳の意味に於て、之れを實行して居ると云ふ様な者は、洵に少いであらうと思ふ。言ひ換へると隠れて善い事をすると云ふ様な事は、何うもないやうな有様だ。善い事をするにしても、大抵右の手で物を施して、左の手で何か收めやうといふ様な考へを有つて居る。我は此の如き慈善、此の如き公德を行ふたならば、一方に何等か言はゞ報酬的のものが来るであらう。何等かそれに就いては、我に一つの快樂か、一種の幸福が得られるものであらうと云ふ事に止つて居る。それは勿論普通の意味に於て、當然の事であるが、それ以上に於て、隠れたる所に於て、善い事をするといふ様な事は、洵に稀である。さう云ふ事をする人は、尋ねて見ると、殆んど寥々たる曉天の星のやうだ。何故此陰徳と云ふ様な意味の事が行はれぬかと、段々尋ねて見ると、矢張り眞の道義的精神と云ふものが充實して居らぬ。尙吾々に言はしむるならば、眞の宗教的眞面目な考へと云ふものが、洵に乏しいとも言ひ得らるゝであらうと思ふのであります。

曰く無功德

吾々の初祖達磨大師、即ち菩提達磨大師が、初めて梁の武帝に迎へられた時に、種々な問答商量がありました。造詣深き歴史家に言はせると種々議論する人がありますけれど、然ういふ事は、今は必要でありませぬ。政治に於ても、學問に於ても、其他操行に於ても、衲の見たる所の梁の武帝は、餘程勝れたものだ。併しながら其梁の武帝が、達磨大師に如何なる事を、最初尋ねたかといふと、記憶の儘でありますから、言辭に少し違ひがあるかも知れませぬが「朕寺を建て、僧を度す、何んの功德がある」と。梁の武帝に限らず、誰でも然ういふ様な事を思ふて居るかも知れないが、寺を建てたり、僧侶を度したり、或は道路を開くとか、橋梁を架すとか、或は孤兒院を設けるとか、慈善病院を建てるとか、種々ありますが、此の如き善い事をしたならば、之れに就いて勝つたる所の報酬があらうと思ふが、お前さんは何んと思ふ。斯う云ふ意味の間ひであつた。ところで達磨大師が、如何なる答へをしたかといふに、これは吾々禪に取つては、頗る有難く感ずる事であるが「無功德」直譯的にいふと、功德無し、梁の武帝か何にかあるだらうと思つて居るのに對して、無功德、實に愛想のない答へをせられたのは、達磨大師の親切なるところであらうと思ふ。善い事をして、何んの報酬もないと

いふと、一向道理に合はないであらうけれ共、併し眞の絶大の功德は、何時も無功德、眞の功あるのは固より無功用だ。禪宗の言葉で無功用といふのは、功なき働きといふ事で、要するに、人知れず隠れて、善き事をするといふ様な人は、洵に少ないと思ふのであります。

これも亦一つの例話であつて、思ふに任せて此處へ取出しますが、これは鎌倉圓覺寺の、近世に於ける高僧と言はれる誠拙禪師、此人は原の白隠禪師と共に、併稱せられる高僧であります。現に今尚残つてゐる圓覺寺山門を、建てられた時に、廣く化縁を募つたのであります。其當時札差を家業として居た海津傳兵衛といふ者、これも其勸化に漏れずして、五百金を懐にして来て、「聊かでありますけれ共、山門建立の寄附の内へ御加へ下され」と言つた。誠拙和尚はそれを見て「ハア左様か」と簡單に言はれた。これは書物でありますから、書き方にも依りませうが「唯」と書いてある。海津傳兵衛は、五百金寄附しますと云ふに、和尚にそれが聞えぬから、軽い挨拶をするのだと思ふたから「五百金聊かでありますが御寄附を致します」と、復た言つた。すると「左様か」と、其儘受けられた外に、何んの挨拶もない。人間の心と云ふものは、それでも未だ嫌らないから、和尚聞かねたのではな

した。これは親切な言葉であらうと思ふ。斯く厳しく一言の節りもなく言はれたので、傳兵衛は、深く骨髓に徹して、初めて聊かばかりの活きた信仰といふものを、一言の下に喚起したと書いてあります。寄進は善き事は善き事に違ひない。けれども、然う云ふ隠れたところに於て、善き事をする程の精神がなければ、動もすると偽善といふ様な事が、之れに相伴ひ易いであらう。それと又慈善といふやうな美名の下に、色々様な不善を働く者もある。少くともこれだけの事をしたから、これだけの報酬はあらうといふ事を、總ての人は思ふて居る。然う云ふ報酬を望んで居る慈善である。併しながら公共の事であつたならば、殆んどそれは慈善でも何んでもない。錢を出し、品物を買ふのと同じ事だ。然うした事では、慈善の意味でも、善き事の意味でもないであらうと思ふ。であるから、或る人は子孫の爲めに教を貽す。幾ら書物を積んで見ても、書物を知らない息子が幾らも出来る。書物に趣味を有たぬ族が出来る。どれ位金錢を貽しても、金錢を湯水の如く濫費して了ふ様な道樂息子が出来る。現今富豪の人や、貴族の人が、自分の子弟教育に、大變苦心して居られる事は納は能く知つて居る。成程金錢も出来た。地位も出来た。種々な肩書もあるけれども、其出来たといふ人は、最初は身に寸鐵も帯びずと言ふか、宛るで裸一貫で、そして苦心慘澹の結果拵え上げたのである。其濫い空気の内に生れた人、其樂々とした家庭に育つた其子弟に至ると、殆んど然う云ふ觀念も、心得も何にもないのであります。然うした有様であるから、折角親の貽して呉れた書物を、殆んど反古同様にし

て了ふといふ事がある。殊に監獄とか、其筋について詳しく調べて見ると、世に所謂不良少年とかいふ子弟が出来るのは、中産階級より以下の、細民の家からは比較的少い。中産階級以上の家庭から、比較的多く出来る。併しながらこれは瓜を植えて瓜を得、茄子を植えて茄子を得る、當然の事であり、納が直言すると、其家庭へ入つて見て、果して其家庭の中に、眞に父兄達が道義的に子弟を導いて居られるか、道義的に導いても居られやうが、納共に言はせると、眞面目な、敬虔な宗教的精神を以て一家庭、一家族を率ゐて居られるかと思ふて見ると、洵にそれは少い。寧ろ地位ある人、高き階級に居る人の家庭は、殆んど無宗教と云ふ様な家庭が多い。或る場合に於ては、無宗教を以て、其人が意氣揚々として、俺は佛教などいふ古臭いものは信じない。儒教といふものは、今日唯一種の道義に止つて居るだけだ。基督教は我國體に同化せぬ。我邦の歴史と容れぬ所がある。こんなものは採るに足らぬ。我は平生唯無宗教で立つて居るといふ様な事を、告白して居る人が、往々にして見受けられます。斯う云ふ秋風落葉たる如き精神界に於て、秋風落葉たる如き人々が、一家族を率ゐて行くが故に、後から跟いて行く子弟達の眼中にあるものは、此の如き地位、此の如き財産、唯一概に言はば富貴功名、唯此目的だけ達し得たならば、それで吾が願ひ足れりなんていふやうな有様だから、結局悪い方へ赴かざるを得ない。陰徳と云ふ事は、唯一つの遣り方でありまして、『陰陽録』と云ふ家庭教訓の様な書物に就いて見ると、凡そ善き事をするのに、陰徳と、積徳と二つありと書いてある。

そして陰徳と言ふのは今説き來つた通りで、又積徳といふのは、人の知ると知らざるとに拘らず、苟くも善い事ならば、殆んど我が頭火が附いた如く、急に且つ切に、恰も餓ゑたる人が、食物を得たるが如く、暫くも捨て置かすして進んで之れを行ふ。さう云ふ意味に、此陰徳と積徳との二つを以て其子弟を引上げねばならぬといふ事が書いてあります。

月徳和尚の陰徳

然う云ふ事を納は縁の下に力持と言ふ。殆んどどんな眼に一丁字ない人でも、これ位な事は口にしてお居るけれ共、併しながら、縁の下に力持といふ事を、考へ去り、考へ來つて味はつて見ると、實に深き味ひがあらうと思ふ。成程吾々の眼に映じて居る立派な宏壯な建築の家に、柱も映じて居る敷居に、僚は斯う云ふ仕事をして居るとも、何んとも言はずして、唯隠れて眞の力を具へて居る物は、言ふ迄も無い礎であらうと思ふ。若し此礎がなかつたならば、殆んど沙漠の上に、殿堂を建てると同じことで、忽ちにして顛覆の患を免かれない。こんな事は洵に見易い道理で、如何にも子供欺しの様なことを説いて居る様であるけれども、併し之を吾々人間の上に應用して、考へて見たならば、どんなものでありませうか。凡そ一家庭に於ては、隠れて力を添へて居る即ち縁の下に力持をして居る人がある

ならば、其家庭は幸ひである。然う云ふ人が、一人よりも二人出来れば、尙更幸ひでありませう。一
 家族の人々、悉く我は縁の下の力持すると云ふ考へが、其家庭に満ちて居つたならば、尙更幸ひであ
 りませう。獨り家庭ばかりではない。社會に於ても、然う云ふ陰に於て、力を添へて、そして添へた
 顔をせぬ人が、一人より二人と、段段數が殖えて行くならば、其社會は健全に進むべき社會でありま
 せう。一時的室咲の花の如き進歩でなくして、洵に石橋を叩いて、渡るといふ様な極く堅實な進歩を
 來す可き社會であらうと思ふ。國家の上にも、一人／＼縁の下の力持をして居る人があるならば
 其國家は洵に健全である。これが向上發展をする國家であらう。全般の人が、皆其心になつたならば
 其國家の力と云ふものほ、愈々益々強大なものであらうと思ふ。斯ういふ風に考へて見ますと、國
 家に於ては、國家の主權者が、常に此縁の下の力持をして居る事であらうと思ふ。一家庭に於ては、
 一家庭の主人たる者が、常に縁の下の力持をし、人の子弟たり父兄たる人は、何等かの上に於て、矢
 張り縁の下の力持をして居る事であらう。多くの力を盡して、そして少しも力を添へた顔をしない人
 であらうと思ふ。ところが又他の一面から見ますと、政治社會の道徳は、どれ位までに今日進歩し
 たか、成程政治上種々の政策とか、政略とか、或は駆引とかいふものは、進んでも居らうけれども、
 それと同時に政治道徳はどんなものか、又商業は、其昔に比ぶれば、殆んど隔世の如く進んで居るで
 あらうが、其商業と言はず、農業と言はず、總ての實業が進んで居るであらうが、其實業道徳と云ふ

ものは、どれ位まで進んで居るであらうか、段段と調べ上げて見ると、總てが道徳的でなくてはなら
 ず、總てが宗敎的行爲でなければならぬのに、其實業界にどんな惡現象が現はれて居るか、或は學
 問界の一機關たる學校——その學校の教師と生徒、それらの關係に於て、どんな事が其處に行はれて
 居るであらうか。段々と點檢し來れば、殆んど喜ぶべき事は、不幸にして吾々の眼に映らずして、喜
 ぶべからざる事が、次から次へと、吾々の眼に映じて來るといふ様な有様、詮じ來れば、陰徳或は縁
 の下の力持を、盡すといふ様な事の、精神を有つて居る人が、少ない結果ではなからうかと思ふ。

斯う言ふと、唯現實の上で言ふて居る様であります、最う一つ、吾々の心的の立場、宗敎の根本
 義から言ふならば、縁の下の力持といふ事は、それが取も直さず、佛菩薩の働きて云ふものであらう
 と思ふ。彼の伊勢の月僊和尚——月僊は畫師として、世に聞えて居つたので、人は其畫を大變珍重し
 たけれど、一面には、大變人から誹謗せられた。何故だといふと大變慾張つた和尚で、洵に賤むべき
 品性、強慾な和尚であるとして知られて居つた。月僊傳を讀んで見ると、月僊は錢さへ持つて行けば
 誰が頼んでも、又どんな繪を描いて呉れと頼んでも、喜んで描いてくれた。伊勢の古市の或る賤業婦
 が頼みに來た。『錢は貴僧の言はるゝ通り、望み次第幾らでも出すから、妾の好む畫を描いて貰ひたい
 成る可く立派に描いて貰ひたい』と言つた。『そりや有難い。錢さへ呉れるならば、どんな繪でも描
 く』と、骨折つて描き上げて、其賤業婦の所へ持つて行つたら、幾らか心ある婦人であつたと見えて

折角丹精を籠めて、描いて持つて往つた其書を「妾は腰巻にします。お前さんの描いた繪は、腰巻が相当だ。錢さへ上げれば、それで貴僧は可いでせう」と言ふと「勿論然うだ。錢さへ貰へば、腰巻にしゃうが、湯巻にしやうが、それは問ふところでない。」「そんなら、はずんで禮金を上げやう」と言つて、無禮にも、足の甲へ、錢を載せて出したが、月僊和尚は更に怒りの色を現はさず、「有難ふ。向後又錢さへ出すなら、何んでも描きます」と後の事まで頼んで歸つたと云ふ話があります。ところがそれが、段々後に至つて分つた事であるが、其當時道路を開き、又は修繕するとか、或は橋梁を修繕するとか、其他貧民を救恤するとか、病者を救ふとか、所謂慈善の事とか、又多くの人の爲になる公共の事とかには、何時でも、自分の名を現はさず、無名で陰で始終金を施し、金を出して居つた。亡くなる少し前に至つて、それでも尙、金が餘つたから役場へ持つて行つて、これだけ餘つたから、何か必要の場合に、用ゐて貰ひたい。併し決して納の名前を出してくるな、本意に背くからと言ふて、其金を託して置いた。和尚一代に於ては斯う云ふ事が、少しも現はれずにあつたが、和尚がたび亡くなつた後に、段々と此の事が自然に分つたものだから、今まで譏謗して居つた人は月僊和尚の高尙なる慈善、其同情ある心持に對して、皆恥入るばかりに感じたといふ事があります。これは事實談であります。矢張り縁の下の力持といふ事で、又一方から言ふと、これは即ち隠れたる徳と云ふものであらうと思ふ。

迷ひに代ゆるに悟り

禪など修行した結果は、何う云ふところに現はれるかと云ふと、禪と云ふものは、何等か一種神秘的なものがあるが如く思ふ。何か神秘的の事があらう。何か不可思議の事があらう。或は又禪を得るといふと、記憶がよくなるとか、或は膽が座り、何事にも動ぜないとか、そんな禪から出た端々の効果ばかり數へて居る。其結果は、極く間違つた輩になると、禪者といふ者は、何時も言葉窮すると、一喝をやるとか、何んとか、こんな事を説いて聞かすものと誤解して居る。又一喝を吐いて、それで飛ばして了ふ。或は犬叩き見た様な棒を揮ふ。痛棒だとか、或は獅子吼であるとか、さう云ふ事で、禪の高尙な嚴重なものは、益々惡辣なる禪機が無ければならない。斯う云ふ様な風で禪といふものゝ大々の誤解を來して居る。何事でも生兵法は大怪我である。殊に禪の如きは、幽遠と言ふても可い。高妙と言ふても可い。高妙幽遠であるそれだけ、矢張り誤解が多い。其實例は何にかと言ふと、吾々は固よりありもしない迷ひを有つて居る。其迷ひの爲めに、己むを得ず、之に代へるに悟を以てする既に迷ひを知れば、悟を知らねばならぬ。病がなくなつたら、薬も同時に除いて了はなければならぬのに、病が癒えたに拘はらず更に薬を盛るが如く、迷ひの心が去られたに拘はらず、一種の悟といふ

ものを、何處までも振り翳して居る事になつたならば、殆んど禪の本意を去るのは、大變遠い事でありませう。これは佛祖の本懐でなく、其志と遠ざかつて了ふが故に、縁の下の力持をして然うして自彊不足といふ精神を以て、何時までも。縁の下の力持をして働かうといふ事ができない。それを吾々の宗門の言葉でいふと、上は菩提を求め、下は衆生を化益する。『上求菩提、下化衆生』といふことに外ならぬのであります。縁の下の力持といふものは、種々に應用して見ると、斯う云ふ心持にならうと思ふ。彼の白隠和尚は、種々な奇行もあり、種々な嘉言善行もありますが、彼の和尚が、子を孕ましたと云ふ美談があります。和尚の棲む原の松蔭寺門前の、豆腐屋の美しい娘が、何時の間にか、腹が大きくなつた。ところが娘の親なる人は、頗る白隠禪師歸依者でありました。日常白隠禪師を視ること、活佛の如くに思ふて居つたのに、豈圖らん、娘を段々糺問すると、娘は辨疏に窮して、斯う言つたら親の憤りが解けもしやうと思ひ、實はいひ悪いが、白隠禪師の胤を宿したのだと言つたので、娘の親は今まで深く尊んでゐただけ、其反對に今度は蔑む事も甚しく、愈々子が生れると其赤子を懐にして、松蔭寺へ行き、白隠和尚へ差しつけて、『何たるお前は賣僧であるか、事もあらうに、清らかな吾が娘に妊娠させたといふは、實に憎む可き坊主だ』と怒鳴りまくつた。すると白隠和尚は『ア、左様か』と言はれただけでありました。向ふが怒つて來た其儘に受けて、『然うか、では今日から柙が育て、やらう』と言ふて、それから赤子を自分の懐に入れ、始終母乳をし、又は托鉢など

に出られる時にも、自分の懐に赤子を抱いて歩行かれた。彼れ是して居る内に、誰れ言ふとなく、娘の相手は何處の何某だといふ噂が立つて來た。それは自然と然うなつたのみならず、其當人が名乗り出て來た。これは白隠和尚の慈愛深き心に、陰ながら感化せられたのであります。其當人は白隠和尚の縁の下の力持、或は其雅量といふか、度量といふか、其心に自然に引付けられて、ア、云ふ高僧をして、今日の此悪名を取らしめ、己れは逃げて了つたものゝ、如何にも其罪を思ふて、當人耐へられなくなり、遂に名乗り出た。親爺は更に白隠禪師の所へ行つて、實に何んとも彼とも、御詫の致方が無い。此處で生命を取られましても敢て御恨み申しませぬ』と詫びると『左様か、分つたかい』と言はれたのであつた。本當の宗教心と、我と同化した人は、斯う云ふ事が、總ての言行の上に現はれる事であらう。日本禪宗の初祖と言ふて宜しい。榮西禪師の所へ、或る困窮した人がやつて來て『私は家内もあり子もある。然うして毎日眞面目に働いて居りますけれども、する事、爲す事、違算が多く種々な不幸に出遭ひまして、モウ食べる物もありませんが、何うか慈愛深き貴僧の事であるから、御救ひに預りたい。』と言つた。すると『氣の毒ぢやが、何にも遣る物がない』と其處らを顧みられると、此頃修繕の出來た大きい佛さんがあつた。そのピカ／＼金箔の光つて居るのに、眼を着けられて、『ア、好い物がある。之れを持つて行け、之を賣つたら當分の内、暮らして往けるだらう』と言はれた。弟子坊主は驚いて、『そんな事をなすつては、佛罰が當りませう』と言ふと、和尚は『何の佛

罰が當らうぞ、若し活きた佛が、此處に居つて、此人に接したとしたならばどんなものぢや。それを考へて見る、サツサと持つて行け』と言はれた。斯う云ふ事が、美談として傳へられて居ります。

丹霞木佛を焼く

『丹霞焼木佛』といふことがありますが、或る寒い日に、丹霞和尚が、古寺の佛壇の佛を取りに来て、火をつけて燃し、そして股を擴げ、寒い〜と言ふて、暖まつて居つたといふ話。これを皮相の上、即ち形の上から見ると、人に依つては、大變な誤解を來すであらうけれ共、此丹霞の精神、所謂縁の下の力持ちになつた丹霞の吐から見れば、どんなものでありませう。其處へ寺の住持が出て来て、大變怒つて『貴僧にも似合はず、燃す物が無いからとて、品もあらうに佛を燃すといふは、實に呆れ返へる』と言ふと、『俺は是から舍利を取らうと思ふ。』木佛から舍利が出ませうか、馬鹿な事を言はつしやい。』左様か舍利は出ぬのか』と言はれた。これは其精神を探つたらば宜しいのであります。禪僧には、斯うした非常識な、軌道を逸して、近頃の言葉で脱線といふやうな事が多いが、其實洵に敬虔な眞面目な、そして洵に清らかな所がある。唯神さんや、佛さんに連れて行つて貰はうといふ迷信や妄執があり、それで一方には、斯う云ふ善い事をしたから、善い報ひがあらう。人を助

けたから、報いが来るであらうと、然う云ふ心的状態は決して憎む可からざるものであります。勿論禪には限りませぬ、物質位詰らぬものは無い、醜い處の彼の嫫母が、西施の顰に倣つたやうなものだ。美しい西施といふ婦人が、胸でも痛いかして、眉を顰めると、更に美しく見えたと聞いて、自分も眞似をして、眉を顰めたところが、却つて醜くなつたといふことで、精神界の事とか、禪的の境涯とかいふものは、決して摸して到る可らざるものであります。願くば今日此の如く縁の下の力持ちをする人が、一人でも殖えて行つたならば、大變頼母しい事であらうと思ふのであります。

思ふに世間の英雄豪傑とかいふ人の傳を讀んでも左様であります。矢張り家康がアレだけの事業を立てられたのは、家康の精神の中に、縁の下の力持ちを以て居るからであらう。家訓を讀んで見ても、其心の意味が歴々と現はれて居る。或は世界に驚天動地の働きをした第一世那翁に就いても、其戦術そして下々の其状態、種々な事で考へて見ると、矢張り人に仕事をさせて、言はゞ多くの人に働かせて其伎倆を發揮せしめ、所謂適材を適所に働かして自分は陰に居つて、其力を添へやうといふ様な事は、獨り那翁だとか、華盛頓だとか、然う云ふ少數の人ばかりではない。人の長たる人は皆斯うであります。漢の高祖の如きは、殆んど一大隊の隊長にもなれず、一中隊の隊長にもなれぬ位に戦ひが拙であつたといふ事でありませぬ。戦ひは韓信の如く、多々益々辨ずる事は逆も漢の高祖には能きない智慧ならば、彼の張良には及ばない。又經濟上の事、軍事上に於ける輸送の事、輜重の事は蕭何に

は及ばない。けれ共彼の漢の高祖は何んであるかといふと、言はゞ縁の下の力持ちをすべき大なる人物である。であるから其属した人が「陛下は正に將たるの人」と言ふたが、實に當つた言葉であらうと思ふ。何うしても是から社會を健全にせやう、小さくとも、自分の一家庭を堅固なるものにして行かうといふには、縁の下の力持ちと云ふ精神を、先づ一つ養ふて行かねばならぬと思ふ、其精神を養ふには何んであるかと言うたらば道徳——衲に言はしたならば、道徳から最ウ一つ欲しいのが宗教であります。何んとなれば、道徳は人間と人間との間に行はれるものであります。人間以上、人間以下のものは、今稱へて居る道徳とは言はない。時間で言つても、決して過去には到らぬ。未來にも及ばない。人間同士であるから、人間以上佛までも些と遠い、降つて人間以下は、動物植物までも其博愛といふものは行はれにくいのです。間接には行はれるかも知れませぬけれども、其處に到ると、宗教の本性は何にかといふと、佛と、凡夫と、何時でも一致せしむる。娑婆と極樂と親しく一つと視るのであります。煩惱の中で菩提を證せやう、黒土の上に、黄金界を一つ建設せやうといふことに外ならぬ。其事丈は、何うしても此宗教的精神の個々の現はれ、宗教的精神を個々に活躍したのでなければ、何うしても認め得る事はできないであらう。此處は所謂直覺的であります。種々な理論を盡し種々な道理を重ね、何程道を言はうとしても、それは或る範圍、或る程度までは考へられもしやう。言ひ得られもしやうけれども、それは一つくで、所謂百尺竿頭一步を進むるものとなる、此宇宙と

我れと同化する。其大なる天地と我と一致して、此處まで到らんとしても、何うしても確かりした秀でたるものを見出す事ができないであらうと、納共は私かに想像して居るのであります。

寒山詩より

我見二出家人一、 不レ入二出家學一、 欲レ知二眞出家一、
 心淨無二繩索一、 澄々絶二玄妙一、 如々無二倚託一、
 三界任二縱橫一、 四生不レ可レ泊、 無爲無事人、
 逍遙寔快樂。

靈と靈との接觸

意力の修養が足らぬ

宗教といふものは種々あつて、其範圍は却々廣い。就中佛教は、理論も複雑で、そして高尚であります。其佛の言葉に『世尊拈華迦葉微笑』といふて、或る時佛が八萬の大衆の前で、金波羅華を拈せられたところ、其意味が更に解らなかつた。ところが座中の上首で、迦葉尊者といふのが、破顔微笑でニツタリと笑はれた。すると世尊が、

『我に正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門あり、摩訶迦葉に附囑す。』

と言はれて、正傳せられました。所謂教外別傳、不立文字、直指人心、見性成佛の始まりは、此處にあるのであります。唯に佛法の以心傳心の妙が、此處にあるのみならず、一切宗教の奥の院は此處にあるのであります。宗教のみでなく、眞の精神教育は、總て恚うなくてはなりません。即ち靈と靈との接觸であります。八萬人の大衆は、佛の眞意が解りませぬ。即ち靈と靈との接觸が能きなかつたの

であります。現今は二十世紀の世界であります。従つて學問も各方面に發達して居るが、其方針が、動ともすると物質的に偏するやうであります。又機械的に爲るやうであります。有體にいへば、功利一偏に傾いて居るやうであります。幽玄なる心的事業は、第二に置かるゝやうに爲つては困ります。吾々の事業は、即ち靈と靈との接觸を貴びます。之れを押し擴げて言へば、凡そ宗教といふものは、人と人とは相互間の道徳を以て、立つて居るのであります。人間同士の道徳を超越して、直ぐに佛に接し、神に接するといふのが然うであります。さて人間は、厄介なもので、慾といふものがあります。其慾を制するのが、己れに克つといふのであります。其慾に克つて往くのが宗教心の向上であります。此點は何れの宗教でも同一であります。眞の大豪傑、それよりもズツと進んでゐるところの佛とか、神とかいふ境涯に至りますと、誘惑に克つのは言ふまでもありません。誘惑といふ文字は、無論不要であります。併し普通の人は、此誘惑に兎角負けるのであります。日本の現今の社會上に現はれてゐる現象は何うであるか、何ういふことが現はれてゐるかと言へば、それは種々の方面に、驚くべき事實が澤山あります。即ち不徳義とか、不道徳とかいふやうなことが澤山あります。ところで吾々宗教家又は教育家に於て、此弊害を如何に救ふたら可いであらうか、此弊害といふのは誘惑であります。詳しくいへば、吾々が此誘惑の力に打ち克つところの意力が弱いからであります。學問の力で、此誘惑を拂ひ退けることも能きやうが、普通の人は、朝に晩に、目から、口から、鼻から、耳から誘

惑が入るのであります。誘惑が常に一種の刺撃を與へるのであります。其場合に於て、注意の力を以て、此誘惑を拂ひ退けることが能きます。併し其方法が薄弱であつたならば、直ちに外界から、あらゆる誘惑が、心の中に侵入するのであります。殊に生若い人達に、此誘惑の魔が侵入せぬやうに、自動的の注意力を惹起させるのは容易でありませぬ。青年の意力といふのは、至つて弱いものであります。して、眼前に綺麗なものが見れば、其綺麗なものを探りたいといふ氣に爲ります。然うした氣に爲るばかりでなく、それを採るのであります。ところが確固不動の精神を有するならば、唯綺麗なものだと、目に映するばかりで、それを採らうとは思ひませぬ。青年は然ういふ譯には往かない。だから意力を養ふ爲めには、心的反射作用を制止するに、學問の力と、宗教の力とを用ゐねばなりません。言ひ換へれば、意志を鍛錬せねばなりません。現今の學問は、兎角智育の方にのみ馳せてゐて、伶俐な人、技術の人が澤山出て、物質的文明は、頗る進みつゝあるに違ひないが、何うして未だく足らぬところがあります。即ち形而上(宗教道德)の方面の教育、言ひ換へれば德育方面が進んで居らぬやうであります。學術技藝は確に進んでゐるが、其割合に道德、宗教は進んでゐませぬ。其處で青年達に、品性の養ひをさせる良き工夫はあるまいかと思ふて、衲が諸所の學校へ往つて見るが、何うも生徒が詰め込み主義で、そして教師が腰掛け主義で、教へるのが、弊害を醸す原因のやうに見えてなりません。上から餘り押しつけ過ぎはせぬかと思ふ。何うも精神的教養が低いやうであります。成程

日本人は戦争は剛い、これは昔からの忠君愛國の情力が、未だ衰へないので、實に日本の有難いところと思ふてゐる。けれども意力の修養といふものが足らぬやうであります。意力といふても、戯談を言つては、威嚴に拘はるといふやうでも困る。總て中庸を得て、成るべく青年の心に、苦痛を與へぬやうにして往かなければならぬ。即ち根本的に心情を吐露し、心の中から青年に同情を表して、導いて往きたい。遺憾に思ふは、心の修養といふ方の教育が足らないことで、高尚なる意志を發達せしむるに、餘り勉めないで、教育が一方に偏して居ると思ふ。即ち靈と靈と交ゆるといふ方の、教育が足らぬやうであります。

悪魔を拂ひ退ける力

例へば、親に對する道を説くにしても、親に對する義務など、法律上のやうな理屈詰めの教育は面白くない。人間には、喜怒哀樂の自然の情といふものがあります。それと同じく、自然に青年の頭に注ぎ込むやうにせんければならぬ。子の親に對するのは、自然の情であります。決して義務とか、責任とかいふやうな言語で、言ふべきものではないと思ふ。宗教の意力と力は、密接の關係があるのであります。悪魔が來ても、宗教の力で、拂ひ退けることが能きます。即ちこれが意力であります。惡

魔が来て、慾心を誘ふのは、即ち誘惑であります。其誘惑に打ち克つのが意力で、宗教の力でありま
す。宗教といふのは、何んな宗教でも同じことで、基督教でも、其主意は同じであります。昔釋迦が、
定を修めて居らるゝ時に、其周圍に惡魔が来て、釋迦の定力を妨害しやうとしました。其時釋迦は、
惡魔が何んと言ふても、耳を藉さず、黙して居られた。すると惡魔は、種々の惡聲を放つ、けれども
釋迦は、決して口を利かぬから、遂に惡魔も黙して了つた。其時釋迦が言はるゝには、
『お前は、最う何にも言はぬのか、それで惡聲を放つのは終りであるか。例へば外方から貴き贈り
物が來ると假定して、其贈られた相手が、それを受けずに戻した場合には、其贈り物は、何處へ還
るのだ。』

と、すると惡魔が言ふには、

『それは贈つたものへ還るのだ。』

其時釋迦が再び言はるゝには、

『お前が言ふ通りで、今お前が、私に向ひ、惡聲を放つたが、其惡聲を私が受取らなければ、誰に
還るかといへば、放つたお前に還るのである。』

と、爰に於てか、惡魔は遂に閉口したといふ話であります。即ちこれは外界の誘惑に惑はされぬ證據
であります。基督が道を修めた時にも、同じやうなことがありました。即ち東西趣きを一にしてゐる

のであります。宗教の力で、誘惑に打ち克つたのであります。世の中の弊害といふものは、人が世の
中の誘惑に打ち克つことが能きず、意力を充分に振ふことが能きない點にあります。奮闘的生活をす
るに、充分獨立獨行の精神を養ふて往かうとするには、是非とも意力といふものを、盛んに發達させ
ねばならぬのであります。大なる意志の力を養成する方法は、何んであるかと言へば、それが問題で
あります。これは暫く退いて、自分の智識に照して、考へて見ねばならぬのであります。又心的現象
が、種々ありませうが、能く昔の言葉に、神が現はれるとか、至誠神に通ずとか言ふて、自分の心に、
それを受け取つて居る。受け取れるやうに爲れば、それこそ大したものであります。基督の傳の中に、
ヨハネの洗禮を受けたことが書いてあるが、兎に角四十日の斷食修行をする間に、折々惡魔が來ても
誘惑されなかつたと、これは釋迦の定修の場合と同じで、天地の道理を、心に會得して居たからであ
ります。此道理は、幾百千年の後の世までも、不變不易の眞に神の心であります。其神の心を、吾が
心に受け取つて居つたから、惡魔に迷はされなかつたのであります。基督の力を試むべく、惡魔が來
て、種々と誘惑したけれども、何等の手應へがなかつた。即ち意志の力の強いのに外ならぬのであり
ます。意力があれば、斯様に惡魔に打ち克つことが能きるのであります。斯くの如き意力があればこ
そ、廣大なる教を開かれたのであります。吾々も又意志の力を鍛錬しなければならぬ。以上釋迦と基
督の話は、意力養成の好適例であります。

有難い情想

日本の名物

天然の氣候、風俗の純朴、人情の敦厚、山水の明媚、或は學術、或は宗教上に於ける特種の發展、其他法律上、政治上に於て、吾邦の矜りとすべきものは多々あるであらう。けれども他から見ても、これこそ日本特有のものである。これこそ實に日本の名物であると稱せらるゝものは、何んであらうかといへば、それは衲が、今更言ふまでもなく『武士道』であります。武士道は、日本固有の道徳を發揮せるものであります。外國の學者、政治家、宗教家の如きも、武士道は日本固有の特性として許してゐます。單に之れを許してゐるばかりでなく、これに關する著書が、頻々と現はれ、外國語に譯せらるゝのでも、如何に外國人が、日本の武士道を尊崇し、珍重するかと知られます。愆く吾邦の武士道が、發揮されることは、日本人の大きい矜りとすべきであります。けれども他の方面を観察すると、何うであります。武士道といふ一種の高尙なる道義的觀念のある如く、他に商業道とか、農業道と

か、工業道とか名付くるものがあるか、此語は多少語弊があるかも知れぬが、武士道に對して、これ等が并行してゐるかといふに、衲は之れに對して然りと答ふるに躊躇せざるを得ない。現今日本が商業、農業、工業ともに、大々的發展を來たしてゐるにも拘はらず、商業家の道徳、農業家の道徳、工業家の道徳は、之れを武士道と對照して、更に遜色なしといふ譯には往かぬであります。古來吾邦では、百姓といひ、商人といひ、一層之れを輕侮した言葉に爲ると、士百姓といひ、素町人といつた。愆くの如き言葉は、農工商の道が、發達しなかつた證據であります。自分は素町人であるから、人を欺いても構はない。自分は職人であるから、不品行でも構はない。自分は士百姓だから、無作法でも構はないと、自ら侮り以て人からも輕侮せらるゝのは、困るではないか。彼等は愆くの如く恬として耻ぢざる行動を爲したのが、現今に至るも、其餘弊尙ほ去らざるのであります。今日學校に在るもの理想とする所は、何んであるかといへば、將來官吏か、會社員と爲つて、幾許かの月給を取らんとするものが、其多くを占めてゐる。米國は之れと違ひ、オフィサ即ち官吏なるものは、傭人といふ意味で、御役人様とか、官吏様など、崇めるものではなく、其尊ぶところはマーチャントであり、トラスマンであります。即ち獨立自營の人、勤勉の人、熱誠なるインテントマンを尊崇するのであります。吾が日本では、現今も尙ほ官尊民卑の弊があるやうであります。けれども現代の日本人は、最早月給取ばかりを尊ぶ時代ではなく、獨立の實業家が、大いに勢力を占むる覺悟がなからねばなりません。

ぬ。けれども事實の之れに反することの多いのは、遺憾千萬であります。納が永らく棲んでゐる鎌倉は、横濱に近いし、それに古き歴史の地であるから、外國人が續々遊びに来る。ところが商人は、外人に對し、商品の價格を、内國人に對するよりも高くして賣る。尙ほ諸所の輸出商人が、商品を海外へ輸出するに方り、初めの見本よりも、一回二回と輸出の度を重ねるに従ひ、漸次に粗悪なるものを送るが如きは、商業道德の缺けてゐる證據ではあるまいか。例へば一足の足袋にしても、價格が低廉でも、直ぐに破れるやうな品では、客に對して親切とはいへない。現今は價格の低廉なるものばかり貴ばず、何品に依らず、堅牢で永久的であるが、無論良いことに爲つてゐる。ところが商人が自ら欺き、又人を欺いて、一時を糊塗せんとするは、これ實業家自らを侮るものではないか。古來武人の間には、爛熳たる櫻花の如く、又玲瓏なる芙蓉峰の如く、武士道が發達してゐるにも拘らず、農、工、商の間には、何故に罪惡が瀰滿して居るか。憶ふに之れは、宗教心の發達せざるに起因するのであらう。

宗教の特色

人の萬物に長たる所以のものは、崇高なる信念があるからであります。其佛教を信ずると、基督教

とを奉ずるとは、措いて問はず、崇高なる所の信念あつてこそ、初めて他の動物に長たる所以を發揮するのであります。ところが佛教信者の家に生れた者が、外國へ往つて、宗教を檢べられて、基督教者だと言へば、何かの利益があらうかと考へ、漫りに基督教信者だと答へたものがあるとのことだが、彼のラッド博士の如き、又はハリソン博士の如き人から、

『日本には、祖先教があり、佛教があり、尙ほ孔子教があり、神道があるのに、如何なる事情に依りて、基督教を信することに爲つたか。』

と問はれ、これに答へが能きず、窮したものがあつたと聞いてゐる。要するに日本人の宗教に對する感念は、洵に薄弱であり、冷淡であります。宗教を信する心がなく、只利益の爲めであつて、眞に熱誠なるものは尠い。日本傳道よりも、朝鮮、支那若しくは印度地方の傳道は、遙に上位にありとは、基督教宣教師の言ふところでありませぬ。實に吾が日本の爲めに慨歎すべきことではありませぬか。宗教の特色とする所は、現在一世でなく、現在及び將來に涉りて、誠實の心を以て働くにあるのです。一時の利益に晦まされずして、永久不變の靈光を仰ぐにあります。或は神に對して、敬虔の念を拂ふが如きも、又は佛の無限大悲の慈光に接して、自己の貪慾、瞋恚、愚痴の煩惱を洗ひ落し、天眞の流露し來るものも、宗教の特色とする所でありませぬ。ところが無宗教者には、慙うした麗はしい精神がありませぬ。一時の利益さえ得れば、後は何うでも構はぬといふやうであります。宗教の普及した土地と、

せざる土地とが、其犯罪人の數が違ふといふことが、現實に證據立で居ります。これは消極的の結果であるが、若し積極的に言ふならば、無宗教者には、卑劣な手段を取つて、一時を糊塗し、人を欺くといふやうな者が多いが、之れに反して、宗教信者には、そんな卑劣な者は居らぬ。これを君國に對する感想上から言へば、上天皇陛下に對し、奉る忠誠は、言ふまでもなく、高く神に對し、佛に對しても、正義の爲めには、自己を犠牲にするも、誓つて戦はざる可からずといふ決心を有するのであります。見よ破竹の勢ひを以て、天下を席卷したるところの織田信長でさえ、石山寺に立て籠つて一向宗徒の爲めには、力屈したてはありませぬか。これ生命を佛陀の前に捧げたる一大決心を有した一向宗徒の力に據るのであります。だから家康は、其抗す可からざるを見て、淨土宗や、天臺宗徒と結び、自己勢力中のもとしやうとしました。實に宗教の偉大なる力のあることが解るであります。宗教の情想は、感謝の念にありまして、有難いといふのにあります。神の徳、佛陀の慈光に對して、有難いといふ情想あつて、此處に初めて猛然たる勇氣が起るのであります。此處を以て、農家は農に、商家は商に、工業家は工にこそしめしめ、努めたならば、積極的の効果をすべきは必然であります。けれども此宗教上の信仰も、悪用せられて、現在ばかりでなく、未來までもと青年男女が、痴情の果は、一蓮托生など、來ては、洵に困つたものであります。凡そ宗教は、有難い、忝いと仰いで、信ずることを得るものは、幸ひでありますけれども、人々機類萬差なるが故に、一面には解信からも入

らなければなりません。經文に愆く仰せらるゝから、信ずるとか、バイブルの教ゆるところは、愆くの如き故に、信ずるとか言ふのは仰信であります。此仰信は可ならざるではないが、迷信に陥ると、其實惡龍毒蛇に勝るものあるであります。彼の惡祈禱に據りて、病氣が全癒するとのみ信じ、醫藥を用ぬやうな者は、此害に罹つたのであります。斯る迷信は、大いに排斥せねばなりません。

不離不二の妙味

それで佛教には、此解信と、仰信の二門が開いてあります。仰信門には、念佛宗があつて、所謂淨土信宗と稱するのがこれであります。又解信門とは、所謂聖道門と稱するのがこれであります。ところが此二門は、其主とする所異り、聖道門は、目あつて足なきが如く、淨土門は、足ありて目なきが如くであります。具足しなければ用を辨じ難いのです。淨土門の本領は慈悲で、聖道門の本領は智慧であります。佛教は、此智慧と、慈悲とを具足し、慈悲の裏面の教義を根底とし、智慧の裏面には、慈悲を收めて、不離不二の妙趣がある。ところが佛教以外の宗教では、神の慈悲をいふも、智慧のことは語らないで、智慧を研くことを、宗教以外のこととして居ります。だから科學と宗教の衝突は、必然の結果として、避くべからざることゝ爲つて居ります。ところが佛教では、智慧と、慈悲を二つ

ながら修め、智目行足として、并行して進ませるやうに爲つてゐます。これは釋迦が、初めて拵えたものではなく、宇宙の眞理は、一面には智慧と爲り、一面には慈悲と爲つて發露する如く、圓滿なものであります。或は之れを心理學者は、智、情、意の三に区分し、或は儒教では、智、仁、勇といひ、佛教では、戒、定、慧の三學と言つてゐます。凡そ佛教では、佛陀と吾人と、其根底が同一だと見てゐるが、外の教では、神と人とは、全く別なものとしてゐるから、智慧を研いて、宗教の眞味を解するが如きは、到底能きないことと思ふてゐる。けれども佛教には。

『奇なる哉一切衆生、如來の智慧徳相を具足せり。』

と言つてあります。一切諸法の根底は平等である。然るに若し神と人を以て、長く異なるものとしたならば、論理上の矛盾を來すは言ふまでもなく、神人合一の理想の如きは、架空のものと爲つて了ふではあるまいか。恠くの如き議論は、比較的宗教上のことであるから、これ以上説かぬが、國家は、殖産興業が隆盛でなければ發達しませぬ。機械力を應用して、生産力を増加することも、學理を應用することも、無論必要ではあるが、更に必要なものは、宗教上より武士道の如き立派な道義が、商、工、農業の上によつて、完全なる日本の道徳を發達せしめなければならぬ。從來一部の人は、佛教を悲觀的のものゝやうに取扱ひ、未來の爲め死後の用意の爲めに入要なものゝやうに思ふてゐる。恠くて佛教は、厭世的なりと言はるゝに至つてゐるが、佛教は決して斯る一方面的のみのものではありませぬ。

之れも一部の眞理を道破せるものであるけれども、厭世に對する樂世的方面がある。大乘佛教は、主としてこれであつて、宗教の信念が基礎と爲つて、社會上に於ける活動の原動力と爲るならば、之れ所謂『煩惱即菩提』なるものであるし、『娑婆即寂光土』なるものであります。大乘佛教の本意は、之れに外ならざるものであります。

竹の島人

傳道や夜寒の辻の人稀に
僧泊めて茶粥まゐらす時雨かな

佛教特殊の教訓

大慈大悲の心が報恩謝徳

東洋道德の根源と西洋道德の根源とは、大體違つて居ります。一體何んでもかでも西洋のことを探らなければならぬといふことはない。善きは何事に限らず探つて以て用ゐるのは、内外を問ふに違あらずといふのが、現今日本の國是であるが、道德の根源に至りては慎重の態度を執らなければならぬ。何にも西洋、かも西洋と輕々しく採り、これも便利、あれも便利と只便利主義で、西洋のことを採るのは、言はゞ西洋かぶれであります。道德や宗教は、人の精神を支配する重大事であるから、便利上採用したり、便利上捨てたりすることは能きぬ。吾が東洋道德の標準は、儒教、神道、佛道の感化を受けてゐます。就中佛教に於ては、四恩を以て、道德の標準としてあります。四恩と言ふても、數字上三つとも、四つとも限つた譯ではありませぬ。恩といふことに一字づゝ付けると、恩徳、恩顧、恩義といふて、私は彼の人に恩義があるなどといふことは能く使ふ言葉であります。それで此恩を平

たい言葉でいふと、なさけといふて置ませうが、畢竟訓ずるよりも、音でオンと言ふ方が通ずるのであります。其處で恩といふことは、東洋道德の根源で、東洋の道德は、儒道、佛道、神道から成り立つて居ります。東洋全體の道德の根源は、『報恩』から割り出されたこと、衲は信じてゐます。これは東洋の特得といふても可い、西洋にもグラチチウデといふから、恩といふことがないではないが、西洋の恩は、個人的獨立から割り出されたのであります、我邦で、恩を酬ゆるといふことに就いて

何事のおはしますかは知らねども

忝なさに涙こぼるゝ

といふ和歌があります。これは歌人として有名な西行法師が、伊勢大廟に詣でた時、詠んだのであります。實に結構な名歌であります。心ある人は、此和歌を知つて居らるゝに違ひない。「何事のおはしますかは知らねども」とは、何事といふ理由を問ふこと勿れ、理由といふ時には、何故我は、君に忠義を盡さねばならぬか、何故我は親に孝行せねばならぬかといふ疑問が出て来るから、其理由を問ふこと勿れだ。「忝なさに涙こぼるゝ」、實に恩徳の意味は、纔かの文字に現はれた此和歌に、充分含んでゐます。慙ういふ意味のことを勧めるのは、東洋人ばかりではない。西洋人もパスカル宗教に對しては、決して理窟をいふなよと言ふてゐます。理窟は單に智慧といふを以てする、感謝の意だ

と、眞理は汝等の心に輝くといふてゐる。人種は違ふけれども、此邊は同一であります。即ち忝な
 いといふ感謝の心、サンクスの心で、實に有難くて堪まらぬのであります。或る人は、東洋の道徳は、
 回顧主義であると言ひました。回顧といふて、背後を向き、昔が慕はしいといふ道徳であるから、昔
 を思ふて躓ささりするので、遂には國が退歩して振はないといふ理窟をつけるが、これは一面を知つ
 て、他面を知らぬといふものであります。即ち全分の道理が、合點往かぬのであります。恩に報ゆる
 に位置を換へて言ふと、上に向つては、報恩と爲り、下に向つて言ふと、即ち慈悲心と爲ります。言
 葉を換へていふと、博愛の心、又推し擴めていふと、大慈大悲の心が、報恩謝徳であります。向け方
 は違ふけれども、報恩と、慈悲と違ひはありませぬ。此道理が解つたならば、回顧的でないことが解
 らねばならない。回顧的どころではない、前を向いてゐるのであります。消極的ばかりにならずして、
 積極的に言ふと、廣大無邊なる報恩であります。報恩謝徳の分類をして四恩といひます。餘り廣大に
 失すると、漠然とするから、分類して、

- 一に國王の恩
- 二に父母の恩
- 三に衆生の恩
- 四に三寶の恩

と分けられた。此一二三四の數字の中に於て、千萬無量が籠つてゐるが、其主なるものに就いて、名
 を出したので、實は四つに限つた譯ではありませぬ。

大切なるは三寶の恩

此四恩の徳を註釋すると、國王の恩とは、國家に對するの恩、父母の恩とは、家庭の標準は、親に
 孝行を竭すのである。衆生の恩とは、社會に對しての道徳でありまして、總て活きとし活けるもの、
 相互に恩義を竭すのであります。三寶の恩とは、一步飛び越えたる宗教上に於て、過去、現在、未來
 を通じたる徳は、此三寶の徳であるから、此三寶に報答せよといふのであります。けれども此四恩を
 考へれば考へる程、廣大無邊の意味が籠つてゐます。此四つに分類した中、取り分け恩に報ゆるに大
 切なものは、三寶の恩に報ゆるのであります。即ち宗教の徳に報ゆるのであるが、これを便宜上一つ
 にして説きます。此三寶が現はれるまで、どんなものでありますか。

生れながら此三寶は、先天的、遺傳的に傳へ來つたものであるから、生れながら佛といふことも、
 法といふことも、僧といふことも、皆耳に挾んでゐる。又耳に挾むまでには、多くの歴史を有つてゐ
 ます。西洋人の解釋では、人間としては、何うしても宗教の心を離るゝことはできないと言ひてゐま

す。それは何故かといふに、人は恐怖の心を有つてゐる。夜行するのに、あの角は眞暗がりであるから、氣味が悪いと言ふが、其氣味悪るがる心は、何處から起るかと言ふに、畢竟それは解らぬといふことに爲る。何うも人間の弱點は分らぬ心、恐しい心である。此心があると、疑心暗鬼で、石に蹴つまづいて驚き、木の枝で、頭を撫でられては怖しがることは、立派な理窟をいふ人にもある。恐怖の心ある以上は、哲學的學問を以て見ても駄目であります。暫らく世間でいふことを藉りて來て言ふて見れば、昔は分らないことが多かつたが、現今の如く學問といひ、智識といひ、進んで居らぬ時代では、鏡のない國もあつたやうなもので、現今でも滿洲の邊土などでは、磁石を知らないで、何ういふ譯で、動くかと思議がつてゐるから、學理的の話をして聞かせても、會得が能きない。日本人でも、昔は電話を知らなければ、機械を運轉して、汽車を進行させることも知らなかつた。ところが現今では、電話やら、電信やら、汽車を運轉し、其他廣く機械を應用して、理學の作用を現はす。又空氣を使用することもある。空氣を壓搾すると、一の固形體の如くに爲つて、掌に載せることも能きるが、吾等日本人も、四五十年前までは、こんなことを知らずに居つたが、今吾々が知らぬ前のことを見ると、智慧が足らなかつたのであります。それを思ふと、現在吾々が賢いやうな顔をしてゐるけれども、これが又百年とか、千年とかの後に爲ると、明治、大正頃には、恚ういふ人間があつたとか、いや道徳上品性の上に就いてはなど、或はどんなことをした。賄賂を取つたことがあるなど、後世

の者から笑はれるかも知れない。又は一夜大盡があつたとか何んとか、淺薄なことで世を迷つたなどといふて、笑はれるかも知れない。恚う考へて見ると、昔の人が、智慧がなかつたといふて、笑ふことは能きなくなる。今の人も昔の人に爲ると笑はれます。昔の人は研究しないから、遊星とか、恒星とか、又太陽の理を知らない、只分らないことは怖れて居つた。分らないから怖しいのである。昔は山の道理が分らぬから、山の神として敬ひ、水の道理が分らぬから、水神と祭り、火の道理が分らぬから、火の神としたのであります。印度にはガンジス河といふ印度四大河の中の有名なる河があるが、此河の印度全體に及ぼす利害といふものは、實に廣大である。此河の爲めに、印度大陸の農作物を潤し、又時あつて水の氾濫するが爲めに、家屋を流したり、人畜をも殺し、田地をも流されることがある。一面に利益を興へると、一面には怖しいこともありす。けれども學問的に考へのない時代には、之れは神業であるといひました。此河には、人間が禱りの爲めに、全然繪に描いた餓鬼のやうな人が、一杯に爲つて、おたま杓子のやうに見える、人間が多いから、恰も芋を洗ふやうで、終日禱りを行つてゐる。中には空腹に爲つて、死ぬものもあれば、日射病で死ぬものやら、生理上種々な變化を來たして死ぬのであるが、死ぬのを喜んでゐます。それは如何なる譯かといふに、河の神の暖い手に救ひ揚げられたといふ感じを有つてゐるからであります。又山ではヒマラヤ山があつて、此山から寶玉も出れば、鑛物も出る。これは人間を助ける材料だから、神業だといつてゐる。けれども印度人は、此



山の爲めに支へられて、不便を感じ、交通が能きない。又毒蛇猛獸も棲んでゐるから、一面には寶の出る山として敬ひ崇められ、一面には怖い。これは神業だらうといふてゐます。吾が日本では富士講、御嶽講などいふのがあつて、富士山を祭つてゐます。富士山は今利益の上からいふ時は、石炭も何も出ないけれども、宗教的に眺めて見ると、靈を有つてゐます。又教育の上では、此山は大なる教訓を與へてゐます。山を崇拜するのは、野蠻だといふが、此山へ對すると、吾々が生氣を喚起するし、又邪心を脱し得らるゝ靈を有つてゐる。だから山を崇拜するのは、宗教的の考へであります。太陽といふと學問的であるが、おてんとう様といふと神様であります。汽船に乗つて渡米するに、同乗者が船中で、おてんとう様が御出ましに爲つたと、拍手を打つて拜んでゐましたが、二十世紀に入つてゐる現今、太陽をおてんとう様とは、如何にも愚昧のやうであるが、宗教の妙は、其處にあります。太陽が光りを萬物に放つと、あらゆる動物、植物は助けられる。吾々は太陽の光りを離れて、一日も生きてゐられぬのであります。極く大昔は、光る道理、熱の道理は分らなかつたけれども、吾々を保護して下さることは信じてゐた。宗教の出來始めはそれでありました。信仰の自由位自由なものはありません。信仰の目を以て見る時は、鰯の頭も信仰からで、信心してゐるものゝ目からは、立派なものであります。或る物質を捉へて、神木だといふて伐採せず、又道端に轉がつてゐる石を信仰するが、下野那須野ヶ原の殺生石は、靈があるといつて怖れた。中央印度には波羅門教が多いが、其印度の寺で、種々の偶像が祭つてある中に、奇異に感ずるのは、人間の或る局部を祭つてゐる。人間なるものは、男女の局部から生れて來る。即ち陰陽和合した所から生ずる。これが萬物の根源であるといふて祭つてゐる。

統一的萬有神教

それがペルシヤ教に爲ると一變して、物といふ物に神様が付いてゐる譯ではない。世界を支配するものは、善と惡との神様があるだらう。故に惡人を退治して、善人を助けねばならぬと、恚う進んで來たのであります。それから又進んで、多神教と爲り、萬物を捉へて來て、同じ人間の中で、英雄とか、豪傑とかいふ人は、活きながら神として尊敬する。日本の如く八百萬神を立てるのも、宗教の開始始めに言ふと、正しく多神教であります。又吾々子孫たるものが、先祖は歴史上勝れて居らぬにもせよ。恩頼より先祖を神として崇めてゐます。これを學問の上から見れば、先祖崇拜だと一笑に付してゐるが、併し信仰の成り立つ以上は、一笑に付することは能きぬ。(これは發達の順序である) 進んで一神教の基督教に似た教には、神は一切の物を拵えたといひます。これを全智全能の神と言ふて、總てのものゝ活動するは、天の天外、地の地外に論なく、皆神の力であると言ふてゐます。併

しこれに國家といふ者を加へると、差支が出来る。何故かといふに、一理の神の外に、他神を立てず。他神を敬することは、能きぬといふことに爲ると、日本へ持つて来ると、吾邦の神を尊敬することは能きず、親の位牌も拜むことは能きなくなつたら何うでありませうか。吾邦の神とは、先祖を指して、神とするのであるが、此基督教の如き一神教を信する時は、他の神を信することは能きない。ニューテストメン新約にはないが、舊約には、此神を嫉妬の神といふてあります。嫉妬深い神故に、幾つもの神を祭れば、罰を與へるので、單に一神を祭るのであります。今日より見ると、大分崩れかけた事であります。喩へば鶯が法々華經と鳴く、これは年毎に春に爲れば鳴く、又春が来ると、麗はしく花が咲く、これを指して、神様の作用であると言ふであらう。けれども却々學者の眼には許しませぬ。鳥夫れ自身に鳴くべき道理があり、又花夫れ自身に咲くべき道理があるので、神の力で鳴き、咲くのではない。柱は堅に、敷居は横に、天井は上に、山は高く、海は深く、各々それ自身の力であつて、即ち山それ自身が聳え、海それ自身が深いので、決して神の力ではない。これへ名を附けたければ、物夫れ自身が神と爲る。原因結果の道理から推しても、一切萬物其働きに隨つて働くのであります。日本人や、西洋人が研究した結果も其通りで、此處へ来ると、此佛教は、如何なる部類に屬するかといふに、拜物教、多神教、唯一神教、萬有神教此内何れに屬するかといふに、只萬有神教といふと、哲學的に爲るから、統一的萬有神教といふ

佛教其者は論理的宗教である。けれども或る博士の唱へる論理的宗教とは違ふのであります。神様を天の天外、地の地外に安置せず、物夫れ自身に預けず、人間の道の法式に従つて、出来上つたのが佛教であります。迂遠の話ではあらうが、牽強附會の説ではない。吾々が信じてゐる。『三世諸佛通誠』の偈に

『諸の悪は作す莫れ、衆くの善を奉行せよ。自ら其意を淨くせよ。是れ諸佛の教なり。』

とあります。僅に四句四言であるが、一切の佛教は此短い詩から出来てゐます。之れを以て倫理的標準として可からう。即ち『三世諸佛通誠』が母親であります。佛なり、法なり、僧なりが、此母親の胎内から生れて来る。吾々の信仰として、佛教を維持することができた以上は、恩頼といふことを忘れてはならぬ。何卒吾々は、此佛教の眞理を信じ、東洋道德の特色を實際の上に現はして往きたいものであります。

俚 諺

我が寺の佛尊し
尊い寺は門から知れる

意力の修行

智識や學問のみで世は渡れぬ

佛敎の『四十二章經』といふ經文の中に、佛が吾々に敎へられた言葉が、左の如く出てゐます。

『譬へば、一人と萬人と相戰ふ如く、鎧を掛けて門を出づ、意或は怯懦に、或は半途にして卻き、或は格闘して死し、或は勝つことを得て歸へるが如し。學道の人も亦然り。前境を怖れず、衆魔に惱まされず、勇銳精進にして、無爲を求めば、我れ保す、此人必ず道を得ん。』

これは剛堅なる意志の鍛鍊としても又見ることが能きませう。吾々が個人の立場から、最う一歩進んで、國家の上からも、又其國家の中の一分子たる國民の一人として考へて見ても、今日最も必要を感じてゐるのは、意志の鍛鍊であらうと思ひます。學問を進め、智識を開くことは、洵に結構であります。併し單に智識、學問ばかりを博めたばかりでは、此世に處することは、却々困難でありませう。此世は、人間の智識や、學問や、理屈ばかりでは到底渡れるものではありません。例へば學生

が學科を卒業して、愈々學校を出て、此社會の滔々たる活波瀾の眞ツ只中に漕ぎ出て見ると、其時に至つて、智識や、學問の力ばかりで、進んで往くことは難かしいに、之れに伴ふところの意志の力の堅實でない者は、恰も渺茫たる大海に、木の葉の如き舟を浮かべたやうなもので、風浪の爲めに、彼方に漂ひ、此方に漂ひして、遂には覆没して了ふであります。其時に至つては、少々學問、少々智識の智慧位は、何んの役にも立ちませぬ。それは智識、學問が役に立たぬのではない、學問なり、智識なりの根底たる意志の力といふものを、平素鍛え得なかつた爲めであります。今の學問と古の學問と、其仕方を比べて見ると、古の學問の仕方は、第一に人の意志の力を強めるといふ方に重きを置いてゐます。ところが今の學問の仕方は、確に進んではゐるが、意志を養成する點に至つては、稍缺ぐるところがあるやうに思はれます。凡そ人間一生涯のことは、何が中心に爲るかといへば、即ち意志の力であります。人或は成功が、何う恚うといふが、意志の力なくして、事を爲さうとすると、動もすれば射的の心を起すことを免れませぬ。然うして一度失敗すると、周章狼狽して、恢復しやうといふやうな勇氣を出すことが能きない。其處で意志とか、精神とか、身體とかいふても、果して何物が意志であるか、何を指して精神といふてゐるか、身體は何か、又之れを如何やうに鍛鍊し、修養したら可いのであらうかと、無暗に書物を搜したり、人のいふことを聞いたりするが、そんなことでは不可ぬ。自分自身に反省し、考へて見ると、稍一點の光りを認めることが能きであらうと思ふ。

何んでも身體は、一つの抵抗力を、天然自然に備へてゐるといふことであります。柄の知人二木博士が、度々言はれたことゝ、恰も白隠禪師の氣海丹田説とが、能く出合ふてゐるのであります。此身體は頭のギリ／＼から、足の爪先に至る迄、外界の物に抵抗する力を、有つて居るとした所で、唯有つてゐるといふことだけでは不可ぬ、天然受け得てゐる力を、更に人為的に、吾々が種々様々の方法を藉り來て、愈々益々増進させて往かねばならぬのであります。大體吾々の身體には、三通りの抵抗力を備へてゐるといふことであります。それは素人の目にも分つてゐるのは、先づ皮膚であります。皮膚は丁度身體に、油紙を張つたやうなもので、脂肪とか、何んとか、種々のものがあつて、外界の物に抵抗するやうに出來てゐます。暑いに就けても、寒いに就けても、其他外界から襲撃して來るものを、盡く防禦しやうといふ風に見える。ところで其抵抗力より更に、以上の害毒の力を有してゐるものが、襲ひ來たつたならば、抵抗し得るや否や、其處であります。其處を人為的に鍛錬し得たならば、盡く打ち破ることが能き得べきものであります。それは何うするかといふに就いては、或は滋養物を食ひ、新鮮なる空氣を呼吸することも、又海水浴とか、山上の空氣療法とか、日光浴とか、若しくは柔術、擊劍とか、ベースボールとか方法は種々あるが、要するに吾々の有つて居る所の、抵抗力を増進せしむる方法に外ならぬ。吾々を圍繞してゐるものは、悪魔であります。敵であります。其悪魔や、敵に打ち勝ち得るところの力を、吾々は備へてゐるならば、悪魔何んぞ怖るゝに足らん。敵更

に憚るに足りませぬ。吾々は朝から晩まで、或る一定の戦闘を續けてゐるやうなものであるが、皮膚の力に、一定の限りがあつて、外來の敵の力が強ければ、遂に體內へ侵入して來る。肉の中に喰ひ込んで來る。然うすると第二、第三の防禦を要するのであります。防禦の力も又自然に設けられてゐる。即ち血液中には、白血球と、赤血球とがあつて、其白血球は、常に防禦的任務に従事してゐます。それで殺菌の力を有つてゐるのです。若し敵が、皮膚の抵抗力を打ち破つて、内界に飛び込んで來ても、白血球は之れを盡く殺すだけの力を有つてゐる。そして白血球は、敵を殺すばかりでなく、其敵たり、害毒たるところの微菌を、自分の食物としてゐるといふことであります。ところが敵も左るもの、豫めそれに備ふるに武装してゐます。顕微鏡に照して見れば、能く分ります。恰も兜を冠り、鎧を着たやうな有様で飛び込んで來る。それを血精やら、白血球やらが打ち殺すのであります。萬一敵の力が強いといふことに爲ると、白血球が、更に他の働きを起し、毒素なるものを連れて來て、其武装して來た敵に向ひ、毒を注ぎかける。すると外來の敵は、此一種の毒に出逢ふと、最う仕方がない。盡く殺されて了ふ。これは何人の身體にもある自然の作用であります。針の先きで、皮膚を突くとポツリと粟粒程の血が出るが、其血の中には、五百萬の細胞があつて、其細胞の中に、今説いた如き働きを爲すものは充滿してゐる。血の中には、能く抵抗すべき力を備へてゐるから、更に之れに加ふるに、一種の人為的鍛錬法を施して、打ち鍛えて往くのであります。

怖るべきは文明病

此世の中が、次第に開けて往くと同時に、文明病といふ一種の病氣が流行する。開けて行くのは、歡ぶべき現象であるが、併し怖るべきは其文明病であります。それはどんな病氣かといへば、文弱といふ奴であります。納どもが雲水時代には、三度の食事も、二度より食ふことが能きなかつた。否な印度に居た時は一度であつた。それでも病氣にも罹らなかつた。それが現今に至ると、一什警戒してゐるものゝ、感胃に罹るとか、頭痛がするとか、胸が痛むとか、種々の障りが生じて来る。實に恥かしい次第であります。此文明病といふものに就いては、油断なく警戒すべきものであらうと思ふ。誰れしも段々に、老朽して往くのは當然であるが、衣食住の生活の度合が高まると、意志が弱く爲りますから、慙くならぬやうに、鍛錬しなければなりません。西洋人は老いて白髪頭であつても、子供と一緒に、種々様々な運動を試みてゐます。それで自然身體が健全で、心持が若返るといふやうな方針を取つて居ります。それから納どもの宗旨から言ふと、専門の悟りといふものは、力を如何に應用するかと言へば、即ち意志の鍛錬であります。唯頭を剃つて、法衣を着て、座敷に座つて、虫も殺さぬやうな顔をしてゐるといふやうな行方ではありませぬ。言ふまでもなく靜中の工夫から、更に進ん

で動中の工夫を、最も奨勵するのであります。即ち雲水の時代には、柴を運び、水を汲み、炊事から拭き掃除、行住座臥の上に於ても、常に勞働的のことを奨勵してゐるのです。畑も作れば、米も搗く、薪も割るし、洗濯もする。それから雲水僧の振り分けにして肩にかける袈裟文庫といふものがあるが、其中には、椀もあれば、箸もあり、剃刀から雨合羽までもあつて、日用の品は何んでも入れてある。これが最も意味のあることで、勞働は神聖なりといふことは、何處から藉りて来たか知らないが、納どもの言ふのは、然うした意味ではない。神聖なる心を得たならば、一切萬事悉く神聖ならざるものはないのである。必ずしも勞働ばかりを、神聖といふのではない。之れが禪宗の立場であります。佛語に、

『意は毘盧の頂額を踏み、行は童子の足下を禮す。』

といふことがある。毘盧は詳しく言へば、毘盧遮那佛で、詰り佛陀といふことであります。それで道の修行をする者は、心に於ては釋迦何人ぞ、我れ何人ぞといふ意氣を有つて居りながら、其身に行ふところに至りては、漢垂れ小僧の足下をも禮拜するといふ意味であります。一寸聞くと、甚だ矛盾してゐる言葉のやうであります。一歩進んで考へて見れば、大抵解ります。これは外の學問でも然うであります。所謂エキストリームとエキストリームは、遂に一つに爲つて來ます。然ういふ仕方ではありませんから、意志を鍛錬する上に於て、自分から一端慙うすると目的を定めたならば、一直線に進

んで往く、其時には馬車馬的であつて、脇目もふらず、猛進して往くといふ遣り方でありませう。人間は何うしても一面に馬車馬的の意氣がなければならぬ。若し首鼠兩端を持して、進まうか、退かうかといふ二股の心があつたならば、到底眞の大丈夫の働きを實現することは、難いでありませう。此意志を鍛錬することに就いて、面白い話がある。昔紀昌といふ人が、射を飛衛に學んだ。飛衛の言ふには

『先づ不瞬を學べよ。』

と、ものを射るには、先づ眼目を定めよ。精神を不動にせよといふのであります。吾々何うかすると直ぐ瞬きをする。危険物に出逢ふと、直ぐ瞬きをする、其處で紀昌は、家へ歸つて、妻が機を織つてゐる其下に入つて、仰向に爲り、そして其機の梭の往來するのを見て、不瞬の稽古をしました。實行といふものは、理屈なしに、こんな何んでもないやうな事だが、大なる力を得るものであります。紀昌は恚くして、一年、二年、撓まず、屈せず行つた。すると遂には、眼の前に錐の尖を持つて來ても刀の斬先を持つて來ても、更に瞬きせぬまでに會得しました。これが鍛錬修養の効果であります。心を鍊るといふのも、恚うした工合であります。其處で紀昌は、飛衛の所へ行き、不瞬を得たことを告げました。すると飛衛が、

『次ぎに視を學べ。』

と言ひました。小さいものを大きく視ること、又は四角なものを丸く視る、又は長いものを短く視るといふやうに、視力を養成することを學べと言ふたのであります。其處で紀昌は自ら工夫をした。虱を一匹取つて、其胴中に、馬の尾のやうなものを通し、天井から吊しました。虱は支那の名物といつても可い位で、虱を捻つて、天下の政治を談ずるといふやうなことが、書籍に書いてあるが、實際支那に往つて見ると、虱は至る所に澤山ゐます。それで紀昌は、天井から吊した虱と、睨めつことをしました。虱と睨めつこといへば、何んだか落語のやうで可笑しいが、其處に意味があります。初めからそんな莫迦なこと言ふては、何事も仕了せるものではない。紀昌は熱心にも、それを毎日行つた。半年、一年、二年と、月日が経つに従つて、視力が養成せられ、心が自然に落ち着いて來た結果、其虱が大きく見えるやうに爲つた。其視物を以て他の物を視ると、茶碗でも、土瓶でも、素敵もない大きな物に見える。それで楊弓で、吊り下げてある所の虱を射たら、心を貫くとあつて、其心臓を旨く射抜いたのであります。これなら最う大丈夫だと、飛衛の所へ行き、視を養ひ得たことを告げた。では試みに射て見ると、飛衛が弓を出して、紀昌に射らせると、目指したものは百發百中でありましたところが人間といふものは、不足言ぬもので、紀昌に慢心が出て來た。今天下に弓の名人といへば俺だ。けれども目の上の瘤ともいふべきは、師匠の飛衛である。彼れを亡きものにすれば、吾が威を恣にするのが能きると、淺ましい心を起した。それで或る日、飛衛の外出したのを窺ひ、途中

に待ち受けて、殺さうと矢を放つた。すると飛衛は有繋に名人で、師匠だけの價値があつた。突いてゐた杖で、飛び来る矢を、ものゝ見事に拂ひ退けました。紀昌は、飛衛の其手練の秀でたのを見ると、覚えす身體を大地に抛て、實は自分は、恚くくの怖るべき野心を起したと懺悔して謝罪すると、飛衛は紀昌の罪を免し、爾來父子も只ならぬ厚き交りを結んだといふことであります。

人も物も不滅

吾々が座禪をするのも、矢張鍛錬を重ねるので、身體と精神とを合せ練るのであります。其初歩の觀念方法ともいふべきは、呼吸を數へることです。これは別に難かしいことはありません。先づ姿勢を正しく座りまして、出る息、引く息に就いて、全身の注意力を、其處に集めるのです。それを段々行つてゐると、當り前なら、呼吸は肉眼では見えませぬが、鍛錬の結果、遂には其呼吸の出入が、眼前に現はれて來ます。そんなものが現はれて來ると、不思議に思ふ人もあらうが、段々熟して來ると、咽喉で呼吸をして居つたのが、腹で呼吸をするやうに爲つて來る、遂には踵でするやうに爲る。其觀念が、或は熟すると、遂に天地を吞吐し得る境涯に爲つて來る。これは決して奇矯の言でもなければ、大言壯語でもありません。勿論それは程度問題であります。多く行れば、多く會得せらるゝ

のであります。二木博士の言ふところに依れば、人間一人の血液を量つて見ると、二升五合よりないとのことであります。頭から足の先まで血が二升五合しかない。それで其血が旨く活動して居れば可い。血も又一種の意志力を以て、働いて居れば可い。其時が其人の健康な時であるのです。吾々意志の力を養成するといふことに就いては、先づ身體から始めなければならぬ。勿論心からでも可いが、何うもそれでは一寸取り付きにくい。先づ身體から行る。そして身體が整つて來れば、精神の鍛錬が自然に能きて來る。外界から襲撃して來るものを、鑿殺にすることが能きる。そして同時に、精神にゆとりが能きる。心にゆとりがないと、夜中道を歩行くにしても、疑心暗鬼を生ずで、何か化物でも出はしないかと思ふ恐怖心から、駈け出してさふことに爲る。それで先づ身體を鍛錬し、次ぎに心を鍛錬するといふことに爲るのです。其處で心を鍛錬するに就いて、古人の語に、

『入りては法家拂士なく、出でゝは敵國外患なき時は、國常に亡ぶ。』

とあります。洵に良い言であります。外界から敵が一什我を窺つてゐるので、我れを強からしめてくれる。若し我れに敵對するものがない時には、我れは弱くなるのであります。吾々修行中の時の如く頭から壓え付けられるやうな時には、抵抗力が進んで往くものであります。心の力が養はれる時であります。甚麼ことを言つても、人が御無理御至當と、通してくれるやうに爲ると、頗る弱い者に爲るのであります。即ち心に慢氣が生じて來る。人間は何時でも、警戒心がなければならぬ。敵國外患

然ういふものが、一什我れと對峙して居らねば不可ぬ。孟子に
 『天大任を此人に下さんとする時は、必ず其心思を苦しめ、其體膚を飢やし、其筋骨を勞せしむ。』
 とある如く、恚くありて即ち意思の鍛錬が能き、大なる仕事成就するのであつて、天が大なる仕事
 をさせやうとする時には、大いに苦しませ、身體をして勤勞に堪へしむるやうにするのである。そ
 れを爲し遂げて來るものが、大事を成就するのであります。先祖が吾々に、物質に、精神に、種々な
 ものを殘してくれたのは唯一つの意志の力であらうと思ふ。楠正成が、正季の志を是として、七
 度人間に生れて、朝敵を滅さんと言つたのも意志であります。意志あつて肉が生きてゐるのでありま
 す。同時に肉あつて、意志が生きてゐるのであります。只形が變つてゐるだけだ。物も、心も、靈も、
 肉も生きて居るのである。靈魂不滅といふことには、誤解があります。意志の不滅は、却つて了解
 し易い。時間から見れば、意志の力は、未來の未來まで、打ち貫いて居る。空間から見れば、充分世
 界に充ち満ちてゐると言ふても可い。衲は然う確信してゐます。此點に於て、人は不滅である、物も
 又不滅である。

一心不動の三昧

此意志のことに就いて、憶ひ起すのは、釋尊のことです。釋迦牟尼如來の一代を大略して言
 へますと、先づ八通りに爲ります。之れを佛敎では「八相常道」といひまして、

- 第一 上天下天
- 第二 托胎
- 第三 出胎
- 第四 出家
- 第五 降魔
- 第六 成道
- 第七 轉法輪
- 第八 入涅槃

斯う爲ります。此處では「八相成道」は説かぬことにして、第五の降魔に就いては、衲は屢々説いて
 ゐるが、釋尊が菩提樹の下で、座禪三昧に入つて居られると、種々の惡魔が來て、其禪定を擾亂しや
 うとしたが、釋尊はそれに取合はなかつた。これは惡魔といふても、現實的ではない、心の中の妖怪
 であります。衲が嘗て旅順に往つた時、爾靈山に登つて、日露戰爭當時を想見したことがありました
 が、敵味方入り亂れて、攻めつ防ぎつ、奪はれつ奪ひつして惡戰苦闘し、多くの死傷者を出したこと



が眼前に映じ、竦然としたのでありました。若し其時、吾軍の意志が強くなかつたならば、彼の地を占領することは能きなかつたのでありませう。ところが難攻不落と言はれた旅順を、遂に開城せしむるに至つたのは、吾が忠勇なる將士が、一心不亂の境涯、一念不動の三昧に入つた力の致すところであります。昔の人は、根氣の低い人に、此境涯、此力を得させやうと、南無阿彌陀佛を念ぜよと教へて居ます。此南無阿彌陀佛により、不動の信念を得ねばなりません。一遍上人が法燈國師に參ぜられた時、

唱ふれば我れも佛もなかりけり

南無阿彌陀佛の聲ばかりして
と、自分の信念を表白された。併し法燈國師は、それでは未だ薄紙一枚隔てゝ居ると言はれたので、上人は一層骨を折られた結果、豁然大悟して

唱ふれば我れも佛もなかりけり

南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛

と言はれた、これは宗教的に信念を確立し、意志を鍛錬した一例であります。さて釋尊は惡魔を退けられたが、次には順魔が現はれて來ました。それは如何にも麗はしいところの美人で、釋尊の周圍を取り巻いた。丁度肉の屏風を立てたやうな有様であります。之れが即ちテンブテーションといふものです。其現はれた美人が、種々の態度を示して、釋尊の心を緩ませやうとします。其處で釋尊は、

『革囊の糞穢、爾來るとも我れ何かせん。』

と言はれた。革の袋に包まれた穢れたものといふ意味であります。畢竟糞桶を包んでゐるやうに見える。そんな不潔なものが來て、誘惑をしても、我れ何をかせんと言はれた。實際に當つては、却々恚ういふ工合には往きませぬ。古人が、

『逆境は打し易く、順境は打し難し。』

と言ふてゐる通り、我れに逆らふものは、抵抗力があるから打し易く、弱くやさしく出て來ると、ひよつとすると土俵の外へ投げられることがあります。人間一生でも然うである。患難の時には、意志力が突つ張つてゐるが、快樂を得た時には、力が弱く爲ります。基督が、ヨルダン河の畔で、ヨハネから洗禮を受けて、自分を試みるが爲めに、四十日、四十夜を通して、惡魔から導かれて、野原を行つたことがあります。それが恰も釋尊と同じであります。かゝる所を内面から見れば、何れも意志の力でありませぬ。今急務を要するのは、意志力の養成であります。日本は一等國に爲つたとか、世界列強と匹敵することができるとか、豪い國に爲つたとかいふことを喜んでばかり居られませぬ。戦ひに強かつた如く、他の政治にも、經濟にも、又産業的事業などにも、其他道德的觀念、宗教的思想に於ても、此世界で一等國たるだけの力を現はさなくては、洵に心細いのであります。衲は敢て宗教の爲めにのみ説くのではありませぬ。



大なる寶

精神的に貧しい人

古人の文章に、

『天地は萬物の逆旅、光陰は百代の過客』

とありますが、吾々が此世に生れ出てから、結末を告げるまでの間は、三十年、五十年、七十は古來稀なりと言ふて居りますが、其間世の中を辿り辿り行く状態は、一つの旅行のやうなものでありませう。現今はヤレ汽車だ、汽船だ、自動車などがあつて、樂に旅行が能きるが、昔風に言ふならば、東海道五十三驛、關所超ゆれば、又關所と云ふ風で、一宿一驛と進んで行くので、朝立つては夜泊り夜泊つては朝立つて行くのでありますが、其泊り／＼の旅籠屋に於て、宿賃を拂はねばならぬ。其人の旅行の宿屋に於て、仕拂ふところの路用と云ふものは、取りも直さず勤勉努力のそれであらうと思ふ。如何に宿賃を拂はうとしても、懷中が禪宗風の本來無一物では拂ふに由なし、豫め準備がなければならぬ。それには吾々が暫くも遲滞せず挫折せず、何處迄も向上心を以て、勇猛に進んで行く、それが即ち宿賃となるのであります。其宿賃から想ひ出しましたのが寶であります。寶なくしては、人間が一日も世に立つことは能きませぬ。吾々は何か寶と云ふものを懷中に入れて置かねばならぬ。『老子道德經』の中に、

『吾に三寶あり、寶として之を保つ、一に曰く慈、二に曰く儉、三に曰く敢て天下の先と爲らず。慈なるが故に能く勇なり。儉なるが故に能く宏し。敢て天下の先と爲らざるが故に、能く成器の長となる。』

或は字が脱けて居るか知れませぬが、大體の意味は斯うであります。凡そ人として、如何に巨萬の富を積み、如何に高位高官に居つても、如何に大厦高樓の中に住ひ、如何に綾羅錦繡を身に纏つて居つても、如何なる山海の珍味を食つて居つても、若し其人にして道德なく、宗教なく、何等の同情心なく、冷たい心を有つて居るならば、其人は精神的に貧しいものと云はねばなりません。斯る人は老子の所謂寶を有たぬ人であります。假令有つて居ても、寶として持たぬ人あります。我が佛教に於ても、三寶と云ふものがありますが、今は老子の三寶のことを説きます。

吾に三つの寶がある。第一に慈、第二に儉、第三に敢て天下の先と爲らず、人の先に立たないと云ふのである。慈なるが故に能く勇なり、儉なるが故に宏し、敢て天下の先を爲さざるが故に能く成器

の長となると云ふのであります。先づ吾々お互は、何を以て品性を鍛えて行くか、如何なる道に據つて、人格を高めて行くかと云ふことに就いては『老子經』にある三寶と云ふ寶を取つて以て、吾が實として、品性を修養して行くことと云ふやうにしたならば、洵に幸福と思ふのであります。先づ最初の慈悲は、慈悲の慈でありまして、此慈悲と云ふものは種々に使へる。或る時は仁といたり、或る時は愛とも言い、日本言葉で云ふならば、情けとか、同情とか言ふてもよいので、種々の文字を充てること
 が能きますが、大體に於て、人の心は赤心であります。物に對して誰が命令するかは分らないが、自然に同情の心が起る。此心が即ち慈悲であります。宗教の方から眺めて見ますと、世界は廣い、人類は多い、宗教も亦從つて一つでなく、種々の宗教があると雖も、世に臨む所以は皆一つである。宗教と云ふものを、若し一つの學問的に説明するならば、彼の宗教と此宗教とは、其成り立ち、其歴史、其状態などが異つて居るのでありますから、到底相一致することは能きないのであります。若し其宗教の由つて起る所以、其本來の精神からいへば、佛教、基督教、儒教、神道、乃至回教も、恐らく約束せずして一致する點が必ずあらうと思ひます。斯くの如く符節を合するが如くになつて居るのは洵に頼母しい譯で、眞理は古も今も變つて居ない。東でも西でも異つて居らぬと云ふのは、吾々が頼みとする所でありまして、之れを佛教より言へば、佛心とは大慈悲是れなりで、結局此大慈悲に外ならぬのであります。又基督教で言つても同じこと、愛と言ひ、Love is God, God is Love; Love is

Godと云ふ、皆是れであります。釋迦は此の大慈悲の爲めの故に王公の位を棄て、山に入りて道を求め、再び世に出現して四十九年の間人の爲めに種々教へを設けられたのであります。又彼の基督教が十字架の上に掛つたのも、此一つの愛の爲めである。單に釋迦、基督教のみならず、凡そ一宗一派の教祖たる人々が、あらゆる艱難辛苦を嘗めて、あらゆる修行を積まれたのも、只此慈の一字にあるのであります。總ての宗教は此點に於て一致して居るのであります。君子は千里同風といふことがあつて、東西隔つて居つても、基督教と釋迦と約束せずして一致して居る。出會つて居る。此慈といひ、愛といふものも、只單に基着や釋迦ばかりに一任して置いてはなりません。假令吾々と雖も、亦皆之れあるが爲に働いて居るのであらうと思ひます。此慈と云ふは、いつくしむと訓する字であります。慈と云ふても、只憐れむとか、氣の毒に思ふとか云ふ一種の感情ばかり指すのではない。若し然うであると云ふと、動もすれば宋襄の仁に陥るのであります。それ故老子は、慈なるが故に能く勇なりと、言葉添へられてあります。眞の大慈悲、眞の博愛と云ふものは、能く勇なりと云ふ點がなくてはならぬ。勇と言つても暴虎憑河の勇もあるものでありませう。先方から打込んで來れば、打込んで行き、拳を振り上げれば、蹴飛ばさうといふ勇氣は誰れも有つて居りますが、之れは血氣の勇であります。眞の大勇といふものは、少くとも其據り所がある。即ち慈悲から出て來たものでなければならぬ。此處に至ると、勇氣といふものは、實に頼母しいものになつて來るのであります。慈と、勇とは、其形に於て



は殆んど相同じからずして、而かも其精神に於ては離るべからざるところのものであります。

慈悲には敵なし

其實例を擧げて見ますと、彼の法然上人の如きは如何でせう。彼の通りの迫害を受けて、將に流謫せられやうとする時云はれた言葉に、『我縦令死刑に處せらるゝと雖も、夫れが爲めに、此唱道の志を廢すべけんや』と、一面から見れば實に何うも駭蕩たる春風の如き温かな慈悲、一面から見れば秋霜烈日の如き勇氣が籠つて居るのであります。そして謫所に赴かるゝ時に、藤原兼實に贈られた和歌があります。其和歌は、

露の身は此處彼處にて消ゆるとも

心は同じ花のうてな

斯う云ふ決心があつてこそ、始めて威武も屈すること能はず、富貴も淫すること能はずと云ふて可いのであります。更に謫所に行かれて後、又斯う云ふことを言はれた、

『驛路は行者の行く處なり。』

これは何んでもないやうな言葉であります、吾々修行者に取つては、實に有難い言葉であります。

『若し吾れ偏士に行かざれば、偏士の衆生を如何にせん。』

便宜の所に計り居つて何を爲すことが能きやう。斯る鳥も通はぬ島に流されて來ねば、何うして此島に住んで居るところの、憐むべき愚民を度することが能きやうか、幸にして此流罪に遭つた爲めに斯くの如き處に來て、斯くの如き衆生と、生活を同じうして教化を普及することが能き、實に忝ないと言はれた。此言葉は如何でせう。自我と云ふか、セルフイツネスと云ふか、そんな小さいな我と云ふやうな物が心の中に在つては、斯くの如き動かすべからざるところの勇氣ある言葉は、言へぬのであります。一面からは勇氣の言葉とも見え、一面からは慈悲の言葉とも見えるのであります。又日蓮上人の傳記を繙いて見ますと、元寇の時でも然うです。此敵を退くる者は、只吾れ日蓮一人のみと。自ら信することの厚く、勇氣の凛々たる有様はそして一面から見れば、慈悲から出た言葉とも見えます。併し日蓮上人も、人の誤解を虜つて、『我れ大言を吐くが如くなりと雖も、君の爲め國の爲め、神の爲め、佛の爲めに、斯く言はざるべからず』と、其凛乎たる勇氣は、實に當るべからざるものがあるのであります。併し其堅き自信も、惜いかな、終に誤解せられて、時の執權から死刑に處せられると云ふことになり、龍口で將に刑せられんとするに至りました。鎌倉には龍口寺と云ふ古跡が、今に存じて居りますが、今や日蓮上人が、一刀の下に刑場の露と消えんとする時に言はれた言葉に『幸ひなるかな、我れ法華經の爲めに、此の身を棄てん』と、實に勇なりと言はねばなりません。

丁度飢えたるものが、食物を得たる如く、大旱に雲霓を望むやうな有様で、幸ひなるかな、我れ此眇たる一身を捨て、法華經の爲めにすることの能きるのは恰も砂を以て黄金に換へ、石を以て玉に換ふるが如く實に有難い。我が年來の望みを遂げるのは此時であると、實に勇氣があります。之れでない、仕事は能きませぬ。如何なる仕事でも眞の勇氣から出ぬと生命がありません。敢て日蓮上人のみではなく、何人でも苟も爲すあらんと思ひ定め、何等か前途に洋々たる一つの希望を以て、一步進んで行く其勇氣の中には、唯己れ一人を利するのみならず、人の爲め、國の爲め、博愛的精神が伴つて居らねばなりません。夫れあるが爲めに世の中に如何なる強い者があつても、慈悲に敵する者はないと思ひます。仁者敵なし、力と力とは拮抗し、智慧と智慧とは鬪ふが、慈悲には敵する者はないと思ふのであります。

詩人スコットと犬

彼の有名な英國の詩人、スコットと云ふ人が、未だ兒童の時分に、偶然庭前に出て立つて居ると、其處に一匹の犬が飛んで來た。子供心の惡戯半分に大きな石塊を取つて犬に投げ附けた。するとそれが犬の前足に中つたから、犬はキャン／＼と叫びながら、跛を曳き／＼ヒヨロ／＼しながら、スコットとの足許に歩き寄つて、尾を掉り、舌を出して、スコットの足をペロ／＼と甜めたと云ふことであ

りますが、斯う云ふことが、人間にあつたら何うであります。何んだ此野郎と云つて、關東者のやうに氣早い人間であつたなら、忽ち鐵拳を振り上げるのであります。併し此犬の無邪氣さは、足を傷つけられたと云ふ念は毫もなく、敵たるスコットの足を舌で甜めた。此事に就いてスコットが大いに愧ぢまして、其幼な心に、深く一つの印象を受けたと云ふことであります。何よりの良い教訓であります。此時に於ては、狗兒が大善智識であります。斯う云ふ事に觸れて、始めて各々が生れながらに有つて居るところの、慈とか、愛とか、光を放つのであります。スコットは此の如き事からして、後に詩人として勝れたのみならず、人格に於ても優れた紳士となつたのであります。人が理窟を言はうと思つて、スコットの前に來ると、其人格に化せられて、朝日に霜の消ゆるが如く、理窟を言ふこと能きずして、歸つて了ふと云ふやうな有様であつたと。其人格の大を爲す所以のものも、極めて細微の事柄が基となつて居るのであります。夫れで老子の第二の寶、儉であります。儉と、吝とは、其精神に於て大いに異なれども、其表面からいへば儉約と云ふこと、吝と云ふ事とを取違へることがあります。儉約と云ふことは、一文と雖も濫りに費さない。費すべき時に當つては、大いに費す、百萬の黄金も亦消得すべし。而して施す時は惜氣もなく施す、之れが儉である。老子曰く、『儉なるが故に能く宏し。』儉約といへば眞に金錢の方にのみ目を附ける。頃日は何うも臺所の費用が多

いから、減らさなければならぬといふ。それも儉約の一端ではありますが、同時に我には我が此の精神を浪費しない様にしなければならぬ。動もすれば、頭腦を浪費する場合、時間を浪費する場合が多くなる。此の時間でありますが、西洋では之れを金といひ、支那では寸陰寸璧といつて居ります。でありますから、時間は又或る意味に於て、生命と見ることが出来ます。儉約といへば、多くの人は、金錢か、財産の如く目を附けるものでありますが、それ以上の財産、即ち我が頭腦を浪費することを何んとも思ふて居りませぬ。斯う云ふことは一々擧ぐれば、際限がありませんが、決して無益に時間を費さないといふ、さう云ふ目を以て眺めて見れば、一晝夜は二十四時間として、其の中一分間餘分に分けて呉れといった所で、然う云ふ譯には往きませぬ。故に一日無駄に送つたら、一日丈け負けて貰つて、取返さうといつても、取返すことは能きませぬ。時間のみならず、空間に於ける總てのものを、一切懸直なしで一厘一毛も浪費せず働いて居る。それに鑑みて、吾々は今日の行爲を律して行つたなら何うであらうか、儉なるが故に能く宏し。サア之れを使ふと云ふ時に、大いに費やす、然う云ふことは、何處から生み出すかと言へば、兎の毛の先き程の事でも、無益の爲めに、費さないと云ふところから出て來るだらうと思ひます。

彼の石田三成といふ人……其人物に就いては今論じませぬが、彼の三成が關ヶ原に大敗した結果、生擒にされて、今や將に京都に於て、首を打たれんとして籐丸籠に入れられ、護送せられて行く途中

「咽喉が渴くから、湯を飲ませてくれぬか」と言ふたら、護衛の者が「途中だから、そんなことは能きない。幸ひ此處に柿があるから、之れを遣らう。之れで咽喉の渴を止めたら可からう」と言つた。すると三成が拒んで、「そんな柿は要らぬ。柿と云ふものは痰の毒である。私は食はぬ。」そうすると護衛の者が笑ひながら、「今京都に首を刎ねられに行くのに、痰の毒も何にもあつたものではなからう。御前にも似合はぬ」と言つたら、三成は流石は大事に參する程の人物である……人格は別であります……「御前の様な人間だから、然う云ふのは至當だ。目前に死が迫つて居るのは、百も合點。二百も承知だが、一分の時間と雖も死を惜しむ、大望を抱いて居る者は、死の一刹那迄は國の體だ。犬死はしない。燕雀何んぞ鴻鵠の志を知らんや」と言つた。流石三成であります、斯様な場合に處して、命を惜しむと云ふのは、餘程の修養がなくてはならない。イザ殺されるとなれば、大抵の者は、自暴自棄になるのであります、併し一面に、此心があれば、死に臨んでは、却つて屑く死するであらうと思ひます。其處に至つては、名譽、虚榮、燈火のやうな生命、幻のやうな財産の如きは、眼中にないであります。儉なるが故に能く宏し。老子はなか／＼よいことを言つて居ります。

成器の長

第三、敢て天下の先と爲らざるが故に能く成器の長となる。天下といへば廣いのであるが、結局人のことでもあります、善い事があれば、人を押し除けてでも、我れ先きに得やう、厭やな事は、成るべく人を先きに出さうと云ふのが、普通の人情であります。それを總ての善い事は、先づ人に譲つて置いて自分の身を遜ると云ふことに、我が心を養ひ得たならば、能く成器の長となる。成器と云ふことは、學者でも滅多に使はぬ詞であります、詰り團體とか、群集とか云ふ意味で、大勢の人の集まる共同體的の様な意味を有つて居る。天下に先だつて善い事があれば、我獨りで、之れを占めやうと云ふ様な吝な心を有つて居らぬが爲めに、能く群集團體の長となる事が出来る。人の長となる程の心は然うであります。僅かの功を、取らうと思つたりする様な、吝なものではないのであります。漢の高祖は勝れた人であつて、臣下に對して、種々話をした事があります。韓信は豪い者で、將軍にすれば、攻むれば必ず取り、戦へば必ず勝つ、多々益々辨ずると云ふことは、我れ韓信に及ばず。謀を帷幄の中に廻らし、勝つことを千里の外に決することは、我れ張良に及ばず、後方勤務を續けて、將士に後顧の憂なからしむることは、我れ蕭何に如かずと言つた。それでは高祖は、何處が優れて居たかと云ふと、高祖は兵に將たる器ではない。能く將に將たるの器である。此の如き器をなすには、所謂清濁併せ呑むと云ふ雅量がなくてはならぬ。三人五人の一家族にしても、一家の長として、功を他人に分けて遣り、旨い物は、皆に先きに食はせるといふ雅量がなければ、家が治まらぬ。

此雅量ありて、始めて一家の長とも爲り、一社會の長とも爲り得るのであります。敢て天下の先きとならざるが故に、能く成器の長となる。斯う云ふことは自身に取りては修養となり、他人に取りては教訓となること、思ひます。それで此遜り……敢て天下の先きとならずと云ふ言に就いて、思ひ起すのは、愈曲園と云ふ人が著した『笑林新雅』と云ふ書物に、斯う云ふ話があります。題は「五官位を争ふ」と云ふので、或る時口が大變不平を訴へて「俺が毎日働いて、旨い物を食つて、體の血を拵え、肉とするから、人間が育つて行くのである。さう云ふ大切な役目を僚は有つて居るのに、鼻は何んだ、碌な仕事を爲すに、僚より一段上席を占めて居る、怪しからん」と言ひました。然うすると、鼻が言ふには「あんまり大きな事を言ふな。食ふから生きて居ると、大層恩に被せて居るが、俺が居つてこそ、これは香水の香り、之れが肴の焼ける匂ひ、之れは蕪が煮える匂ひと嗅ぎ分ける。若し俺がなかつたら、貴様はどんな物を食ふか分らぬ」と。扱鼻は口から言はれたところより、自ら氣附いて見ますと、自分の上に居る目が氣に懸る「目は俺より上席に居ながら、僚のやうに、仕事をして居らぬではないか、それに俺より何故高い處に居るか」と言つたら、目は「目で立派な働きをして居る、若し目が無かつたら東西も分らぬではないか、前後も分らぬではないか、後ろから誰れが来て横つ面を殴打るか分らぬ。又どんな危険な所に陥ち込むか分らぬ。目は小さいが人の心と心とが見える位に働いて居る、僚が上席を占めて居るからとて、然う不平を言ふには及ばぬではないか」と言つ

て、又目が考へて見ると、何うも眉毛が氣になります。「口や、鼻や、目は、相當に仕事をして居るが一番最上位を占めて居る眉は何んだ、甚だ無禮ではないか」と、其處で眉は考へた。眉は洵に謙遜で『成る程僚はお前達の様に仕事をして居らぬ、お前の言ふことはそれに違ひ無い、それでは上席を占めては濟まぬから、お前の下に行かう』と言つた。併し眉が目の下に著いて居たら、殆んど顔の形を爲さぬ、男か、女か、化物か、何か、更に分らぬ。斯う云ふ様なもので實は眉は仕事をして居らぬやうであるが、顔全體の配置を締めくくつて居るのであつて、隠れたる功があると云ふことが書いてあります。人間も然うだ。常に誠實を以て仕事をし、人に對して謙遜する心を有つて居らねばならぬ。彼の二宮尊徳の『推讓』といふ教なども、此處から出て來て居ると思ふ。善い事は、人に勸めて自分は謙遜する。それで始めて家庭の平和が保てる。社會に立てば、部下にそれ丈の仕事をさすことが能きるのであります。要するに人々實を寶として保たねばならぬのであります。性根玉でも、何んの玉でも、研げよ磨け、光りの出る迄とか、何んとか云ふ歌がありますが、實に其通りであつて、此寶は他から借りて持つて來ないでも、始めから身に有つて居ります。それを自身で琢磨するのであります。艱難汝を玉にすると云ふ詞がありますが、實に其通りであります。大いに琢磨の功を積んで其處で始めて大なる寶と爲るのであります。

無舌人の説法

瀧山住持の試験

禪の本體は、元來説明することができないものであります。其説明のできないところに向つて、自在に説いて往かうとするには。普通の舌では、却々説明はできない。それには無舌人の解語でなければならぬ。それは全體禪は背觸に涉ることを嫌ふからであります。觸れず、背かずに説いて往くといふのであるから、随分困難であります。「無門關」には、「香巖樹上の話」といふ則がありますが、其中に、香巖和尚云く、

『人の樹に上るが如し、口に樹枝を啣み、手に枝を攀ぢず、脚樹を踏まず、樹下に人有りて西來意を問はん、對へずんば即ち他の所問に違ひ、若し對へば又喪身失命せむ、正恁麼の時作麼生か對へん。』

無門和尚はこれに答へて、

「縦へ、懸河の辯有るも、惣に用不著、一大藏教を説き得るも、亦用不著、若し者裏に向つて對得著せば、従前の死路頭を活却し、従前の活路頭を死却せん。其れ或は未だ然らずして直ちに當來を待ちて、彌勤に問へ。」

と言つてゐます。實に斯くの如く背觸に涉らずして、説示するといふことは困難であります。故に背觸に涉らずして、而して消息を通ずるのは、無舌の人でなければならぬと言ふので、尋常一様の舌では能きませぬ。

瀉山の靈祐禪師は、百丈禪師の弟子でありますが、此人は瀉山といふ山を開いた有名な人であり、或る時司馬頭陀といふ人が、百丈禪師に向ひ、

「瀉山といふ山は、一千五百人位の善智識が住める所だ。」

といふと、百丈禪師が、

「そんな山なら、納が住まはうと思ふが何うぢや。」

と訊かれると、陀曰く、

「それは不可ませぬ、貴僧が住まはるゝ所ではない。」

「何ういふ理由で。」

「貴僧は、骨の人で、肉の人ではない。彼の山は全く肉山ですから、若し貴僧が住まはれたら、大

衆は恐らく千に満たない。」

「それでは納の會下の中に、瀉山に住むべきものがゐるか何うか。」

「それは分らぬ。一つ試験して見やう。」

と陀は言ひました。其時丁度花林の覺といふ人が、第一位であつたから、百丈禪師が侍者に命じて、覺を呼んで來させた。そして司馬頭陀に向ひ、

「それでは此人では何うか。」

と訊かれると、陀曰く、

「警咳一聲して、少し行け。」

と、花林言の如く數歩した。陀之れを見て、

「あれは駄目ぢや。」

と言つた。其處で百丈禪師は、更に瀉山を呼ばしめた。其時瀉山は、未だ典座をしてゐたが、陀一見して、

「當に是れ瀉山の主人である。」

と言つた。百丈禪師は、其夜瀉山を召して入室せしめ、至囑して言はるゝには、

「吾が化縁は、此に在り、瀉山の勝境は、汝當に之れに住むべし。吾が宗を嗣續して、廣く後學を

度せ。」

と叮嚀に囑せられた。其處で第一位にあるところの花首座が、之れを聞いて、

「忝くも私は上首である。然るに、瀉山に住持することができぬ。それに典座風情が何んで住持などが能きやう。」

と百丈禪師に抗議を申し込んだ。其處で百丈禪師曰く、

「それは、お前の言ふ通りである。敢て典座と限つた譯のものではない。それでは納が今一つ試験して見て、それに對して充分に答へることが能きものを遣ると爲やう。」

愈々百丈禪師が試験することに爲つて、問題を出すに至つた。ところが其試験問題が、頗る振つてゐます。禪師が試験問題として持ち出されたのは淨瓶でありました。

「呼んで淨瓶と爲せば觸れる。呼んで淨瓶と爲さざれば背く、汝喚んで甚麼とか作す。」

恚ういふ試験問題でありました。若し淨瓶だといへば觸れる。淨瓶でないといへば背く、之れを何んと解したものであらうか。すると一位の花林覺首座は、

「喚んで木椶と作すべからず。」

と答へた。木の椶とは言はれませぬぞといふ。木椶とは木履のことであるが、木履を著けて、尊宿の前に行立するものでないと言ふ、前言後言に及ばず、實に残念なことをした。ところが瀉山は、突如

其淨瓶を蹴倒して了つた。

「淨瓶夫れ何物ぞ。」

そんなもの私の眼に觸れないと言つた。其處で瀉山和尚が、此試験に及第して、瀉山に登り、庵を造り、座禪してゐました。食物としては、木の實などを食ひ、山を開きますと、それが天下の名山と爲り、一千五百人を容るゝやうに爲りました。それだから佛教には背觸に涉らずして、消息を通じなければならぬところがある。

舌頭骨なき底の人

背觸に涉らずといふことの例が、尙ほ一つある。支那に首山主といふ人があつた。此人が竹篋を持ち出して、

「呼んで竹篋と爲すか、呼んで竹篋と爲さざるか、若し之れを呼んで竹篋とすれば觸れる、それが竹篋でないとするれば背く、背觸に涉らず何にか消息を通ぜよ。」

と言つた。竹篋といつては、門外漢には解らぬであらうから、念の爲めに説明するが、これは宗師家の學人接待に用ゆる具で、長さ一尺五六寸、竹を以てへの字の形に作り、籐を巻き、多く漆で塗つて



ある。又弓を切りて代用せらるゝこともある。現今では用ゐらるゝことが少い。これは首山禪師頃から用ゐられたものであらうといふことである。さて首山主が持ち出した竹篋に就いて、その言句は、此處に口を開いて、説明の能きないものである。これを説明するには、何うしても無舌人にならねばならぬ。ところが無舌人に爲るには、容易なことではありませぬ。全體舌のない人は、世界に存在するであらうか。併し無舌人といふても、舌の無いことではなくて、所謂舌頭骨無き底の人を指すのであります。これを例せば、釋尊の説法は、無舌人の説法でありました。釋尊は、長い間、或る時は無とも説き、又或る時は、有とも説かれた。その言葉の上に、有無の語はあるけれども、語に語相がない。即ち釋尊は、活きた佛法を、死んだ言葉を以て、自由自在に説いて居られます。それが無舌人の解語であつて、決して言葉に、何にも意味はない。背觸に涉らずして、消息を通じてゐるのであります。全體言葉といふものは、頗る不自由なものであつて、有と言へば、有に偏し、無といへば、無に偏する。然るに意といふものは、洵に無限なるものであります。無限の意味を、有限の言葉で説明することは、成程一分の説明は能きるに違ひないが、其全部を説明することは能きませぬ。これに就いて、面白い喩へがあります。或る所に、生れながらの盲人があつた。人が八月十五夜の月は、殊の外冴えて見事だと稱するが、自分は盲目の悲しさに、月といふものは一體どんなものであるか分らない。其處で月はどんなものかと女房に尋ねた。女房はいろ／＼考へた末、金盃を持ち出して、月はこんなものだと言ふて聞かせました。これは月は鳴るといふ意味ではなく、其圓いといふことを示す爲めであつた。圓いのが月の全體といふことは能きませぬ。月は圓いばかりでなく、清涼なものであります。ところが金盃は、唯圓いといふだけのことで、清涼なることは示されませぬ。恰も言葉といふものは、それと同じことで、一部だけの話に止つてゐる。全體限りある言葉を以て、限りなき意を説き盡すことは、無舌人でなければ能きませぬ。有舌人の言葉は、言葉に骨があります。無舌人でなければ、禪を充分に説くことは能きませぬ。

およそ沙門の形と謂へば、十方の珠數を手に纏ひ、忍辱二諦の衣を着、罪障懺悔の袈裟をか
けてこそは、僧とは申すべけれ
(謡曲放下僧)

信は大慈大悲の心

信念は堅實鞏固

明治天皇陛下の御製に、

目に見えぬ神に向ひて耻ぢざるは

人の心のまことなりけり

といふ御和歌があるが、洵に畏れ多い御教訓で、吾々は悉く拜戴して居ります。何人にもまこと即ち信がなからねばなりません。信の一字は神にも通じ、又佛にも通じます。これあるが爲めに、國家社會は安らげ、世界は平和であります。淺草の觀音様、其他何處其處の神佛に多くの人が參詣して、祈を捧げてゐる状を見ると、一種の感懐が湧起します。これを一口に迷信なり、妄信なりと難する人がありますが、勿論其祈るところは、家内安全、息災延命、病氣平癒、諸願成就と、種々雑多である。けれども其願ふといふ心は、絶対的の信心であります。人と人との間に於ける信は、何れも相

對的のもので、絶対的のものではありません。父子、兄弟、朋友、皆相對的信であります。是等の間には何れも我執が存じ、邪念が存じます。親友でも互に信ずる程度は、絶対的ではありません。ところが神佛に對して祈願する一念は、毫も偽りがなく、天真流露、全心全身を捧げてゐます。即ち絶対であります。之れを迷妄として、一笑に附し去るが如きは、心なきことでもあります。淺草の觀音様や、其他の神佛を拜むのを見て、或る者は、之れを偶像崇拜と笑ひ、又迷信、妄信だと擯斥するかも知れぬ。けれども恚う排斥する當人も、既に一種の偶像崇拜者であることを知らずにある。其偶像は虚名といふ偶像、利慾といふ偶像、かゝる偶像を一心に崇拜してゐるものであります。滔々たる天下、悉く名聞の偶像を拜してゐます。豈に獨り下級の宗教のみを、偶像崇拜なり、迷信妄信なりとして、一笑に附することが能きませうか。信ずるといふ其真心の現はれは、これ真正なる心の表現であります。信念は火に入りても焼けず、水に入りても弱れずといふ堅實鞏固なる所に存じます。社會が平和に維持せられて往くのは、學問上に於ける智力の競争、軍備の競争が、原因を爲すのではなく、共に戮力能く種々の異分子が相集りて、共同生活を保つところに存じます。そして其平和を維持する眞原因は、これ真心の發露に由因するのであります。此心が轉じて博愛と爲り、慈悲と爲り、一切の道德と爲る。恚く相對的の信にしても、尙ほ其偉なることは斯くの如しであります。ところが納ども言ふ信は、無限に通ずる信仰、絶対に通ずる信仰であつて、佛と凡天と一如する信仰であります。勿論

人と人との間の信も、尊むべきものでありますが、必ず限界があります。其例話としては、昔曾參の母に、

『お前の子息の曾參さんが、人殺しをしましたよ。』

と或る人が告げました。ところが曾參の母は、深く曾參を信じておりましたし、曾參も又、母を深く信じておりました。それで母は其人殺しをしたといふことを毫も信じないで、

『妾の子息は、人を殺すやうな悪いことはしませぬ。』

と言つて取り合ひませんでした。ところが曾參が人殺しをしたといふことを告げるのが、三度に及ぶと、如何に吾が子を信じてゐた母も、若しやと心を動かし出して、疑ひを起したといふことであります。曾參母子の間でさえ、斯くの如しであります。これを思ひ見れば、相對的の信は、或る程度に至ると、其信の極度限度に達して、消え失せるものであります。セーキスピアの劇中のオセロに、其妻を信じて、毫も疑はざりしも、他の離間中傷屢々至るに従ひて、漸次疑心を生じ、遂に其讒言を信ずることに爲り、美しい妻を毒刃に屠つたが、後其真相を知つて、悔悟の情に堪へず、遂に自らも果て終つたといふ悲劇があります。

信仰的大光明

恚く相對的の信、親子、夫婦、兄弟、朋友間の信は、或る限度に達すれば、破壊されます。道德的の念は、或る程度までを保つけれども、決して永久不變ではない。或る人が、

『僚は盗みもせず、放火もせず、姦淫もせず、殺人もせぬから善からう。』

と言つて、昂然たる態度を示したといふことである。併しながら吾等の生命が、單に母胎から出て、棺に入るまでの一期であれば、又人類のみを世界と見れば、それでも可いかも知れぬ。けれども此道義は、人と人との間から外には適用されない。過去、現在、未來に及ぼす三世一貫の力はない。之れに反して、宗教はあらゆるものに通ずる。宗教は人にして神に通ずる。信は大慈大悲の心である。此偽りなき心が、神佛に交融するものであります。明治天皇陛下御製の『目に見えぬ神に向ひて耻ぢざるは、人の心のまことなりけり。』といふのは、畏れながら此處のことでありませぬ。偽りのなき心が、神明に通ずるといふ御製を拜し奉るのであります。斯くの如く、絶對信仰の基本からして、此現實世界が理想化即ち娑婆即 寂光淨土といふ信仰的大光明の状態が現はれる。信ずるの一念存すれば、此娑婆が寂光淨土といふことが能きる。此心あるが故に、煩惱ながらに道心になり、鐵を變じて金

と爲し得るのであります。煩惱即菩提、即ち煩惱を菩提の種とすることが能きる。田の草を採つて、其儘それを田の肥料にすることが能きるやうなものであります。佛教上の言葉で、悟りとか、大安心とか、大立命とかいふものであるが、凡そ活きたる信仰の眼を開いて見ると、此處に煩惱即菩提の光明を認められる。美麗な花の咲くものは、乾いた土地には生えず、汚土の圃中から生じて、花も咲けば、實も結びます。

月光は濁水にも映る

信を水に喩へた詩句がありません。それは、

菩提清凉月、畢竟現於空、衆生心水清、菩提影中現。

といふのであつて、水か、月か一つにして二つ、二つにして一つ、一つとも言へず、二つともつかず、佛心を此方に受取れば、信の一字に外ならぬ。尙ほ深刻に言へば、月影は濁つてゐる水にも映る。佛の心は、罪ある者にも、如何なる者にも、其影を宿すのであります。古人の和歌に、
世の中に悪るしと思ふものぞなき
罪ある身こそ猶はあはれなる

濁りたる水にも影を宿すかな

月の心の廣澤の池

といふのがありますが、此心地を能く言ひ表はしてあります。商工道德の上から見ると、吾邦の忠とか、孝とかは、徹底してゐるが、誤魔化しがあると思ふ。舊道德は狭いと思はれる。忠孝を傷けてゐる者がある。即ち忠孝の美德を有する人にして、商業上の不徳などを省みぬものがある。決して忠孝を傷けやうとするのではないが、深く考へぬから、恚ういこふとに爲るのであります。社會問題は、今後の問題である。所謂權利義務の觀念が盛んに爲り、貧富の懸隔が甚だしく爲り、地主對小作人、資本主對労働者等の難問題が、續出しやうが、現今は學問も、智識も普及的に爲つて來た。社會的に進んで來た。心持の異つた多數の人が、一緒に爲つてゐると難かしく爲ります。此間に於て、如何にして社會の平和を保つかといふに、之れ唯宗教的情操信を以てするより外はありません。此信が同情心とも爲り、慈悲心とも爲ります。此信があつて、家庭の平和も保たれ、社會の平和も維持せられます。恚く宗教的情操が、社會に遍満すれば、社會の心と爲つて、各方面各事業は活躍して、社會の幸福を享くことが能きます。

人生眞の樂み

四喜の詩句

衲が海外に渡つて、現實に感じたことは、不圖舊知の人などに出會すると、言葉に言はれぬ懐しい思ひがする。日本からの人なら、縱令舊知でなくとも、懐しい思ひがするが、舊知と爲ると、猶更其情に堪へられぬのであります。人は同じ人でありますけれども、他郷といふことが、妙に懷舊の温みを添ふる因縁と爲ります。古人の詩に、

久旱逢三初雨、他郷遇二舊知、洞房花燭夜、金榜題二名時

といふのががあるが、これは四喜を詠じたもので、雨は何時も雨で、特に少しでも續くと厭やになるが、それが久しき早に降ると、喜び禁ぜざるものであります。人生の樂しみも又そんな風で、狂歌の、

樂しみはうるしるに柱前に酒

氣の合ふた客摺鉢の音

と來ると、極めて簡易な樂しみである。又地位の高いのを矜りしたり、財産のあるのを喜んだり、名譽の重きを樂しみとしたり、學問の出來るのを無上の快としたりなどするものもあるが、是等も一種の樂しみに違ひないが、人間の慾望を基礎としてゐる快樂は、際限のないもので、一慾を遂げて、それで樂しんでゐる内に、又一つの慾望が起りまして、それを爲し遂げねば、今の樂しみも束の間で、却つて心配やら、苦勞の種子に爲るのであります。手を翻せば、樂しみ直ちに是れ苦しみと言はるか、何時も煩悶、懊惱絶えることがないのであります。シヨツペンハウエルといふ哲學者の言ふには、人間の慾望と快樂との關係は、丁度算術の上で言ふと、分母と分子の關係で、慾望が多くなればなる程、満足を充分に得ることが難かしいのである。恚く爲れば、樂しみを覺めて、苦を得るといふことに爲りまして、一生涯を轉輾反測の裡に暮らすやうに爲ります。何うしても人生眞の樂しみは、無所得心といふものがあると衲は思ふ。自分の心に、安心といふことがなくては、物に中心がないと同一で、彼方へ轉がり、此方へ轉がり、泥の中に埋れて了ふのです。

苦中に樂あり

能く古人の語を引き合ひに出すが、それには眞理があるからである。

『靜中の靜は眞靜にあらず、動處靜にし來りて、纔に是れ性天の眞境、樂處の樂しみは眞樂にあらず、苦中樂にし來りて、纔に心體の眞様を見る。』

といふことがあるが、深し味はうて可い語であります。動處の中から、手に入れた靜でなくては、眞成に靜の義を得ることはできません。又それと同じことで、苦しみの眞ツ最中からして得たところの樂しみでなくては、本當の樂しみとは、如何なるものか、充分に分らぬのであります。苦しみと、樂しみとは、元來相對的のものでありますから、樂しみと思ふことのみが續けば、樂しみも樂しみではありませぬ。毎日美味いものばかり食してゐては、貧乏人が毎日冷飯に、粗茶を食してゐるのと同じことであります。食道樂の人でも、偶には茶漬を食したならば、舌鼓を打つて、美味がることもありません。本當の樂しみ、苦樂の相對性に囚へられざる樂しみ、即ち絶對の樂しみとでもいふべき樂しみは、總てこんなことを離れた樂しみであります。換言すれば總ての苦樂を一と纏めにして、悉く之れを吾が精神の養成に使ひますところに、存することと思ひます。肉體の營養には、辛いもの、酸いもの、甘いもの、苦いものと種々のものを取り入れて、そして之れを自由に、且つ適宜に使ひこなしませぬ。其通りに吾等の心も、さまざまの境遇、逆とか、順とか、好とか、悪とかいふものゝ裡に、出入させて、そして之れを自由自在に、吾ものとして用ゐます。只必要とするは、一種の眼光を以てゐて、いろ／＼内から出たり、外から來たりする境遇を、自家樂籠中のものとして、使ふだけの力が

なくてはなりません。恚ういふ點から見て、人生を一部の書籍に喩へても可いかと思ふ。そして其書籍は、讀者の讀み方次第で、種々と解せられませう。即ち何事をも苦の眼で見るとやうな人なら、其書籍を苦であると解するであらう。又之れに反して、何にもかも樂觀せらるゝやうな讀者であるならば、其書籍の讀み方も、然うした方向に傾くは、言ふまでもありますまい。

面白い教訓

併し此處に、非凡の人物がありました。苦樂の中にゐながら、苦樂の束縛を受けないで、喜憂交々至る間に立つたり、座つたりして、而かも其流れに沈まぬやうな修養をしたとすれば、其人の主觀的生涯は、一種形容のしやうなき、餘裕といひませうか、樂しみと言ひませうか、何にかそんなものがあるやうに思はれます。或る人が古銘刀を手に入れましたところ、其人は、目に一丁字なく、刀の銘を讀むことができず、従つて何人の鍛えたものか分りませんでした。それで菩提所の住職を訪ひまして、刀の銘を讀んでくれと頼みました。すると住職は刀の銘を見て、

『波平行安。』

と讀みました。其人は變な刀鍛冶の名だと思ひまして、疑ひを起し、更に之れを村塾の漢學先生の所

へ持つて行つて見せました。すると漢學先生は、

『波平行安』

と讀みまして、

『大海を船で渡るに、波が平ならば、行くことが安い。』

と註釋さえ付け加へました。其處で其人は、愈々譯が分らなく爲りまして、今度は刀劍の鑑定家の所へ持つて行つて見せると、刀劍鑑定家は、睨と其銘を見て、

『これは波平行安の鍛えた銘刀だ。』

といひました。それで始めて合點が往つたといふことであります。これは一笑話に過ぎませぬが、面白い教訓だと思ひます。其文字から見れば、何れの讀み方にも誤りはありませぬが、何れも其讀み方を自己の所得によりて、判ぜんとするから、其眞實に達しなかつたのであります。

江城

春籠古寺澹濛々

野鳥如哀羅綺空

一脈芳魂呼不返

老僧閑掃落花紅

大安樂の境涯

眞の脱體現成

宇宙の本體本性は、全世界に充ち満ちて、森羅万象悉く其現はれでないものはありませぬ。吾が禪宗では、之れを『本來の面目』とか、『本地の風光』とか、或は『那一着』とか、『這箇』とか、種々の名目を附けてゐますが、要するに宇宙の實體其ものに名附けたものであります。去れば其禪機の現はるゝところは、月と輝き、星と照り、山と爲りては高く聳え、水と爲りては長く流れ、花と咲き、鳥と諠ひ、紅葉と照り、蝶と舞ひ、風と爲つては颯々と吹き、雨と爲つては蕭々と降り、少しも蔽ひ隠すことなく、赤裸々、露堂々として脱體現成して居るのであります。此禪機を眞個に手に入れ、それを自由自在にすることが能きるやうに爲つた境涯を、佛と名付け、或は祖とも名付けるのであります。そして此機用は、如何なる人も具有せぬはないけれども、それを手に入れるに容易ではありませぬ。有つてゐるから、何時でも自在に働かせることが能きさうに思はれるが、所謂寶の持ち腐れで、



それを知らずにあるのであります。洵に之れを自知するには、身命を惜しまぬ修養が要るのです。これが禪の修行であります。昔支那に馬大師といふ人が居られた。此人は達磨大師八世の法孫で、江西の馬祖山に居られた道一禪師のことでもあります。漢州什邡縣の人で、幼にして資州の唐和尚によりて出家落髮し、渝州圓律師に就いて受具し、唐の開元年中衡嶽山中で禪定を修せられ、後大曆年中鐘陵の開元寺に住し、これから盛んに四來の雲衲を接し、宗風を擧揚された。唐の徳宗帝の貞元四年建昌の石門山に登り、林中を經行しつゝ、其洞壑の平坦なるを見て、侍者に向ひ、

『吾れの朽質當に來月に於て、茲地に歸すべし。』

と言ひ終つて歸り、同年二月一日沐浴し、結跏して示寂されました。弟子には百丈、大梅、鹽官、南泉等の英傑百三十有餘人の多きあつて、南嶽下の宗風は、實に師に至りて、天下を風靡したのであります。此馬大師は容貌奇異、牛の如くに行き、虎の如くに視る。舌を延ぶるに鼻を過ぐと傳にあるから、餘程風采の變つた人であつたらしい。

百丈和尚の大悟

此馬大師が或る時、弟子の百丈和尚を連れて、郊外散歩をし、野鴨子の飛び去るのを見て、それに

關して一場の商量を試みられた。

『是れ什麼ぞ。』

オイ百丈和尚、あそこに飛んで行くのは何んだらうといふ意味であります。すると百丈和尚は、馬大師から恚う言はれて、ひよいと見ると野鴨子であるから

『野鴨子』

と正直に答へた。馬大師は洵に親切な人であるから、海山の思ひを以て、

『什麼の處にか去る。』

と言はれた。すると百丈和尚は

『過ぎ去れり。』

と答へた。此處で野鴨子を取り遁がしては、又何んの日か、野鴨子に相見することが圖り難い。其處で馬大師は愈々親切でありまして、突如百丈の鼻頭を捻つた。百丈和尚は、キユツと鼻柱を捻られたものだから、遂に無始劫來の眠りから覺め來つて、思はず

『あいたく』

と忍痛の聲を發しました。其處で馬大師曰く

『何んぞ曾て飛び去らん。』

いや野鴨子は飛び去らぬぞ。お前は野鴨子とばかり向ふのみ見てゐるから不可ぬ。鼻柱を捻ぢられて痛いといふそれは仰も何物だ。それこそ眞の汝の野鴨子ではないか。自己の野鴨子を閉却せず、實參實究して、それを取り遁がさぬやうに用心しろ。馬大師の肚を割つて見れば、こんなものかも知れない。此一言に依つて、百丈和尚は大悟することができました。其翌日に爲つて、馬大師が法堂に上り、説法されんとした。大衆が次第に集つて来たところで、百丈和尚は何んと思つたか。馬大師の座るべき拜席を、クル〜と巻いて、片付けて了つた。説法する爲めに、設けられた拜席を取り去られたから、馬大師は自分の居間に還つて了つた。そして百丈和尚に問ふて言はれるには、

「偶々衲が上堂して、説法しやうとしたのに、何故説法もしない前から、拜席を巻いて了つたのか。」

百丈和尚答へて曰く、

「いやはや、昨日和尚の爲めに、鼻捻られて、痛いの何んのツて。」

實に雨下りて、地上潤ふとでも言ふべき大丈夫な答語であります。馬大師曰く

「汝昨日、什麼の處に向つてか心を留めし。」

馬大師は何處までも、正直に恚う問はれます。百丈和尚曰く

「今日鼻孔又痛ます。」

問話に取り合はず、道理もなく、眞直に言つた。馬大師曰く、

「汝深く今日のことを知る。」

恚う言はれたので、百丈和尚は感慨の情に堪へなかつたものか知らぬが、侍者寮に歸つて大聲で泣き出しました。すると同侍の雲衲問ふて曰く、

「儂哭して什麼をか作す。」

百丈和尚の泣いたのは、此侍者に不審を起させて引き入れる爲めでありました。果して此僧は、其釣りに引ツかゝつて来た。百丈和尚曰く、

「儂去つて和尚に問へ。」

と、此侍者にも、自分の知つた境涯を知らせやうとした。其處で侍者は馬大師の室に入つて問ふた。すると馬大師は、

「儂去つて他に問取せよ。」

と言はれた。外で聞いて見るといふことで、馬大師も又此僧を引き入れやうと努めて居られる。侍者は寮に歸つて来て、百丈和尚に問ひました。すると、百丈和尚は何んと思ふたか、大口を開いて、

「ウワツハ、」

と呵々大笑した。何も知らぬ郵便配達のやうな男だと、思ふての笑ひだつたかも知れぬ。



「爾偶々來てり哭し、而して今は什麼としてか笑ふ。」
侍者は未だ氣が付かずにて、恚う言つた。百丈和尚曰く、
「我れ偶々來りて哭し、今却つて笑ふ。」

先きには哭し今は笑つたまでだ。此百丈和尚の境涯は、所謂百花春到りて、誰が爲めに開くといふやうな實に洒々落落としたもので、何等の取捨憎愛の念はないのであります。そして此境涯は、實に禪徒の本領とするところではなければなりません。

馬大師といひ、百丈和尚といひ、其一舉手一投足悉く天地の大道に合致してゐる。無念無作にして、既に斯くの如くである。別に注意を用ゐずして、思ひのまゝに立ち振るまうても、それが其儘に法性に順じ、法本に背かないのでありますから、其所懷は洞然として明白で、恰も天馬の空をかけるが如く、如何にも心持が良い。隨所に蓋天蓋地し、順境にありても、逆境に處しても更に動じない。これが洵の大安樂の境涯であります。

肘白き僧のかりねや宵の春

燕村

世尊拈華迦葉微笑

歴史上の禪の始め

佛教には種々の宗派がありまして、大乘、小乗の區別から、華嚴とか、三論とか、淨土とか、法相とか、天台とか何んとか、かとかいひまして、現在の所、日本だけでも、十二三の宗派があります。其中に於て、禪宗のみは、他の宗派と、其趣を異にしてゐます。それは、何れの點なりやと言へば「直指人心、見性成佛、不立文字、教外別傳」これでありませぬ。他の宗派には、それ／＼所依の經典といふものがあつて、日蓮宗ならば『法華經』『淨土の宗旨』ならば『觀無量壽經』とか『阿彌陀經』とかいひまして、之れを信仰の基礎的經文としてあります。ところが禪宗には、そんな文字上の所依はありません。達磨大師は「楞伽經」を傳へたり、又支那に於ける禪宗第六代目の大鑑慧能大師は、「金剛經」に據りて、開悟の機を起したなど言ひますけれども、是等の經典は、必ずしも禪宗の基礎とは爲つて居りませぬ。即ち是等の經典がなくとも、禪の旨たるや、歴然として存してゐるのであります。

「昔佛在靈山會上拈一枝花波羅華示衆。時八萬人天罔措。獨迦葉尊者破顏微笑。佛曰。我有正法眼藏。涅槃妙心。實相無相。微妙之法門。付囑摩訶迦葉。」

これは禪門にいふところの『拈華微笑』の一則でありまして、歴史上から見れば、禪宗の始まりは、これに存しまして、又宗旨上から見ましても、吾が佛心正宗の根源は、此處にあるのであります。それで禪宗といふものは、釋迦一代の説法、四十九年間に説かれました五千四十餘卷といふもの以外に、別に心よりして心に傳へましたといふので、これが『教外別傳』であります。故に文字なるものを、少しも立てませず、人々の心性を直ちに指示して、一度之れを徹見せしめて、此處に成佛の本懐を遂げしめんといふのであります。去れば吾が禪宗の本旨より言ひますれば、所謂實際理致、一塵一法をも立せずといふのであります。佛の教だとか、祖師の言句だとか言ふても、只是れ驢を繋ぐの朽椀子、心性を見たとか、道諦に悟入したとか言ふても、これも矢張破れ家の閑家具と見做すのであります。即ち禪門の一本槍を振り廻した所では、『本來無一物』と喝破するより外はないのであります。併しながら、これは所謂奪つていふたところ、即ち主客とか、物我とかいふものを、悉く一棒の下に、打ち砕いた所から言ふたのであります。之れに反して與へた所、即ち何もかも存在を許した所から見ますると、彼の釋迦牟尼が、其一代四十九年を通じて、横説堅説されたる經文五千四十餘卷、又彼の

所謂八萬四千の法門は言ふまでもなく、それより諸子百家の書物、新舊の兩聖書、マホメットのコーラン、アリストートル、プラトンの哲學書、但謡俗歌の末に至るまで、何れも是れ『教外別傳』の妙旨を説かざるはなく、『見性成佛』の聖諦第一義を傳へざるはないのであります。故に昔の人も『魚言細語皆是第一義に歸す。』と言ひました。

禪は到る所にあり

恁くの如く、廣い大きな眼を開いて見ますと、吾が禪宗の主旨は、必ずしも一派の名を付けた宗旨の上にのみ限られたものではありませぬ。各派の佛敎はいふまでもなく、基督教にも、回教にも、儒敎にも、道敎にも、皆それ／＼の禪があるのであります。否なそれだけではありませぬ。農には農禪あり、商には商禪あり、政治には政治禪あり、軍人には軍人禪があるのであります。畢竟禪とは心であります。心ある所には、必ず禪ありといふて可い。『三界唯一心、心外無別法』と、古人も言ひましたが、其通りで、宇宙の森羅萬象は、皆之れを一心の裡に收めて了ふことが能きます。佛といひ、神といひ、天といひ、理といふも、皆此心の別名でありまして、吾等若し一度此心の底に徹しますと、萬物の理由が、悉く鏡に寫つたやうに見え透るのであります。之れを哲學的に、絶對界の消

息と言ふても可く、此消息に觸れた所より言へば、主觀といふものも、客觀といふものも、心といふ其物もないのであります。前に掲げた『拈華微笑』の公案も、此處から見ねばなりません。佛が一日靈山といふ所で、大衆を集め、會に臨んで居られた時、大梵天王が参りまして、一枝の金波羅華といふ花を献じました。そして佛に一場の説法を頼みますと、佛は何にも言はずに、花を拈じて、大衆に示されました。恚く拈じ出された其一本の金波羅華、這裡には何んの消息があるものとしませうか。佛は心とも、神とも、妙理とも、玄旨とも、何んとも説き始めませぬ。只是れ一本の花であります。此上に何等の説を加へて、これが佛法だとか、禪理だとか、何んだとか言ふたら、それは所謂頭の上にも又頭を加へ、屋上に又屋根を重ねるといふもので、禪宗の旨は見失はれて了ふのであります。一本の花であります。本の花でありますが、これは必ずしも花には限りませぬ。一握の扇子でも可ければ、一本の指でも可いのであります。何れにしても、取り出された所に於て、長いとか、短いとか、四角とか、圓いとか美しいとか、醜いとか、良いとか、悪いとかいふ種々の差等の比較すべきもの、相對の安排すべきものがありませうか。只是れ一枝の花、只是れ一本の指、哲理が高尙幽玄だといひましても、文章が巧妙勝絶だといひましても、總て是れ用不着、何んと理解のつけやううもありませぬ。有言が可いかといふても、それも當りませぬ。それでは默然として無言が可いかと言ふても、これも又當りませぬ。『無理會の所に向ひて、須く究め來り、究め去るべし。』

と古人も言ひましたが、其通りで、是非一度有無を離した所に往き當りまして、そして忽然大悟するところがなくてはなりません。

以信傳心の妙

禪は所謂直下に會するのであります。彼れ是れの理窟をつけて、そして後、點頭するのではありませぬ。其處で佛が其花を拈出しますと、其會場に集りました大衆の中で、其意を會するものが、誰れもありませんでした。只一人の迦葉尊者、十大弟子の第一たる迦葉尊者のみが破顔微笑しました。佛の拈華と、迦葉の微笑との間には、何等の議論も、何等の説明もありませぬ。これが恚うで、あれが然うで、それで這麼ことに爲るのだと言ふやうな論理上の取引は、何にもありません。佛は花を取り出す、迦葉はニタリと笑ふ、禪宗の妙は此處に盡きたのであります。『心以傳心』の妙、『教外別傳』の妙といふのは、此處にあるのであります。是れ以外に何やかや言ふたりするのは蛇足であります。佛が

『我れに正法眼藏がある』

とか、ないとかと言はれたのは、叮嚀過ぎて、遠慮のないところを言へば、要らぬ御世話ちやと言ふ

ても可いのであります。佛は迦葉に、何にも手渡しませぬ。迦葉も又何等の秘傳をも受けませぬ。俱胝和尚のことは、既に説きましたから、此處には詳しく説きませぬが、「俱胝一指の禪」といふて、何んと尋ねられても、一本の指を立てたといふことで、之れも不傳の傳を悟らしめんとの意に外ならぬのであります。又趙州和尚は「無」といふことを唱へまして、禪の妙旨を會せしめんと努めました。又日本の白隱禪師は、片手を出して、

『さあ此聲を聞いて来い。』

と言ひました。こんなことは總て論理法の規則を超越した所からして、我が心の妙に悟入せしめんと親切から出て來るのであります。畢竟人々の眞參實證にあることで、それでは如何にして實證し、直下に會しませうか、世尊拈華、迦葉微笑であります。

元 輔

ます鏡ふたゝび世にやくもるとて

ちりをいでぬと聞くは誠か

本領を會得せよ

正師を見るが大切

何事も他人に相談は要らないと、獨り合點で、物事を定める人があるが、吾が禪門では最も之れを嫌ひます。免角人間の習癖として、獨斷に傾きたがる。獨斷も常理に叶つてゐれば可いけれども、多くは自分勝手の判斷に陥つて了ふ。吾が禪門では、此獨斷を嫌ひ、獨り悟りといふことを斷じて許さない。廣く古聖先哲の教訓によつて研究を積み、工夫に工夫を重ね、正師の證明を得ることに依つて初めて見性悟道したと言ひ得るのであります。能化の人師から見れば、恰も良醫の彼の寸草を拈じて、萬病の靈藥を打出する如く、一々不可思議なる法藥でないものはない。併しながら初心の學徒に至りては、法を擇ぶの眼を具せざるのみでなく、行脚の正眼も定まつてゐないから、兎角邪路に走り易いので、それが一步を誤れば、臆て千里の相違ともなれば、能く注意しなければならぬ。先づ初心の禪者は、先輩の施すところ、先輩の示すところに従ふて、之れを學ぶやうにしなければならぬ。そ

れには其正師家に依りて、人と爲りが違ふて、學人を接するに急なるもあれば、緩なるもあります。或は棒喝を行するもあれば、拂拳を弄するもあるのです。だから學人は、深く此點に注意して參禪するやうにせねばならぬ。古來からの例を擧ぐれば、卍山和尚が、月舟老人に參するや、初めて相見の時、月舟老人が座具を逆さにかけて。卍山和尚が之を見て、老人の家風だと思ひ、自分も又座具を逆さにかけて相見したといふことであります。又黃阿羅漢を求むれば、蒲團の四隅を指し、之れを信從して、四果を證した淳朴な學者があつた。然るに現今では、愆くの如き熱心な參禪者はなく、多くは初心の時から、多くの年月を経、知らず識らずの間に、師家の風容やら、言語までも、心田に印象して、其善惡を分つことが能きぬやうな状態を呈することが屢である。去れば初心の者は、先づ初めに正師を見ることが大切であります。ところが正師には却々値ふことが困難である。だから『學道用心集』にも、

『行道は導師の正と邪とに依るべきか、機は良材の如く、師は工匠に似たり、たとひ良材たりと雖も、良工を得ざれば、奇麗未だ彰れず、たとひ曲木と雖も、若し好手に遇はゞ、妙巧忽ち現はる師の正邪に隨つて、悟りの眞偽あり、之れを以て曉るべし。』

とある如く正師に逢ふことは、頗る困難であります。だから若し正師に逢ふたならば、難値難遇の思ひに住して、參禪しなければならぬ。正眼の師であるならば、それか女人であらうと、假令三歳の童子

子、七歳の女流であつても、それを師家と仰いで、爾來の修養を積んで往くべきである。そして其師に就いたならば、絶対に其師に服從して如何なる人と爲りに逢ふても、苦痛の思ひをしたり、憤恨の念を生じてはならぬ。唯無常の火の、諸の世界を焼くことを念じて、早く自度を求めなければならぬ。

參禪の目的

白隱禪師が、正受老人に參禪した時、何んと言ふても老人から、

「此穴ぐら佛法」

と怒鳴られて、匆ねられました。遂には室に入つて、見所を呈せぬ内から、穴ぐら佛法を浴びせかけられる。甚しきに至りては、敷居を跨がぬ先きから、此穴ぐら佛法を喰はされる。其處で有繋の白隠も困り果て、下山の志を起したのは、幾度であつたか知れぬ。けれども這處ことで爲らぬと自奮し、南泉和尚の遷化の話などを參考にして、老人の室に入つて、熱心に見所を呈したが、何うしても印可しない。果ては老人から、高い縁下に叩き落された。白隱愈々悶々の情に堪へなかつた。或る時白隠が、或る老婆の家の前に、茫然と立つた。すると老婆が、

『何も與るものはないから、他へ往け。』
と慳貪に言ふた。併し道を得るに熱心に爲つてゐる白隠は、老婆の此慳貪な言葉が耳に入らず、尙ほ茫然としてゐると老婆は

『此間抜け坊主、何を間誤々々して居やがる。』
と突如竹箒で叩いた。其瞬間白隠は豁然として大悟しました。其處で白隠は大いに喜び、庵に歸り、未だ門を入らぬ先きから、早くも正受老人は、それを認め、

『其處だ。其處だ』
といひ、印可を與へたのであります。苟くも道を志して、師家へ参じたならば、白隠禪師の如き熱心がなからねばなりません。

参禪の目的は、何のであるかといふに、それは言ふまでもなく、見性するにあります。昔印宗法師といふ人が、六祖慧能大師に問ふて曰く、

『五祖弘忍大師の正法は、如何んか指受するや。』
と、六祖大師答へて曰く

『唯佛性を論じて、禪定解脱を論ぜず、無漏無爲なり。』
と、又問ふ、

『何故に禪定解脱を論ぜざるや。』
六祖曰く、

『是れ二法たり。是れ佛法にあらず。佛法は不二の法なり。』
と。又越前の永平寺の開祖道元禪師は、

『我黨宿殖般若の種子に酬いて、殊勝最上の單位に値ふて修習することを得たり。』
と言ふてゐる。殊勝最上の單位とは、何のであるかといふに、これは所謂見性を指したものに外ならぬ。『宗門無盡燈論』にも、

『大勇猛の心を奮發し、明了に佛性を見徹して、普ねく性中差別の法門を窮めて、掌上を見るが如く、而して後に向上の些子を提持し、法窟の爪牙を獲得して、無碍自在に一切を度脱し、生々世々菩薩の行を行じて、衆生を盡さずんば、終に退心なき、是れを一佛乘と謂ひ、又は實大乘と謂ふ、又は根本最上乘一切智乘と謂ひ、是れを究竟眞實解脱と名づけ、是れを菩薩摩訶薩と名づく、豈に是れ大丈夫兒の能事にあらずや。』
と言ふてある。座禪が見性成佛に、目的を置くこと、之れに依りても知るべきであります。

道昭の化蹟

見性の功德は、刹那に於ても、六度萬行を具足して、不足なることがない。これが故に水の源が深ければ、其流れも従つて遠いのであります。澤が廣ければ、魚又大であります。之れに就いて二三の例を擧ぐるが、其勝蹟は古來澤山に存在するのであります。

和州元興寺沙門道昭が、渡海の勅命を奉じ、遣唐使山中長冉に従ふて、唐に渡りました。そして長安に至り、弘福寺玄奘三藏に調した。慈恩等の諸師と同社枯杭した。或る日玄奘語つて曰く、

『教相は繁冗にして勞多く、功少し。禪を學ぶには如くはなし。此宗は微妙なり。汝當に此法を承けて東域に傳ふべし。』

と、道昭此教示に従ふて參禪し、次いで證悟するを得ました。玄奘指すに相州隆化寺の慧滿禪師を以てした。其處で道昭が見えると、慧滿禪師鄭重に開示して曰く、

『先師僧那會て言ふ、昔達磨大師楞伽經を以て、二祖に付して曰く、吾れ震旦所有の經を見るに唯此四卷以て心を印すべしと、汝國に歸りて衆を度せば、當に所憑となすべし。』

と。道昭歸朝の後、此士始めて楞伽の五法、三自性、八識、二無我の説を聞くことができた。元興寺

の東南隅に、禪院を構へ、終日定座し、國人崇信して、禪を學ぶもの頗る多く爲つた。道昭が參禪する毎に、或は三日に一度起ち、或は七日にして一殮するを例としました。又夜分には、齒牙から光りを放ちて、經を誦したといふことであります。道昭又諸州に遊び、利濟を勤め、或は義井を鑿ち、或は渡船を造り、或は橋梁を架し、化蹟殆んど遍からざるはなかつた。實に愆くの如きは、功德力、宏大無邊と言はなければならぬ。

關山國師の勝蹟

關山無相大師は、大燈國師から傳法されて後、濃州伊深の山中に長養し、田夫野人と伍し、若し其徳の煥發するや、王公に請せらるゝも赴かず、七度の請を以て、始めて其花園に法幢を建立した。其家風としては、打座を専らにして、化儀の法は用ゐず、終に薪炭を盡くして炊ぐにも由なく、莫臺もなく、雨漏り、縁落ちるも、平然として願みるところがなかつた。時の花形であつた七朝の帝師たる夢窓國師をして、末代予が門下は、關山の法に歸するに至ると、歎美の聲を發せしめ、以て宗綱を維持した。果せるかな、彼の二十四流は二十二迄絶えて、其蹤跡がないけれども、吾邦禪海の波濤は、過半關山の一派に獨占せられました。關山國師の如きは、實に其見性悟道の徹底せる上に於て、好個の



勝鬪であると言はざるを得ませぬ。又道元禪師は、支那に學びて、而かも空手にして還郷し、東山の白雲を伴侶とし、深草の夜雨寂として響く知音に、折脚 鑑内に憐れむべきの乾坤を煮て、風雨霜雪を凌ぐこと幾歳、其間に於て、獎公を始め、幾多南都北嶺の伏虎臥龍を接待し、道譽は帝都に冠たるものがあつた。續いて越の山中に入りて、參玄の高士を接した。或る時衆に示して曰く「夫れ學道の者は道心を先と爲す。參玄の高士頭を當山に集む。山遠く谷深くして、至ること容易ならず。海に航して來り、山に梯して到る。道心を履むに非ずんば、到り難きの田地なり。米白の由來糟糠先づ去る、箇の孤絶の境、好辯道の所なり。但恨む主人もと相待することの少きことを然かも是の如しと雖も、溪は乃ち晝聲夜聲、便宜に雲水に落ち、山は即 春色 秋色便宜に搬柴に積たり。且つ 希くは雲水道を以て念とせよ。」

此金句は實に吾等禪徒の深く味ふべきものである。眞個に見性悟道せるの鐵漢でなければ、到底斯くの如きの語句は、能き得るものではない。更に禪師は、紫衣を高閣に安んじ、祿券を捲却して、床下三尺の土を捨つるが如き、聖中の聖にして、眞に思量の外にありと雖も、結局は禪の本面目を嚴持したる全精神に外なるまいと思ふ。古の師匠と稱せられるやうな人は、皆斯くの如くの修行を積んで居られます。併しながら古人と今人とは、時代を異にして居り、且つ人情の上に於ても、相違あるのでありますから、冬の毛を重ね、夏の葛を着るが如く轉じなければならぬのも、又已むを得ぬこ

と、言はなければならぬ。それであるから講演するのも不可ではない。説教するのも又咎むべきではない。然れども座禪修行の根本精神は、斷じて誤つてはならない。然るに現今の状態を見れば、恰も樹根を培養しないで、徒に斧鉞を加へて、枝條を保育し、其開花を見んとするが如きものがある。若し斯ることを以て、禪の本領と誤解するやうに爲つては、禪の眞髓と相距るのみではなく、寧ろ禪を毒するものと言はなければなりません。苟くも野狐禪を以て、満足せむとするの人は止む、若し眞に禪の本領を會得し、本地の風光現前を希はんとするの士は、宜しく先哲の蹤跡を尋ねて、頭燃の修養を勵んで貰ひたいと思ひます。

下 道

あな尊と生れながらに何もかも

しつた太子と申す御佛

自己に克て

克念も克己も同一

吾々が精神を修養するに、種々の方法がありますが、之れを大別すると、大體三つと爲ります。一に曰く情的修養、二に曰く智的修養、三に曰く意的修養、是れであります。さて王陽明の言に、

『見聞覚知は外賊なり。情慾意識は内賊なり、只能く主人翁惺々不昧にして、獨り中堂に座する時は、賊便ち化して家人となる。』

といふことがあるが、これは陽明が、克己の二字に對する註脚と見ても可い。克己といふのは、解釋するまでもなく、己れに克つといふ意であります。而して己れといふのは、自分のこと、即ち私のこと、他人といふものを向ふに廻はして、己れのみといふ自分のことでもあります。此克己こそ、即ち意的修養に屬するのであります。孔子は

『己れに克つて、禮に復へる。』

と言ひましたが、其所謂禮といふは、其中に侵すべからざる剛健なる精神を含んでゐることと思ひます。又『書經』の中に、

『惟聖も念ふこと罔ければ狂となり、惟狂も克く念へば聖となる。』

といふことがあるが、爰に克念といふは、即ち己れに克つといふ意に外ならぬのであります。只一口に己れに克つといへば、それ程難事ではないやうに思はれますが、能く之れを考へて、實行の上にはさうとすると、却々容易な事ではない。其處で己れといふのは、人慾の私でありまして、其克己といふのを換言すれば、自己の主人公を知るといふことに歸着するのであります。或は之れを本心佛性、宇宙の本體、若しくは實在などいふても可い。併し其名づくる所は千差萬別でも、其實體は何れも同一のものを指すのであります。身體を活きたまふ捉へて、自由自在に使用ひ得るやうに爲ればそれで修養の目的は達せられたといふても可い。若し此意味に徹底せぬ修養ならば、其修養は甚だ薄弱なる根底の上に立つものと言ふべきです。孔子の修養法とでもいひますれば、明德とか、至誠とかいふことを根本として居ります。そして孟子は、之れを浩然の氣といひました。又希臘時代に起りまして、羅馬あたりで頗る勢ひのありましたストア學派などは、一切萬境に對して、吾が精神を動ぜずといふことを以て、最も緊要なる修養の條件として居ります。此精神は、實に此學派の依りて立つ所といひませうか、今其意義を解しますれば、若し吾等にして常に自己に主人公たることを得るならば

其時は即ち萬物の上に、總て主人たるを得る時節であるといふのでありませう。又孟子の言ひまするには、『學問の道は他なし、其放心を求むるにあり』とか、『又萬物皆吾れに備はる、己れにかへして誠あらば、樂みこれより大なるはなし。』とあります。是等は何れも修養緊要の所を指し示したものと云はねばなりません。

心は誘惑の根源

昔から諸賢哲が、それ／＼修養に努めたことは、歴史の上に明かなるところであります。そして何れも皆學究的ではありません。そして悉く實行的でないのはありません。朱子や、程明道といふ支那の大儒も、皆靜座して、自己の修養に努めて居ります。陸象山は『天地萬物は皆吾心の註脚である』といひ、王陽明は『ものを明かにして、之れを得ざれば、之れを心に求めよ。』と言ひました。而して王陽明は、其主義を實行する方法として、常に靜座工夫を専らとしたといふことでもあります。洵に此心といふものを除いて了ひますれば、一切の見聞覺知、何れも何等の意義のないこととなります。物事を見聞し、覺知せんとするには、是非心といふやうなものゝ存在を許してかゝらねばなりません。恚く心は吾等の生活の意義を爲す理由であります。此心といふのが又一切誘惑の根源と爲るのであ

ります。そして一切の懷疑も、一切の煩悶も、又此處から起り來るのであります。それで修養の眞意義といふは、此心即ち吾が主人公を知るところにあるのであります。恚くの如くでありますから、吾等にしても此主人公を忘却したるといふやうなことがあれば、吾等は直ちに外界からは、見聞覺知といふ賊類の侵入を受けやうし、内界からは情慾意識といふ魔物の迫害に責め苦しめらるゝことは、疑ひのないところでもあります。然るに之れに反して、吾等の主人公にして、能く慍々として味まざるることがなく、不動の境に大座して居れば、内外の魔賊も、皆悉く其態度を一變して、吾が忠實なる家人と爲ることであらう。恚く敵が、直ちに味方と爲るのは、吾れに克己修養の大決心があるか、ないかに依りて分れるのであります。何事も考へず、茫然と其日を送つて行く時は、五十年の一生涯は、自分の生涯とならずして、只外から來たり、内から出たりする無意義の刺戟衝動の連續と爲るに過ぎぬことゝ思ひます。恚く他人のものゝ爲りましては、男子一生の恥と、衲は思ふてゐる。趙洲和尚といふ支那唐代の名僧の言に、

『汝等は十二時中に使ひ得らる、吾は只十二時中を使ひ得たり。』

とあります。これは克己修養の力に依るのであつて、修養の功を積み、然ういふ所に至らぬと役に立たぬ。これは又屢々例を惹くことだが、瑞巖の彦禪師は、毎日靜座して、自己を修養しました。そして自ら呼んで主人公といひ、自ら答へて諾、慍々著といひました。それで其主人公の修養に努めた

のでありました。吾等若し注意して、靜かに自己の周圍を觀察しますと、一切の萬物は、悉く自己の靈性を磨くの因縁とならぬものはないのであります。去れば一事一物も、直ちに之れを修養の資料に使ふことが能きると信じてゐます。

境と同化せよ

修養をするには、必ずしも高尚幽玄なる哲理を研究せねばならぬといふことはない。哲學などといふものは、智的發達には必要でもあらうが、人格の修養、意志の鍛錬、克己、修行などには、之れを深く修めて居なければならぬといふことはない。昔から哲學者といつても、必ず大人物といふ譯には往かぬ。人間の仕上げには、智よりも意の方が大切でありまして、此意的教育を充分に施して、頭腦の人よりも、本當の肚の人を作ることが、何よりも必要だと思ふ。殊に現今の大勢から言ふと、誰れも彼れも、智慧とか、學問とか、科學とか、西洋の文明とかいひまして、只浮調子にのみ爲つてゐるが、それでは主人公の健在が疑はれるやうに爲りはしないかと、衲は竊かに心配してゐる。何んでもかんでも、克己の修行を深く積んで、之れを人生の必要事と心得、充分の力を加へねばならぬ。往昔洞山禪師といふ人の所へ、或る僧が來て、尋ねるには、

「人間世界は、寒さがあつたり、暑さがあつたりして困りますが、何うして之れを避けたことせう。」

と、すると洞山禪師は、

「そんなに困るなら、何故寒さもなく、暑さもない所へ往くことにせぬか。」

と言はれた。僧は再び

「そんな所は、何處にありませうか。」

と問ふた。禪師は更に

「寒い時は、吾れも人も、ブル／＼慄へ、暑い時は吾れも人も汗ダク／＼ぢや。」

と言はれた。之れは外の意義ではない。寒い時は、其寒さと自己とを同化させ、暑い時は、其暑さと自己を同化させて往けとの義であります。因みに洞山禪師といふ同名の人は三人あります。其一人は曹洞の一派を成し、勅して悟本大師と諡された洞山良价禪師、又其一人は、崇慧大師と號し、雲門文偃の法嗣で、襄州洞山に於て法幢を建てたところの、洞山守初禪師で、即ち「麻三斤」の話と稱して、人の知る名高い人でありませう。尚ほ一人の洞山禪師は、前記の洞山良价禪師に従ひ參究し、洞山第二世と爲り、世に中洞山と稱せらるゝ人でありませう。衲が例話として出したのは「麻三斤」の洞山守初即ち崇慧禪師のことであるから、念の爲めに言ふて置く。さて洞山禪師の言はれた同化作用は、敢て

寒さと暑さとのことにのみ限りませぬ。何んでもかでも、皆そんなやうに遣つて往くと、人生の苦憂悲惱乃至歡樂、愉快など交々至るといふ時に際しても、一々之れを同化して往くと、常に主人公本来の活躍の上に、自在を得るのであります。之れが即ち克己であります。意力の剛健なることを得るも、此時節が到来してからの話であります。古人の詩に、

『雪後始看松柏操、事難方見大丈夫心』

とありまして、何んでも一度は、重い雪を背負ふて見ねばなりません。

覺性

照らすなる三世の佛の朝日には

降る雪よりも罪や消ゆらん

白隱禪師

良醫の門に病者多し

納が見る白隱禪師の人と爲りは、機鋒峻峭といふ點では、其師正受老人に及ばず、其温順玉の如き性格に至りては、先輩の月船和尚に一籌を輸する。而して學問該博、持律清白といふ點では、弟子の東嶺和尚の上には出まいし、又其磊落不羈にして、物に拘泥せざるところは、嗣法遂翁に及ばないでありませうけれども、正受の機鋒、月船の温潤、東嶺の博識、遂翁の卓落を集めて一丸とし、大成したものは、實に闡提窟老人白隱禪師其人であらうと思ひます。古語に

『從來孝子父の名を諱む。』

といふことがありまして、吾々兒孫として、其祖父のことを彼れ是れと批評觀察するのは、洵に忍びざるところであるが、併し又古語に

『機に臨んで師に讓らず。』

といふことがあるから、其方面から見れば、吾々と雖も、白隠禪師に對して、多少の批評を下し得らるゝでありませう。殊に先徳の道風なり、又は人格なりを讚評して、互に其徳を仰ぐといふことは、吾々兒孫として、已むに己まれぬ心情の發露たることもあるのであります。

白隠禪師當時の、禪宗の狀態を観察しまするに、大本山、中本山、小本寺等の寺格を立て、寺閥なるものがあつて、伽藍の壯麗、法式の華美、寺産の擴張、將た又王侯貴紳に親近することに最も力を注ぎ、其及ばざるを是れ憂ふるといふ有様で、單に儀式莊嚴の一方にのみ汲々とし、眞實大法の充實には、一瞥だに與へぬといふやうでありました。愆の如く、禪海滔々として、唯聲名利達に走りつゝある間に、白隠禪師は、俗にいふ孫末寺で、而かも破屋蕭疎、頽廢見るに忍びず、上漏下濕、屋内を傘を翳して歩行かねばならぬ程の無住同様で、そして臥すに夜具なく、食するに蔬菘だになき、彼の東海道原驛の松蔭寺に住しながら、一切の利慾貪念を捨離して、唯熱烈に佛祖傳來の向上の一着子を全提し、唯室丈に端座して、龍蛇を定むといふ概のあつたことは、他の及ばざる禪師の第一特色であつたと言へませう。故に當時同じく化を敷いてゐた古月、月船下の俊才は、眼を敬て、風を仰いで、禪師の爐鞴に參來し、隱山の評した如く「江湖の龍象を奔走せしめ、天下の王候を聳動す。」といふ有様で、夫等の參徒は、松蔭寺を去る數里内に、或は敗寺に假寓し、或は辻堂に安居して、朝參暮請、只管禪師の鉗鎚を受けただのであります。それで禪師は、獨り臨濟の正宗を掲げて、天下に獅子吼

したのみならず、其垂手爲人の手段に至りては、實に灰頭土面、一身を忘じ去つて、請はるゝ儘に錫を轉じ、提携教示親切を極めて、至らざるなき行方でありました。禪師の作たる「紛引歌」、「辻談義」、「ほこり叩き」等を繙いて、其隨機の說法を見るならば、禪師が沱泥滯水して、餘さず滯さず、天下の人を救ひ上げられたことに何人も驚歎するであらう。ところが時の寺閥を擁し、舊套を脱し得ざる老僧輩は、禪師を見ること蛇蝎の如く、其面を見るだに嫌厭する者がありました。けれども「良醫の門には病者多く、爐鞴の所に鈍鐵多し。」といふ如く、凡そ臨濟正傳の禪法を修得せんとする所謂皮下に血ある底の活漢は、翕然として禪師の會下に集り來たりしました。若し夫れ一部の「荊棘叢談」を閲するならば、如何に白隠下多士濟々たりしかを窺ひ知らるゝでありませう。愆て白隠禪師は、佛祖傳來の一着子を以て、舊套を打破し、新宗旨を立し、以て道俗、貴賤、男女、老若を問はず、大甘露門を開いて、所謂五家七宗をも、一鼎に歸入せしめられたのであります。之れを要するに、白隠禪師は、初め一言せし如く、彼の貴族的、寺閥的禪を化して、平民的、素朴的眞禪を打開せられたものであると信じます。

舊套打破固陋警醒

次に禪師の宗旨は、實に臨濟再來的の宗旨でありました。當時禪界の弊風たる暗照禪、默照禪、楊木の禪、涅槃堂裡の禪、三家村裡土地神の禪の如き、長沙和尚の所謂

『學道之人不識眞、唯爲從前認識神、無量劫來生死本、痴人喚爲本來人』
底の相似邪妄の禪を怒罵呵咄し、而して達磨再來的の端的、歷代祖師の眞精神を換骨脱體し來つて、嶄新靈妙なる手段を以て、重々無量の公案を爰に施設せられたのであります。是れ實に始めに根本地を明かならしめ、後差別門に下りて、眞に入り、俗に入り、佛に入り、魔に入り、一々の境界を實地に經驗せしめんが爲めでありました。然るを今時に至り、禪者の或る輩は、白隠禪を以て、階級禪である。梯子悟である。看話禪であるとして、大いに誹謗するものがあります。是れ既に白隠の文言形式に囚はれ、白隠の眞骨頭を忘却したる皮相の下馬評に過ぎませぬ。恠く言ふと雖も、今時苟くも白隠下の兒孫にして、而かも白隠禪師の眞精神を錯會し、看話的に宗旨を取扱ひ、多くの古則公案を受授し、一種の問題を通過したるを以て、佛祖の眞面目を得たりとし、師學共に正傳の的旨を誤り、所謂囚はれたる禪觀に墮在せるあるを見る。若し白隠禪師をして、今日にあらしめたならば、禪師は自ら

提示せし、一切の古則公案を奪ひ去りて、彼等の頭上に、一大鐵槌を直下せらるゝことでありませう。禪師化を遷して、春秋を閱する爰に百五十年、而かも半箇の超白隠底の、大宗匠の出現なきは、禪界に於ける一大痛恨事に非ずして何んであらうか。更に現代濟下の宗師家が、殊更に京都禪、鎌倉禪、隱山禪、卓州派といふが如き洵に狹隘なる分域を劃して、己れに同うする者を喜び、己れに異なる者を悪くみ、眼光豆の如き宗師家と爲り了るに至りては、何んぞ超白隠を以て自ら任じ、何時か禪法興隆の期を待ち得るであらうか。五百年間出の傑匠白隠禪師は、當時萎微として振はず、殆んど明滅の間にあつた法燈の再興者でありました。現今の禪界も又、千年間出の傑匠を要するの秋ではなからうか。吾等は大いに猛省一番せねばなりません。

以上を要するに、白隠禪師は、佛祖的傳の眞精神を、吾が肚のドン底に攝取し、而して之れを換骨脱體して、時代人心を啓蒙し、舊套を打破し、固陋を警醒し、禪法に新生命を興へ、曹洞、臨濟の前途を超え、一切の流儀を立せず、只天下に正令を全提して、日本六十餘州を悉く禪化せしめんとせられました。其見識高邁にして、徳化上下に潤ひたるは、以て白隠禪師を讃え敬仰するに、充分の價値あることを信するものであります。師の滅後神機獨妙の禪師號を勅賜せられ、殊に明治大帝より、正宗國師の諡號を賜ひ、聖表に接せし、蓋し所以なきことではないのであります。若し夫れ老衲が信する如く、白隠禪師の眞精神が恠くの如くであつたならば、更に老衲は思ふ。此吾が禪法を以て、香